

河川基金助成事業

「川は自然の宝箱」 ～わたしたちと多摩川～ 報告書

助成番号：2023 - 7213 - 012

東京都多摩市立連光寺小学校

校長 関 口 寿 也

2023 年度

助成番号	助成事業名		学校名			
2023-7213-012	川は自然の宝箱 ～わたしたちと多摩川～		東京都多摩市立連光寺小学校			
所在地	東京都多摩市連光寺	対象河川名	多摩川・大栗川・勾田川			
対象学年	4 学年(68 人)、5 学年(68 人)	主たる教科	総合的な学習の時間・社会・理科			
河川教育の目標	多摩川の自然に関心をもって体験活動や問題解決学習を行うことを通して、課題追究の力を身に付けるとともに、地域の自然への親しみや愛着を感じながら、自分達がどのように関わり、行動することで持続可能な社会がつけられていくのかを考える。					
育成したい資質・能力	ア：多摩川環境とわたしたちの暮らしとのつながりを知る。イ：調べる方法を身につける。ウ：自分のテーマを決めて、計画を立てて調べる。エ：自然の大切さについて自分の考えを持ち、思いや考えを人に伝える。オ：水の流れや多摩川に関心をもつ。カ：協力して自然を守るために行動する。					
学習活動の内容と成果						
<内容>・4月に学校周辺に降った雨をたどり多摩川に行き着いた。1学期はその河原で植物、野鳥、石、水の流れ、水生生物などについて調査法を含めて専門家から教わる基礎講座を実施。2学期は各自がテーマを決めて探究活動を行い、その結果をもとに調べ学習でさらに探究を深め、国語の授業と絡めて多摩川に関するリーフレットを作成し学年内で情報の共有を図り、多摩川を多面的に捉えた。・7月には自分たちが使った水の行へを追って南多摩水再生センターと河口の大師河原干潟に行き、11月には自分たちが使う水の源となる上流の御岳溪谷を見学した。・3学期はこれまでの学習をもとに多摩川の現在の課題を捉え、SDGs との関連も考えながら学習発表会で1年間の学びと多摩川に関するメッセージを発表した。 <成果>・ガサガサ体験、多摩川での調査活動、社会科・総合見学など、実際に見たり体験したりする活動が多く、年間を通して意欲的に取り組むことができた。・多摩川の上流・中流・下流を見学することで多摩川を一つながりに捉えること、そして多面的に見ることができるようになった。・課題設定→調査→ふりかえり→課題とPDCAサイクルを意識して実践することで探究の方法が身についてきた。・タブレットを使ったポートフォリオを活用して、まとめや発表資料の作成などを効率よく行い、情報共有をより充実したものとできた。						
学びの創意工夫点	・年度の始めと終わりにルーブリックを用いて自己評価を行い、変容を自他共に可視化した。 ・タブレットを活用してeポートフォリオを作成し、記録の積み重ねを容易にして児童の課題設定や課題解決の力を発揮しやすくした。 ・思考ツールを使用することで、思いや考えがわかりやすく可視化され、思考を整理・分類することができ、次のステップに進むことができるようにした。 ・SDGs と関連づけることで学びが身近な題材ではあるが、広がりのあるものであることを認識させることができ、さらに5年生の学習へのつなぎとなった。					
河川教育を通じて見られた子どもの変容	・上記の育成したい資質・能力について、年度当初にとったアンケートと比べると年度末にとった結果は全体的に肯定的な回答が増えている。3年次からの積み上げも感じられる結果となっている。 ・野外での活動の方法も身についてきた。					
、支援者等（複数記入可）						
保護者	外部小学校	外部中学校	外部高校	外部大学	市民団体	専門家等
河川管理者	行政機関、博物館、資料館等		関係団体（漁協、農協）等		企業	その他
支援の概要	市民団体や専門家の方に現地や教室に何回も来ていただき、川の調べ方や生き物の事について教えていただき、保護者や市民団体の方には活動の安全確保のための見守りをしていただいた。					
成果発表	成果作品		発表方法			
	・川新聞（夏休みの課題）、 ・生活・総合発表会でのプレゼン ・多摩市マイクロプラスチック啓発動画へ協力	・多摩市エコ・フェスタでの展示 ・保護者や地域のかたへ向けて発表 ・動画作成時に活動風景の撮影やインタビューなどで協力				
今後の課題・展開						
・調べたことをわかりやすくまとめることはできるが、そこからどのような事が考えられるか、これからどうしていきたいかなど、自分の考えをもつことに課題があった。 ・時間の制約があり、児童の思いや願いを実現するための活動を実施することができなかった。 ・熱中症対策などへの配慮から、活動を制限せざるを得ないことが前年にもまして増えてきた。 ・活動場所での治水関連の工事が集中して行われているため、河川敷の自然環境が著しく改変され、活動が制限されてしまっている。フィールドの確保が今後の大きな課題となっている。						

助成番号	助成事業名		学校名			
2023-7213-012	川は自然の宝箱 ～わたしたちと多摩川～		東京都多摩市立連光寺小学校			
所在地	東京都多摩市連光寺	対象河川名	多摩川・大栗川・勾田川			
対象学年	4 学年 (68 人)、5 学年 (68 人)	主たる教科	総合的な学習の時間・社会・理科			
河川教育の目標	○4 年次の多摩川の学習をもとに、地域の雑木林や谷戸田、そこを流れる水路を含む里山での体験活動、地域の方々との交流を通して、 <u>学び方を身につけ</u> 、地域の環境の良さや問題点に気づき、これからの自分と自然との関わりを考える。○川の源である森の大切さや水を通じた環境のつながりを意識しながら活動する。○理科や社会科などの教科学習において、体験活動で得たものを活用し、 <u>実感のある知識</u> となるようにする。					
育成したい資質・能力	ア：環境や社会の仕組みを理解する。イ：学び方を身につける。ウ：課題をつかみ、考え、判断する。エ：価値を見だし、思いや考えを伝える。オ：人・自然・社会に関心をもち、意欲的に関わる。カ：協力してよりよい社会をつくろうと行動する					
学習活動の内容と成果						
<内容>○里山プロジェクト：4 年生で活動してきた多摩川とのつながりを意識しながら地域の里山林で学習を行った。谷戸田を主な活動場所として、米作りの各種作業を体験。谷戸田を潤す水の流れに注目することを意識した。また、<u>良好な水辺環境である谷戸田の保全活動</u>を行っている方々に会い、様々なことを教わり、調査を体験した。 ○理科：「川と河原の様子」「流れる水のはたらき」「流れる水と土地の変化」の単元では映像教材に実際の多摩川の写真や洪水時の動画などを使い、身近な川の様子で学んだり、校庭で川をつくり流水実験を行ったりした。○社会科：「生活と食料生産」「生活と森林」「生活と環境」などの単元で自然環境の中でも「水」について身近な例として多摩川の学習をふりかえり、教材とした。 <成果>○里山プロジェクト：連光寺の里山林は多摩川の水の源である事を改めて認識した。また、この水が谷戸田を潤し、多くの生き物を育てていることに気づいた。このような体験で気づいた事に基づき調べ学習を進めていく中で、<u>自然と人間の共生</u>やよりよい関わりに向けての考察の視点をもった学習を行うことができた。○理科・社会：理科の各単元では自然の仕組みや命の連続性を学ぶ際に里山での活動が教科を学び身につける力を高め、社会科の関連単元では自然（特に森林）と人間のかかわりについて学ぶが、この学びが里山の学びの視野を広げるといった相乗効果があった。						
学びの創意工夫点	・年度の始めと終わりに <u>ルーブリック</u> を用いて自己評価を行い、変容を自他共に可視化した。 ・タブレットを活用して <u>eポートフォリオ</u> を作成し、記録の積み重ねを容易にして児童の課題設定や課題解決の力を育成した。 ・探究のテーマを自然と人間の関わりについての視点をもっていくために、「食べる」「遊ぶ」「使う」「つくる」「学ぶ」にグルーピングして進めた。 ・SDGs との関連を考えることで、学びへの肯定感、有用感を持てるようにした。 <4 年生とのつながり>教科学習において、4 年次の多摩川での学習をふりかえり想起させるよう促すことで、 <u>実感のある学び</u> につなげる事ができた。					
河川教育を通じて見られた子どもの変容	・ルーブリックの結果、どの項目についても <u>自己評価の向上</u> がみられた。様々な体験活動や調べ学習そして人との出会いを通して、里山や自然の価値や人間との共生について考えてきた過程で、問題解決能力や自己肯定感が向上してきたことが考えられる。 ・4 年次と比べて、より抽象的で概念的な事柄についても考察し言及することができるようになってきている。					
支援者等（複数記入可）						
保護者	外部小学校	外部中学校	外部高校	外部大学	市民団体	専門家等
河川管理者	行政機関	博物館	資料館等	関係団体（漁協、農協）等	企業	その他
支援の概要	都立桜ヶ丘公園サービスセンター、都立桜ヶ丘公園谷戸田ボランティア、林野庁森林総合研究所高尾森林科学園、東京都動物園水族園協会イモリ保全チーム、パルテノン多摩学芸員の方々に現地での調査活動や体験活動でサポートしていただいた。					
成果発表	成果作品			発表方法		
	「連光寺の里山」についての各自のテーマでのプレゼンテーション資料の作成			生活・総合発表会での発表		
今後の課題・展開						
・天候、その他の影響で、例年ほどの野外での活動を行うことができなかった。今後もフィールドの状況が整わないことが考えられるので、対応が必要。 ・各自が捉えた今後の課題について理想的な手立てを考えることができた面もあるが、実現するところまでは遠い。まだ、自分事として考えられていないためと考えられる。この後は自分にできる事を模索して実行に移して行く展開をしたい。						

河川教育計画書【複数学年4年生】

1.助成事業名	川は自然の宝箱 ～わたしたちと多摩川～					学校名	東京都多摩市立連光寺小学校			助成番号: 2023－7213－012		
2.河川教育の目標	○多摩川の自然に関心をもって体験活動や問題解決学習を行うことを通して、課題追究の力を身に付ける。 ○体験活動や問題解決学習を通して地域の自然への親しみや愛着をもち、自分達がどのように関わり、行動するか考えることができる。											
3.育成したい資質・能力												
4.学年／人数	4年生／68名											
5.単元構想												
月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	
単元目標	川は自然の宝箱 ～わたしたちと多摩川～ 多摩川で「発見」やはてなを見つけよう 多摩川博士になろう 多摩川とわたしたち ○谷戸田や地域の水の流れが多摩川につながることを調べ、自然の様子や多摩川とのつながりを考える。 ○多摩川での「川の観察」「ガサガサ」「バードウォッチング」などの共通体験を通して、川の自然に慣れ親しみ、課題を設定する。 ○自分のテーマを決めて、追究する計画を立て、現地調査や資料などを活用して調べる。 ○調べてわかったことを作品にまとめる。また、調べたことから多摩川の自然や自分たちの関わりについて考える。 ○まとめた作品をもとに調べたことを発表する。 ○これからの多摩川がどうあって欲しいか、自分には何ができるかを考え、仲間と話し合い、実践する。 関連教科:総合:27時間、国語:8時間、社会:15時間、理科:14時間、道徳:2 64時間 関連教科:総合:25時間、国語:12時間、社会:18時間、理科:17時間、道徳:4 76時間 関連教科:総合:18時間、国語:20時間、社会:16時間、理科:11時間、道徳:4 69時間											
	主な学習活動	「連光寺に降った雨はどこに行くのだろう？流れをたどってみよう」(6時間) ・川の流れをたどる ・たどり着いた多摩川で、春の多摩川の観察を行う。 「春の多摩川での活動」(6時間) ・多摩川を知ろう。 ・植物・野鳥の観察の方法を知る。 「川の流れを感じよう」(6時間) ・川の中に入り、生物の観察や水の流れの体感体験を行う。 ・川での安全な活動を行うための基本的なルールを学ぶ。 ・水質や石の観察も行い様々な気づきを促す。 「川の中の生き物観察」(6時間) ・ガサガサ体験 ・水量などに応じて川流れ体験 ・河原の生き物の観察も行う。 1学期の学習のまとめ(3時間) ・各自の課題設定に向けて興味・関心を絞り込む ・山形県の高松小学校に多摩川の紹介をする。 「課題を決めて調査活動の準備をする」(5時間) ・1学期の活動の振り返り ・自分の課題を決定する。 ・現地に行って調べることを計画する。 ・必要なものを準備する。 「多摩川での調査活動Ⅰ」(5時間) ・各自の課題に沿った活動を行う。 ・各テーマ毎のグループにまとまり活動する。 ・テーマに合った支援の方をできる限りついてもらえるようにする。 ・活動後ふりかえりを行いポートフォリオを作成。タブレットでの発表の計画を立てる。 「多摩川での調査活動Ⅱ」(8時間) ・前回の活動を振り返り、活動の課題を明確にし、準備をする。 ・各テーマ毎のグループにまとまり活動する。 ・テーマに合った専門家に支援いただく。 ・活動後にふりかえりを行いポートフォリオを作成。各自のタブレットにも保存する。 ・次回の調査の計画を立てる。 まとめの活動(7時間) ・各自の課題について、これまでの活動の記録、本、インターネットなどを使いまとめる。 ・各自がまとめの作品を作る。 ・学年内で発表会を行う。 まとめ・発表(18時間) ・多摩川みらい会議 さらに学年全体でまとめを行い、多摩川についてみらいの多摩川について想いを深め、自分たちにできることを考える。 ・エコフェスタ、子どもシンポジウム、二分の一人式など機会を捉えて保護者や地域の方たちに向けて成果を発信する。 ・生活・総合発表会で発表する ・機会を捉えて、川で活動している他校と交流して視野を広げる。 ・自分達にできることを考えて、実行できることは行動する(ゴミ拾い、ポスター貼り)また、自宅や学校での環境に配慮した行動が生活ができるようになることを心がける。 夏休みの課題 ・「川の新聞」作り ・自由研究 水道キャラバン受講 自分達の飲み水はどこから来るのか？ 社会科見学 ・多摩川の河口の干潟（大師河原干潟館）を訪ね、体験活動を行う。 ・南多摩水再生センターの見学を行う。 自分の使った水の行方を 下水道キャラバンの受講 南多摩水再生センターの見学と合わせて、自分たちの使った水がどうなるのかを考える。多摩川との関係を考える機会とする。 社会科見学 ・多摩川の上流(御岳渓谷)を訪ね、体験活動を行う。 ・多摩川の上流、中流、下流の様子を比べる。										
		評価の観点	・自分から進んで多摩川での体験や観察の活動に取り組んでいる。 ・活動で感じたことを多角的にとらえ伝え合うことができる。 ・活動で出会う様々な人と進んでかかわりながら学ぶことができる。 ・自分が楽しく活動できたかを振り返ることができる。 ・自分や友達の見え、追究に感動したり、共感したりすることができる。 ・調べたことを自分なりにまとめることができる。 ・相手に伝わるように、表現方法を工夫して、多摩川を知らない山形の小学生に伝えることができる。 ・体験を通して自分なりの疑問をもつことができる。 ・話し合いを通して、新たな疑問をもつことができる。 ・計画を立て、見通しをもちながら課題解決の準備ができる。 ・自分なりの課題をもち、調べ方を考え調査活動を行うことができる。 ・進んで質問したり、調べたりできる。 ・調べたことやわかったことを友達同士で伝え合い情報の共有化を図ることができる。 ・1目の調査活動で出てきた課題をさらに追究することができる。 ・自分たちの使った水がどこに行くのかを思うことができる。 ・川の上流から河口までの川の様子の違いを感じることができる。 ・上流、中流と河口では生息する生き物が異なっていること、川の周りの様子が異なっていることに気づく。 ・調べたことを自分なりにまとめることができる。 ・相手にわかるように、表現方法を工夫して調べたことや自分の考え方を伝えることができる。 ・自分が楽しく活動できたかを振り返ることができる。 ・自分や友達の見え、追究に感動したり、共感したりすることができる。 ・体験・まとめ活動を通して自分たちにできる事は何かを考えて行動につなげる事ができる。									

河川教育 学習活動報告書 【複数学年 4 年生】

1.助成事業名		川は自然の宝箱　～わたしたちと多摩川～					学校名		東京都多摩市立連光寺小学校				助成番号		2023-7213- 012	
5.実際にを行った単元構成　川は自然の宝箱																
月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3				
学習活動の結果	多摩川で「発見」や「はてな」をみつけよう					多摩川博士になろう					多摩川とわたしたち					
	○谷戸田や地域の水の流れが多摩川につながることを調べ、自然の様子や多摩川とのつながりを考える。○多摩川での「川の観察」「ガサガサ」「バードウォッチング」などの共通体験を通して、川の自然に慣れ親しみ、課題を設定する。					○自分のテーマを決めて、追究する計画を立て、現地調査や資料などを活用して調べる。○調べてわかったことを作品にまとめる。また、調べたことから多摩川の自然や自分たちの関わりについて考える。○まとめた作品をもとに調べたことを発表する。					○これからの多摩川がどうあって欲しいか、自分には何ができるかを考え、仲間と話し合い,実践する。					
	関連教科：総合学習 26 時間、理科 14 時間、社会 15 時間、国語 8 時間					関連教科：総合学習 31 時間、理科 17 時間、社会 18 時間、国語 12 時間					関連教科：総合学習 14 時間、理科 11 時間、社会 16 時間、国語 20 時間					
	流れをたどってみようⅠ（8） ・多摩川の赤ちゃん探し。学校近くの湧水から地域の流れをたどり多摩川とつながることをたしかめる。 ・地域の水の流れ。桜ヶ丘公園～水車公園		流れをたどってみようⅡ & 川の生き物観察共通体験Ⅰ（5） ・水車公園～乞田川と大栗川合流点～多摩川までをたどる。多摩川河川敷で春の多摩川の観察 ・川の調べ方を教わりながら、様々な生き物とてあい、川のことを知る。特に植物と石、野鳥について。 ・ふりかえりで発見や疑問や考えをまとめ、気づきを共有して、次につなぐ。		川の生き物観察共通体験Ⅱ（8） ・川原の観察、ガサガサ体験を行い、多摩川の生き物、環境の調べ方を教わり、発見、疑問を見つける。 ・ふりかえりを行い、疑問や調べたいことの整理を行い、各自の課題を決定する。	下流見学（6） ・多摩川の下流域、大師河原干潟館に行き、河口干潟を見学 ・自分たちが使った水が処理される、南多摩水再生センターの見学	課題別調査体験Ⅰ（10） ・探究するテーマを決める ・自分の課題を追究するための調査の計画を立てる。 ・課題毎にグループで調査を行う。 ・調査でわかったことをまとめ、仲間と情報を交換してあらたな課題を立てて次の調査にむけて考える、準備する。	課題別調査体験Ⅱ（8） ・これまでの学習でわかったことやさらに調べたいことを整理して、次の調査計画をたてる。 ・課題毎にグループで調査を行う。 ・調査でわかったことをまとめ、仲間と情報を共有し、考えを深める。	調べ学習・まとめの活動（10） ・これまでの学習でわかったことやさらに調べたいことを整理し、図書資料、インターネット資料、専門家に聞くなどしてさらに追究する。 ・まとめの作品づくりをおこなう。	発表会を開くⅠ（6） ・まとめ作品をもとにクラス、学年での発表を行なう。 ・自分の考えを発表しあい、友達の意見を聞くことで考えを広げたり、深めたりする。	多摩川みらい会議を開く（10） ・これからの多摩川がどうなってほしいか、自分たちはどのようにかわりたいかはなしあい、発表会に向けて準備する。 ・SDGs との関連を考えて、発表資料を作成。	発表会を開く（4） ・生活科・総合的な時間の学習発表会として、他学年の児童、保護者に向けて発表する。 ・発表会をふりかえり1年間のまとめと考えをまとめる。				
	東京都水道局による水道キャラバン受講		東京都下水道局による下水道キャラバン受講													
6. 得られた成果 年度当初と終わりに取ったアンケートから児童の変容を読み取った。多摩川を大テーマにした探究学習を通して評価規準にあげた育成したい資質・能力は多くの児童で向上したと評価された。実際に児童の活動の様子を見ていても、多摩川の学習への関心度は1年間を通じて下がることはなく、多くの児童が興味をもって主体的に学習を続けていた。ひとりひとりがその子なりに進んで活動に参加して、粘り強く探究し、わかったことをまとめ、発信する姿が多く見られた。																
7. 河川、水を学習の題材・素材としたことによる効果 多摩川に関する興味関心が下がることなく、多くの児童が活動に意欲的に取り組めたのは、実際に体験したり、観察したりする活動が多いことが関係あるのではないかと考える。様々な活動を現場に行って繰り返し行うことは、児童の主体的な活動の原動力となる。 川には多様な切り口があり、総合的な学習だけでなく、多くの教科の学習にも容易に関連づけることができる。また川は多くの人をつなぐ出会いの場ともなっており、児童の五感、心身を刺激する教材の宝箱といえることができる。																

河川教育 学習活動報告書 【複数学年 5 年生】

河川教育計画書【複数学年5年生】

1.助成事業名		川は自然の宝箱 ～わたしたちと多摩川～				学校名		東京都多摩市立連光寺小学校		助成番号:2023-7213-012																																																									
2.河川教育の目標		○4年次の多摩川の学習をもとに、地域の雑木林や谷戸田、そこを流れる水路を含む里山での体験活動、地域の方々との交流を通して、学び方を身につけ、地域の環境の良さや問題点に気づき、これからの自分と自然との関わりを考える。○川の源である森の大切さや水を通じた環境のつながりを意識しながら活動する。○理科や社会科などの教科学習の中で体験活動で得たものを活用し、実感のある知識となるようにする。																																																																	
3.育成したい資質・能力		ア:環境や社会の仕組みを理解する。 イ:学び方を身につける。 ウ:課題をつかみ、考え、判断する。 エ:価値を見だし、思いや考えを伝える。 オ:人・自然・社会に関心をもち、意欲的に関わる。 カ:協力してよりよい社会をつくろうと行動する。																																																																	
4.学年／人数		5年生 / 68名																																																																	
5.単元構想																																																																			
月		4		5		6		7		8		9		10		11		12		1		2																																													
単元目標		単元名:「連光寺SATOYAMAプロジェクト」																																																																	
		連光寺里山調査隊						SATOYAMA博士になろう						SATOYAMSAから未来を考えよう																																																					
		都立桜ヶ丘公園の雑木林や竹林、谷戸田での環境保全の活動(米作り、タケノコ掘り、イモリ調査など)や動植物を調べる活動を通して、地域の自然の価値について考え、自分のテーマを探る。						自分のテーマに沿って調べたことや考えたことを作品にまとめ、発表会を開いて交流し、里山と生き物のつながりや森の役割などについて考え、自然とわたしたちの生活の関わりについて考えを深める。						自分たちの考えや想いを保護者や地域の方々に発信る。これまでの里山での活動や、炭焼き体験から森と人のつながりを考え、現代の地球環境の課題を見つめ、自分たちにできる事は何かを考え、行動につなげる。																																																					
		関連教科:総合:22時間、国語:4、社会:5、理科:32時間、道徳:4時間						67時間						関連教科:総合26時間、国語10時間、社会:20時間、理科:12時間、道徳:2時間						70時間						関連教科:総合22時間、国語7時間、社会:17時間、理科:4時間、道徳4時間						54時間																																			
主な学習活動		・森へようこそ ～森の中の水を探せ～ 森の中を歩き回り、湿ったところや水のたまっているところを探し出す。地域の里山について知る。						森の恵みⅠ タケノコ掘り 竹林管理の一貫として桜ヶ丘公園の竹林で、タケノコ掘りをする。 地域の方にも手伝ってもらいながら行う。						森を知る①～ 桜ヶ丘公園おの自然を探索し、様々な気付きを積み重ねる。						森を知る② イモリの研究、保全活動を行っている方々からイモリ調査について現場で体験しながら教えていただく。谷戸田の水生物についても調査しながらイモリの保全についてさらには里山の水環境について考える機会を得る。						森を知る③④(8時間) 個人ごとのテーマを設定し、追究する。 ・各自の課題に沿った活動を行う。 ・各テーマ毎のグループにまとまり活動する。 ・テーマに合った支援の方をできる限りついてもらえるようにする。						まとめの活動 ・各自の課題について、これまでの活動の記録、本、インターネットなどを使いまとめ、作品にする。 ・発表会を行う。 ・市内外の他校と交流しお互いの学習成果を発表し合う。 ・いろいろな森と地域を知り視野を広げる。						まとめ・発表 ・さらに全体でまとめを行い、地域の自然についての考えを深める。 ・地域の環境に関する提言書を作成し、実行が可能なことは行動につなげる。																													
		・里山についてのイメージマップの作成。 ・調べてみよう里山ってどんなところ？						森の見方・さわり方 都立桜ヶ丘公園を探索して、普段見過ごしてきた様々な生き物や里山の営みの痕跡を発見し気づく。						谷戸田・田起こし作業を通して谷戸の自然を体感する。 ・田植え作業を通じて田んぼにとっての水の重要性を感じる。 ・稲の生長と田んぼの生き物観察						理科 ・命のつながり 植物のつくり、生命の連続。 ・メダカの誕生						理科 ・天気と情報: 台風による河川の増水とその被害などについて、多摩川の増水時の様子を観察する。 ・流れる水の働き: 4年生の多摩川での学習時の石や流れの様子を教員に聞いてみる。 ・自分たちで川の流れをつくり川の流れのはたらきについて考える。						谷戸田 ・田んぼの観察 ・稲刈り ・脱穀 ・粃すり、精米 ・収穫祭						社会科・わたしたちの生活と森林: 多摩川源流の水源涵養林について学ぶ ・環境を守る。様々な環境を守る活動を学ぶ。 ・自然災害: 自然と人間の生活との間の問題を考える。多摩川の洪水ハザードマップなどをを用い身近な問題として防災について考える。 過去の人々がどのように自然と関わってきたのかを里山での生活の知恵から学び、現代の地球環境の課題を解決する						森の恵みⅡ 炭焼き 竹林管理の一貫としての竹の伐採とその竹を利用した炭作り体験。 6年生でのエネルギー環境問題へとつなげていく。						・里山についてのイメージマップの作成。 ・春に書いたイメージマップと比較する。																	
		・自分から進んで体験や観察の活動に取り組んでいる。 ・活動で感じたことを多角的にとらえ伝え合うことができる。 ・活動で出会う様々な人と進んでかわりながら学ぶことができる。 ・自分が楽しく活動できたかを振り返ることができる。 ・自分や友達の発見、追究に感動したり、共感したりすることができる。						・体験を通して自分なりの疑問をもつことができる。 ・話し合いを通して、新たな疑問をもつことができる。 ・計画を立て、見通しをもちながら課題解決の準備ができる。						・自分から進んで体験や観察の活動に取り組んでいる。 ・体験したことや調べてわかったことをワークシートなどにわかりやすくまとめる事ができる。 ・活動で出会う様々な人と進んでかわりながら学ぶことができる。 ・谷戸の水辺の自然の豊かさや人とかかわりに気づくことができる。						・4年生で学んだ多摩川の生き物の生態や命のつながりを思い出しながら学習する。 ・メダカの飼育については、多摩川で捕まえた魚を飼育しているので、川魚の繁殖も併せて観察することができる。						・自分なりの課題をもち、調べ方を考え調査活動を行うことができる。 ・進んで質問したり、調べたりできる。 ・調べたことやわかったことを友達同士で伝え合い情報の共有化を図ることができる。 ・体験したことや調査結果をポートフォリオとして積み重ねていくことができる。						・教科の学習で得た知識を実際のフィールドで体験したものと結びつけて考えることができる。 ・体験を通して様々な問題を自分事としてとらえることができるようになる。 ・環境に配慮した行動がとれるようになる。						・自分から進んで体験や観察の活動に取り組んでいる。 ・活動で感じたことを多角的にとらえ伝え合うことができる。 ・活動で出会う様々な人と進んでかわりながら学ぶことができる。 ・谷戸の水辺の自然の豊かさや気づくことができる。						・調べたことを自分なりにまとめることができる。 ・相手にわかるように、表現方法を工夫して調べたことや自分の考え方を伝えることができる。 ・自分が楽しく活動できたかを振り返ることができる。 ・自分や友達の発見、追究に感動したり、共感したりすることができる。 ・これまでポートフォリオに残してきた情報を活用することができる。						・教科の学習で得た知識を実際のフィールドで体験したものと結びつけて考えることができる。						・持続可能な社会を支えるために、人と自然の共生について、自分なりの考えを持つことができる。 ・自分ができることは何かを考えて、行動につなげることができる。						・春に書いたイメージマップと1年間の学習を終えて書いたマップを比較して、自己の成長に気づき自尊心を高めることができる。					
		評価の観点																																																																	

助成番号	助成事業名	学校名
2023-7213-012	川は自然の宝箱 ～わたしたちと多摩川～	東京都多摩市立連光寺小学校



学習活動名：川たどり

日 付：2023/4/12

見られた子どもの姿：

学校の近くの公園には水がたくさんある。それをたどって
いくと大きな流れになり、最後は多摩川にたどり着いた。

<子どもの気づき>

普段見ている流れだけど、これは多摩川の赤ちゃんだった
んだね。学校のまわりには川の赤ちゃんがたくさんある。



学習活動名：水道キャラバン

日 付：2023/5/29

見られた子どもの姿：

東京都水道局の出前授業。社会科の勉強と多摩川の学習が
リンクする場面。自分たちの飲み水がどこからやってくるの
か？「水源涵養林」「水の循環」などのキーワードが出てく
る。

<子どもの気づき>

普段何気なく使っている水道水もたくさんの人の手によっ
て運ばれてくるんだな。多摩川の水は飲めるんだ！



学習活動名：下水道キャラバン（出前授業）

日 付：2023/6/19

見られた子どもの姿：

今年は7月の南多摩水再生センター見学の前に出前授業
を受講。実際に見学する前に、自分たちが使った水の行方
を考えることができた。水循環のことを意識したり、
過去の汚い多摩川をきれいにしたのが下水道の整備だっ
たことなどを学んだ。

助成番号	助成事業名	学校名
2023-7213-012	川は自然の宝箱 ～わたしたちと多摩川～	東京都多摩市立連光寺小学校

学習活動名：1 回目の社会科見学 （南多摩水再生センター 見学）

日 付：2023/7/4

見られた子どもの姿：

自分たちが使った水はどうなるのか？

朝自分たちが使った水が流れ込む南多摩水再生センターを見学。朝自分が流した水が数十時間後には様々な処理を経て多摩川に放流される。この水再生センターは放流される場所を見学できるのがよいところ。この放流点のすぐ上流が活動場所となる。

<子どもの気づき>

自分が使った水が多摩川に流れ込むことを目の当たりにしてびっくり。流す水にも気をつけないといけない。



学習活動名：社会科見学 1 回目 （河口干潟）

日 付：2023/7/4

見られた子どもの姿：

自分たちが使った水が水再生センターを経て下流に流れていき、最後に東京湾にたどり着く。学校近くの川の赤ちゃんから始まって多摩川河口大師河原干潟までの水の旅。バスの車窓から刻々と変わっていく川の様子を見学していく。海まであと少しの場所は周りの様子も違い新鮮な驚きがたくさんあり、たくさんのカニと出会えた水の旅。

<子どもの気づき>

たくさんのカニが出迎えてくれて、びっくり！
水のおい、手ざわり、生き物、地面の様子など全てがちう。



学習活動名：テーマ別の探究活動

日 付：2023/10/4,11,17

見られた子どもの姿：

1 学期に共通体験した川の様子から各自が追究したいテーマを決めて探究活動を行う。テーマは水質、水の流れ、野鳥、石、魚、植物、ゴミ、動物、歴史、橋など。現地での活動は 2 回。雨天の日は専門家をゲストティーチャーとして教室に迎えてレクチャーしてもらったり、活動計画のアドバイスをもらったりした。

<子どもの気づき>

思っていたのとは違う事が起こったり、道具がうまく使えなかったりと悪戦苦闘。しかし、粘り強く活動していた。化石を発見したり、珍しい植物を見つけたり、思わぬ発見も。



助成番号	助成事業名	学校名
2023-7213-012	川は自然の宝箱 ～わたしたちと多摩川～	東京都多摩市立連光寺小学校



学習活動名：探究活動

日 付：2023/9～10月

見られた子どもの姿：

活動を支えてくれるのは、多摩水辺の楽校の方々や地域の専門家の方たちだ。そして、保護者の方々も見守りにきてくれる。

<子どもの気づき>

何回も来てくれるので、すっかり顔なじみに。ニックネームで呼びかけるまでに。



学習活動名：社会科見学第2回目（御岳溪谷）

日 付：2023/11/24

見られた子どもの姿：

多摩川の上流の様子を見学するために、御岳溪谷のロックガーデン付近を探索した。中流での活動を支援してくれた宮田さんをガイドに迎え御岳の水と多摩川のことを聞きながらの見学。上流の様子はこれまでの多摩川とはまったく違い、大きな岩や川幅の狭さなど違いを発見。

<子どもの気づき>

溪流の水は冷たく、きれいに見えた。しかし水質を調べていた児童が必ずしもきれいとは言えないポイントを検出した。



学習活動名：生活・総合発表会

日 付：2024/2/17

見られた子どもの姿：

全校で行う生活・総合発表会。保護者、地域の方々、活動を支えてくれた多摩水辺の楽校の方々や地域の専門家の方たちを招いて発表会を行った。

12月から各自のまとめを行い、その後グループ、クラス、学年と話し合いを通して情報共有を行い、多摩川についての考えを深めてた。

<子どもの気づき>

多摩川を今のまま、色々な生き物がすむきれいな川であって欲しい。

自分にもできる事をやっていきたい。

助成番号	助成事業名	学校名
2023-7213-012	川は自然の宝箱 ～わたしたちと多摩川～	東京都多摩市立連光寺小学校



学習活動名：谷戸田で田起し、田植え

日 付：2023/5/30

見られた子どもの姿：

初めて谷戸田に入った児童も多いため、最初は戸惑っていた児童もしばらくすると慣れてきて、泥の感触を味わっていた。田起しでは全身泥だらけになる児童も。

泥田の中には、ケラやタイコウチ、ドジョウなどのいきものがいた。

<子どもの気づき>

最初はいやだったけど、泥の中に入ってみると楽しくなっていました。珍しい生き物もいて、もっと知りたくなった。



学習活動名：5 年 谷戸田の水生生物調査

日 付：2023/7/12

見られた子どもの姿：

春から活動している谷戸田は 1 年中田んぼに水が張っている冬水田んぼ。景観保全のため再生した都立公園内の田んぼは色々な生き物にとって良好な生息環境となっている。ここで水生生物の保全活動を行っている動物園水族館協会の方たちに関わってもらっている。

<子どもの気づき>

「里山の生き物は水がないと生きていけない。」「谷戸田の水が涸れるとたいへんだ」と気づいた子どもがつぶやいた。



学習活動名：5 年生理科 流れる水のはたらきと土地の変化

日 付：2023/10/6

見られた子どもの姿：

水の流れをつくって水のはたらきを調べる授業。実際に校庭の土を掘って川をつくる。4 年次に御岳溪谷に行ったときのことや河口の干潟の様子を思い出すように声がけすると思い出しながら活き活きと活動していた。

<子どもの気づき>

土を掘り始めたら、4 年生の時の多摩川の様子を思い出して、いつの間にか立派な川があらこちらにできていた。実際の川は確かにこんな風になっていたよね？！

助成番号	助成事業名	学校名
2023-7213-013	川は自然の宝箱 ～わたしたちと多摩川～	東京都多摩市立連光寺小学校



学習活動名：炭焼き体験活動

日 付：2024/1/30-31

見られた子どもの姿：

炭焼き体験時の午後に森林教室を実施。森林総合研究所の大石先生には昨年同様、森林の仕組み、特に物質循環についてお話しをしていただいた。水を含む様々なものが循環していることを野外で実物を前に語っていただきました。難しいお話しでしたが、とても集中して聞いていた。

<子どもの気づき>

里山の生き物はつながり合って生きている。どれも欠くことのできない存在だ。



学習活動名：生活・総合発表会

日 付：2023/2/17

見られた子どもの姿：

この日に向けてこれまでの1年間の活動を振り返ってまとめをした。「里山」をひもとくために、大きく分けて「食べる」「遊ぶ」「使う、つくる」「学ぶ」の観点から里山と人間の関わりを考えた。「4年生の時からタブレットを使いこなしてきている子どもたちのプレゼンテーションはみごと。」

<子どもの気づき>

- ・この地域の生き物は全部繋がっている。
- ・自然の恵みがたくさんある。持続可能な利用をするには？
- ・地域への愛着とその基盤となっているものへの洞察がうかがえる発表が多数あった。



学習活動名：SDG s との関連づけ

日 付：2023/4～

見られた子どもの姿：

生活・総合発表会では全校的な取り組みとして、学年の発達段階に応じて、それぞれの活動がSDG s とどのような関連があるかを意識させるようにした。

このように意識付けすることで、視野が広がり、自分が持続可能な社会をつくっていくことにかかわっていることを自覚することができ、自己肯定感を育むことが期待される。

マイクロプラスチック啓発動画



近年、世界的に海洋へのマイクロプラスチックの流出が問題となっています。マイクロプラスチックは微細なプラスチックごみ（5ミリメートル以下のもの）の総称で、飲み物や食べ物を通じて人体に取り込まれやすく、大きなプラスチックと比較して人体へのリスクが高いといわれているなど私たちの日常生活とも大きく関係しています。

多摩市では、令和4年度に、中央大学と連携し、乞田川、大栗川などでマイクロプラスチック流出実態調査を行ったところ、すべての地点でマイクロプラスチックが確認されました。この問題について市民一人ひとりの意識啓発・具体的な行動につなげていく必要があり、今回、市民団体や市内中学校にも協力いただき啓発動画を制作しました。

現在、啓発動画はYouTube 多摩市公式チャンネルで配信中です。皆さん、ぜひご覧ください！

1. 動画内容

- ・ 中学校でのマイクロプラスチックの講義風景
- ・ 多摩川の生き物観察や大栗川清掃活動に参加した小学生へのインタビュー
- ・ 川ごみを減らすために、私たちが取り組むべきこと

2. 配信 YouTube 多摩市公式チャンネルで配信（8分）

<https://youtu.be/kyiBIFJ4Jzc>



多摩市マイクロプラスチック啓発動画
～身近な水辺の小さな大問題～
＝YouTube

○制作 多摩市環境部環境政策課

○協力 多摩市立多摩中学校 よみがえれ、大栗川を楽しむ会 小山貴弓（みず多摩）
多摩市立多摩小学校

令和5年度 研究紀要

校内研究テーマ

「主体的な思考過程を積み重ねる教育活動の工夫」
～「持続可能な学び」 My SDGs～



多摩市立連光寺小学校

SDG sの先に見えるもの

校長 関口 寿也

2023 年は世界的な高温の年でした。記録としてここに留めておきたいと思います。

2023 年は太平洋赤道域の日付変更線付近から南米沿岸にかけて海面水温が平年より高くなるエルニーニョ現象の年であったため、これまで日本では冷夏になるのが定説でした。米を初めて輸入する事態となった大冷夏の 1993 年もまさにその年です。これまでの真夏日の記録は、2010 年の 71 日、次点は 2004 年の 70 日。次は 2022、2018、2012 年の 66 日です。2010 年代以降の急激な温暖化が如実にうかがえます。では 2023 年はどうだったかという、真夏日は 90 日の記録更新の年でした。2000 年代以降の気温観測の統計方法の変更を加味したとしても驚くべき突出した記録の上書きです。IPCC の第 5 次報告書(AR5)をもとに、環境省が作成した「2100 年の天気予報」では、温暖化対策が進まなかった想定で、東京では真夏日が 107 日になると予測していましたが、その数字ももはや過小評価であったと感じざるを得ません。

そんな真夏日がようやく収まってきたことと時を同じくして、英国南極観測局の研究チームは 2018 年に IPCC から出された特別報告書にある気温上昇を 1.5℃に抑えたとしても、南極の棚氷が融解していくという結果を導き出しました。海面が最大 5.3m 上昇する量であるとの報告以上にショッキングであったのは、ティッピングポイントに至ってしまった可能性があるということでした。それは温室効果ガスの排出を今すぐにゼロにしても温暖化が進行してしまうことを意味しています。10 月に米国の研究者たちがまとめた 2023 年の「気候変動報告書」でも、今夏の世界的猛暑が地球の過去 10 万年で最も暑かった可能性があるとし、地球が「未知の領域」に入ったと指摘しています。また、ドバイでの COP28 の直前、世界気象機関(WHO)は、10 月末までの記録では世界の平均気温が 1.4℃上昇していると発表しました。そんな状況に焦燥感が漂っていた年が明けた 1 月。カリフォルニア州バークレーで気候科学のための地温データ分析を行っているバークレーアース(Berkeley Earth)は、2023 年の気温が産業革命時より 1.54℃(±0.06℃) 上回ったと“地球気温レポート”で発表しました。2015 年に国連気候変動枠組条約締約国会議(COP21)で合意されたパリ協定、及び 2018 年に仁川で行われた気候変動に関する政府間パネル(IPCC)の総会では、「1.5℃特別報告書」において、地球の平均気温を産業革命以降 1.5℃に抑えなければ、地球環境はティッピングポイントを超えて様々な災害を連鎖的に引き起こす可能性が高くなると言われてきました。「1.5℃の約束」と言われているものです。その 1.5℃を突破してしまったことになります。世界気象機関(WHO)の発した 1.4℃上昇という発表に残された 0.1℃の砦は、わずかひと月ばかりで陥落することになったのです。気候変動の専門家曰く、2023 年の気温の特異な上昇は「上振れ(イレギュラーで高く振れること)」の可能性もあるとのことでした。

私たちが昨年度から取り組んでいた、学習内容と SDGs の関連付け、及び児童のその認識は、学んだ事柄によって培った価値観が、自分が役に立っている、自分はこれでよいのだといった自己有用感や自己肯定感も育むことができると考えての研究でした。単元計画の節目で SDGs を振り返らせたり、学びと目標を照合するといった具体的な授業展開例を提示してきたことで、児童が学校での学習が SDGs と結びついているという認識や実感はもてたと感じています。地球環境を憂いて世界で必死に取り組んでいることと学校での学びがようやくリンクした学習過程でした。しかし、次に私たちが直面したのは、私たちの手で変えようのない現実でした。例えば 6 年生の取り組む「再生可能エネルギー」。様々な発電の可否は学べても、実行できなければ机上の空論です。そう、SDGs は実行が伴って初めて目標に近づくのですから。“子供”にそれは必要のないことでしょうか。前段で述べたように、温暖化はすでにティッピングポイントを超えた可能性もあるこの時に、それでよいのでしょうか。持続可能な社会づくりを目指して、私たちは ESD を進めてきました。それは次世代の人材育成に不可欠な取り組みであることは変わりません。けれども、現状を正視するとそれだけで教育の果たす役割が十分であるとは思えなくなってきました。子供たちが社会に出た時に、どのように考え立ち振る舞っていくべきなのか、それを追求したのが ESD であったとすれば、それをさらに具体的にどのような手段で進めていくのかを身に付けていく必然性に迫られます。私たちには「アントレプレナーシップ」が見えています。次年度、その鼻緒に取り掛かる所存です。残された時間はそれほど多くはありません。

研究の概要

1 研究主題

令和5年度研究テーマ

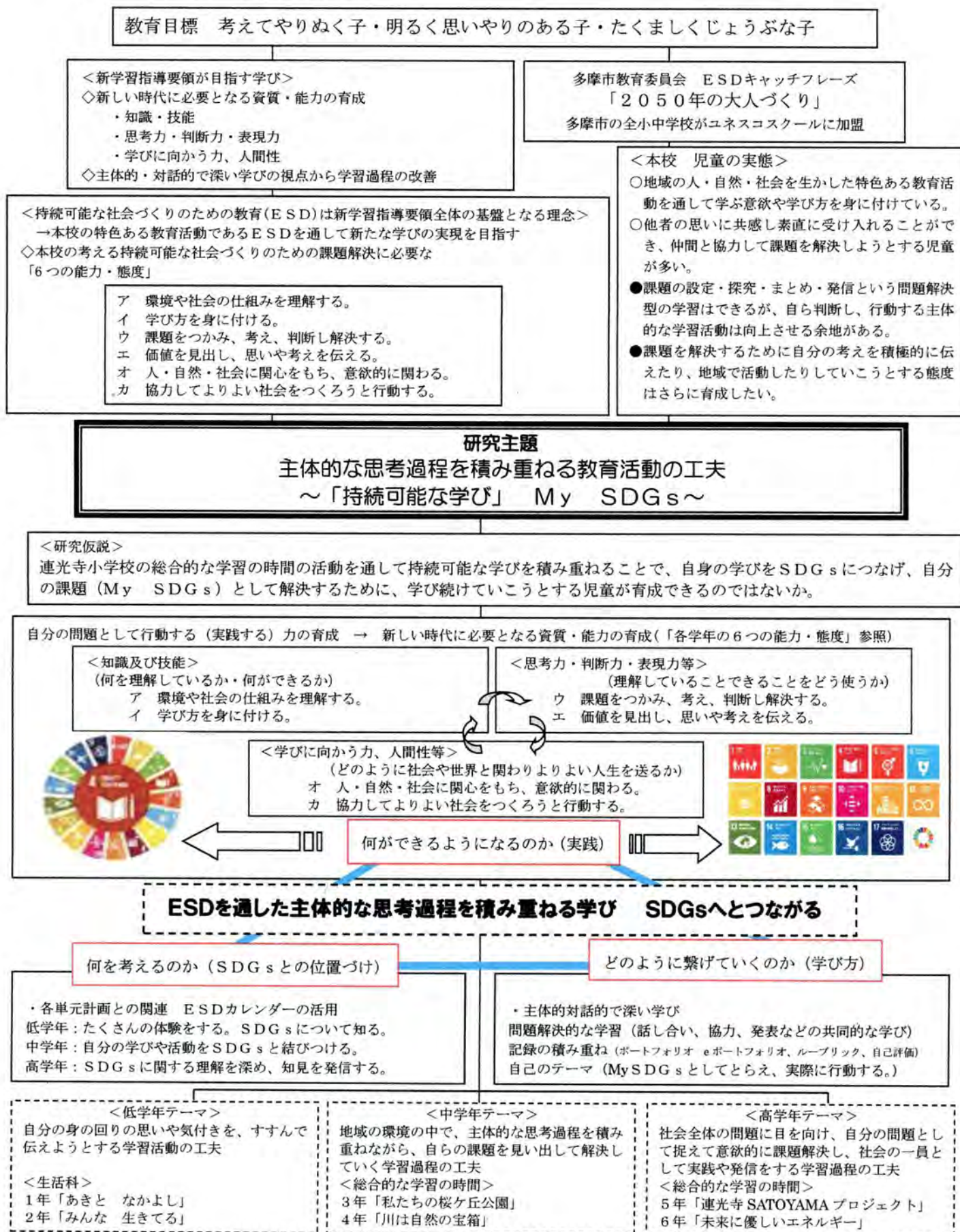
主体的な思考過程を積み重ねる教育活動の工夫
～「持続可能な学び」 My SDGs～

2 主題設定の理由

本校では、総合的な学習の時間が始まった当初より、生活科や総合的な学習の時間の中で地域の特色を生かすための研究を進めてきた。その後、多摩市全体でESDに取り組むことになり、ESDで求められている教育の在り方と連光寺小学校の研究活動に共通点が多かったこともあり、ユネスコが推進するESDをベースにした連光寺小の研究へとつながっていった。さらに東京都と多摩市の研究指定を受け、持続可能な社会づくりに向けた教育推進校として歩んできた。その研究内容をより一層、現代の課題に合った内容にしていくために、新学習指導要領の意図に沿い、カリキュラム・マネジメントの充実と、探究活動を主体とした授業改善を行った。また、ESDで育成を目指す「6つの学びの力」を基にし、6年間の教育活動を充実させるために、主体的な思考過程を積み重ねた「育ちの地図」を作成し、系統立てた教育活動を実践してきた。また、GIGAスクール構想による一人一台端末（タブレット）を使った「eポートフォリオ」を活用することで、児童自身が自分の活動をより簡単に記録し振り返ること、さらには学校全体、全学年を通して取り組むことが可能となった。過去の取り組みをeポートフォリオに継続して積み重ねていくことで、児童自身が自分の成長を振り返り、さらに意欲的に探究活動を進めることができるようになった。令和4年度研究テーマより、副題に～「持続可能な学び」My SDGs～を掲げ、連光寺小学校でのESD教育の実践として自身の学びをSDGsにつなげ、自分の課題(My SDGs)として解決するために、学び続けていこうとする児童の育成を目指し研究を進めてきた。

本年度は、上記したこれまでの研究をさらにブラッシュアップするため、これまでの実践や児童に対して取り組んできた手立てを再評価したり、再検討したりしていくことで、本研究テーマに一層の系統性や有効性をもたせていくことを目指すこととした。今後の変化の激しい社会に対応し、主体的に判断し思考・判断・表現をしていく力の育成は、今も変わらず喫緊の課題である。この力を児童が獲得していくためには、6年間の中での継続的かつ系統的な指導が欠かせない。もちろん、そこには児童に対して行う学習が有効的なものである必要があるのは言うまでもない。本校の児童が、生活科や総合的な学習の時間で学んだ事柄によって、自己有用感や自己肯定感を一層育み、ひいては、これからの社会の担い手として必要な力を獲得していくためには、これまでの研究をさらに強固なものにしていくことが必要不可欠であると考えた。

3 令和5年度 校内研究構想図



4 研究の視点

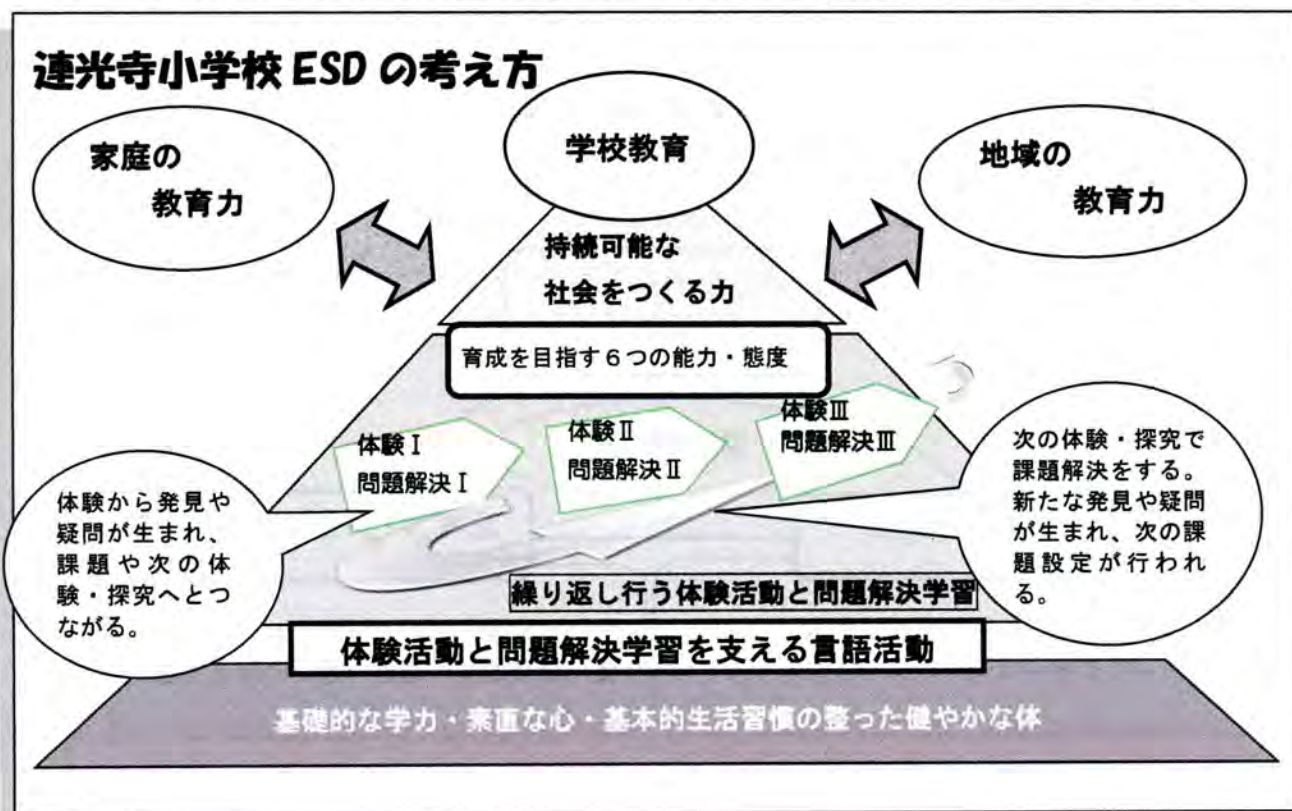
従来通り、これまでのESDをベースとした連光寺の特色ある教育活動の充実を図り、持続可能な学びを意識した、家庭や地域と連携したホールスクールアプローチを行う。

- (1) ユネスコや文部科学省が推進する「ESD」や、ユネスコスクールの実践に学び、①ホールスクールとしての「連光寺小ESD」を構築していく。
- (2) ②「連光寺小ESDで育成を目指す6つの能力・態度」を身に付ける。児童の主体的な学びを作るための③問題解決学習を工夫する。その中で6年間で身に付けるスキルの表を参考に、記録の積み重ね、見取り、評価のためのeポートフォリオの活用方法と系統化について検討する。
- (3) ルーブリックを活用し、児童の変容を見取る。
- (4) 自己の学びが持続可能な社会の構築に向けてSDGsのどの目標に寄与しているのかを明確にし、学びへの肯定感・有用感をもたせる。

① ホールスクールとしての「連光寺小ESD」

ホールスクールアプローチは、ESDの柱である。ESDは学校全体で取り組むことで効果を生む。ホールスクールアプローチには、「学校経営」「学習環境」「教育方法」「地域連携」等いくつかの観点があり、教育課程全体で取り組むことで、効果的なカリキュラム・マネジメントを行うことができると考える。

本校では、下記のような連光寺小ESDの考え方で、家庭・地域と連携しながら、学校全体でESDを進めてきた。私たちが担っているのは、学校教育の部分であるが、「持続可能な社会を作る力」は、家庭の教育力・地域の教育力と深く結び付いて育てていかなければならないと考えている。



②連光寺小ESDで育成を目指す6つの能力・態度

これまで連光寺小学校では、生活科と総合的な学習の時間で身に付ける力として、「人・自然・社会に関心を持ち、意欲的に関わる力」「他者と協力し、活動する力」「課題を見つめ、解決する力」「自分の思いや考えを伝え、行動する力」の4つを挙げていたが、より現在の状況にあったものに見直す必要が出てきた。また、生活科と総合的な学習の時間を軸としたカリキュラム・マネジメントを図るためには、各教科でめざす資質・能力とのつながりの根拠を示すため、新学習指導要領とのつながりも考慮することが重要と考えた。これまでの研究の中で話し合い、「連光寺小ESDで育成する能力・態度」として、次の6つを目指すこととした。

- ア** 環境や社会の仕組みを理解する。
- イ** 学び方を身に付ける。
- ウ** 課題をつかみ、考え、判断し解決する。
- エ** 価値を見だし、思いや考えを伝える。
- オ** 人・自然・社会に関心を持ち、意欲的に関わる。
- カ** 協力してよりよい社会をつくろうと行動する。

<6つの力と新学習指導要領とのつながり>

新学習指導要領では、各教科で育てる資質・能力を3つの柱で説明している。

4つの力を見直して考えた6つの力については、この3つの柱に対応したものにすることが、各教科とのカリキュラム・マネジメントの根拠を説明しやすくすると考え、以下の図のようなイメージで整理した。



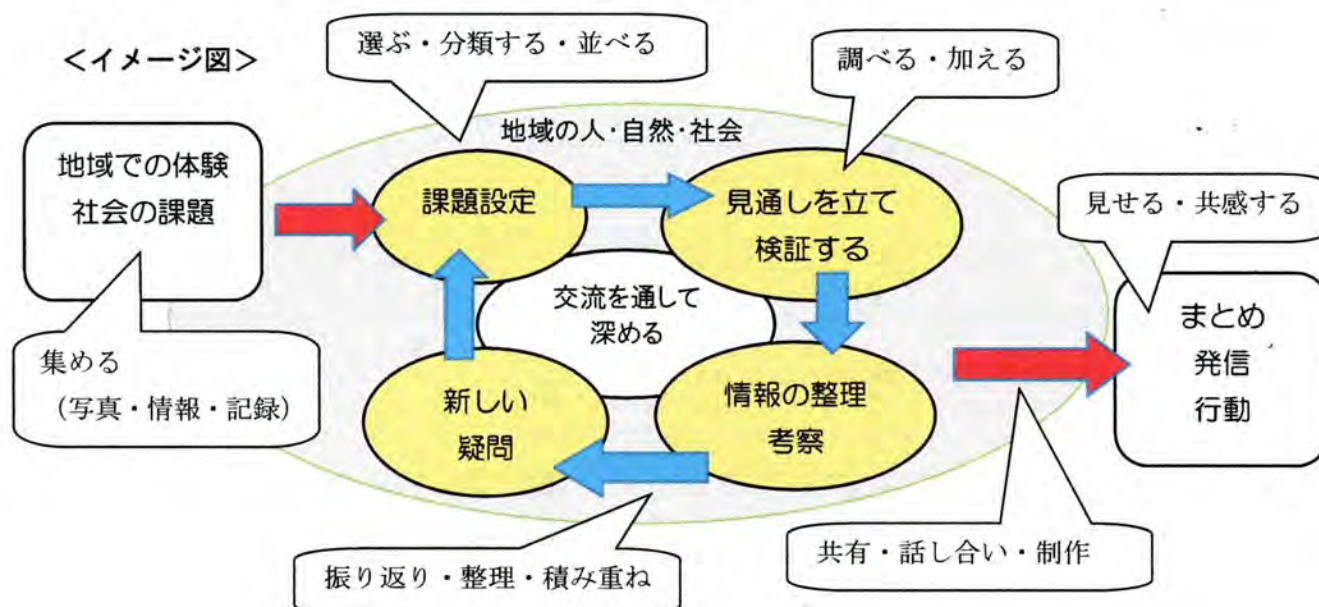
この6つの力は、各学年の学習に合わせ具体的な内容に整理している。以下の表の通りである。

＜各学年の育成を目指す能力・態度＞

	知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
	ア 環境や社会の仕組みを理解する。 イ 学び方を身に付ける。	ウ 課題をつかみ、考え判断して解決する。 エ 価値を見だし、思いや考えを伝える。	オ 人・自然・社会に関心をもち、意欲的に関わる。 カ 協力してよりよい社会をつくろうと行動する。
1年	ア 自分と友達や家族との関わりや、身近な自然のよさに気付き、季節、生き物の特色を知ることができる。 イ 活動を通して、生活上必要な習慣や気付いたことを整理したり、まとめる技能を身に付けることができる。	ウ 思いや願いの実現に向けて、友達や自然と関わりながら、工夫して遊んだり活動したりすることができる。 エ 気付いたことや考えたことを、絵や作文で友達と伝え合ったり、振り返ったりすることができる。	オ 身近な自然に自分から関わり、友達と楽しんで活動することができる。 カ 自分たちの遊びや活動をよりよくしようとするすることができる。
2年	ア 自分や家族、地域の人、学校や回りの施設との関わりや、自然のよさに気付き、季節、生き物の特色を知ることができる。 イ 活動を通して、生活上必要な習慣や調べたことを整理したり、まとめる技能を身に付けることができる。	ウ 社会、人、自然と関わり、その違いや特徴を見付け、自分がやってみたいことや調べたいことを考えたり、決めたりすることができる。 エ 気付いたこと、考えたこと、楽しかったことなどを、言葉や絵、動作、劇化などの多様な方法で伝え合ったり、振り返ったりすることができる。	オ 思いや願いをもって、人、自然、社会に自分から働きかけることができる。 カ 自分の考えのよい所や成長に気付き、これからの生活に生かそうとすることができる。
3年	ア 地域の自然の特色を理解している。 イ 活動して見つけたことについて、図書資料やインターネットなどを活用して、さらに調べたりすることができる。	ウ 活動の振り返りを生かして、次の課題を見付け、解決方法を考えることができる。 エ 仲間と協力して話し合いを重ね、自分の思いを工夫して伝えたり、振り返ったりすることができる。	オ 地域の自然について、様々な立場の人々や仲間と関わりながら、意欲的に探究活動を行い、地域への愛着をもつことができる。 カ 身近な自然に親しみをもち、自然を大切にしようとしている。
4年	ア 川には多種多様な生き物が共存して生息し、生態系を形成していることを理解することができる。 イ 専門家の方の話を聞いたり、図書やインターネット資料を活用して必要な情報を集めたり、活用することができる。	ウ 地域の川の自然環境についてテーマを設定し、活動の計画を立て、話し合いなどを通して考えを深め、探究活動を行うことができる。 エ 活動の様子や自分たちの考えを整理・分析してまとめ、仲間や地域の人に分かりやすく伝えることができる。	オ 地域の川の自然や環境に関心をもち、意欲的に探究活動を行おうとする。 カ 仲間や地域の方々や積極的に関わりながら、よりよい環境を作り出すために自分たちができるところを考え、協力して行動することができる。
5年	ア 里山には多種多様な生き物が共存して生息し、生態系を形成していることや、人間も里山と共存していることを理解することができる。 イ 必要な情報を取捨選択して活用したり、効果的な映像やインターネットからの情報を活用したりすることができる。	ウ 地域の里山の多種多様な生き物などについてテーマを設定し、活動の計画を立て、多面的・総合的に考えを深め、探究活動を行うことができる。 エ 活動の様子や自分たちの考えを整理・分析してまとめ、仲間や地域の人に分かりやすく伝えることができる。	オ 地域の里山の自然や環境保全の活動に関心をもち、意欲的に探究活動を行おうとする。 カ 仲間や地域の方々や積極的に関わり、自然との共存・共生や環境保全のために自分たちができるところを考え、協力して行動することができる。
6年	ア エネルギーや発電方法等、地球温暖化など、世界の課題を自分たちの生活と関連付けて理解することができる。 イ 身に付けたことを生かして必要な情報を取捨選択して、精査して活用したり、地域へ発信したりする方法を活用することができる。	ウ エネルギーなど世界の課題に目を向けてテーマを設定し、活動の計画を立て、協同活動を通して多面的・総合的に考えながら探究活動を行うことができる。 エ よりよい社会をつくるために自分たちにできることを考え、仲間や地域の人々に工夫して発信することができる。	オ エネルギーについての学びを通して、地球温暖化など世界の課題に関心をもち、意欲的に探究活動に取り組むことができる。 カ 持続可能な社会を目指して活動する人々と積極的に関わり、自分たちにできることを考え、協力して行動することができる。
かがやき	ア 自分と他者には違いがあることを理解できる。 イ 自分の感覚や気持ち、学び方を理解することができる。	ウ 自分と違う考えを受け入れようとするすることができる。 エ 自分の気持ちや考えを他者に伝えようとするすることができる。	オ 自分なりの方法で他者や社会とつながろうとすることができる。 カ 互いの違いを受け入れ、協力しようとするすることができる。

③本校の問題解決的な学習の流れ

児童が6年間の生活科・総合的な学習の時間を通して、繰り返し地域の人・自然・社会と関わりながら問題解決的な学習を行い、環境や地域社会のために行動することの大切さを学ぶ。そこにeポートフォリオの活用の仕方を加えたものが下のイメージ図である。



<6年間で身に付けるスキル>

問題解決学習で行われる学習活動については、発達段階にそって6年間で身に付けていくことができるよう、以下のように整理している。

	思考の整理	調査方法	話し合い	まとめ方・発表	タブレット・端末の活用
1・2年	○ウェビング ○付箋を使った分類 ○理由を示すチャート ○eポートフォリオ	○体験 ○観察 ○インタビュー ○図書資料	○ペア ○グループ ○全体	○劇 ○紙芝居 ○ペープサート ○作文○お店 ○図工の作品	○写真撮影、保存 ○アプリの使い方 ○スライドショーの活用
3・4年	○ウェビング ○付箋を使った分類 ○比較、分類するチャート ○eポートフォリオ	○体験○観察 ○実験 ○インタビュー ○外部講師 ○図書資料 ○インターネット資料	○ペア ○グループ ○全体 ○ブレインストーミング	○ポスターセッション ○リーフレット ○プレゼンテーション	○アプリの使い方 ○児童間データ共有 ○地域の催しに参加 ○他校との交流
5・6年	○多用な思考ツール、チャートの選択活用 ○eポートフォリオ	○既習の方法 ○目的に合った調査方法を選択	○目的や場面に合った方法を選択 ○意見の集約 ○新しい考えの提案	○目的や内容に合った方法を選択 ○校内、他校、保護者、地域の方へ発表	○Google classroom ○keynote ○他校との交流 ○地域の催しに参加

5 研究の方法

(1) 組織

- ① 分科会を低学年・中学年・高学年とする。
- ② 研究部は、各学年、専科で構成する。

(2) 方法

- ① 本校校長より ESD や SDG s について、その活用についての講義を受ける。
- ② 各分科会で話し合われたことを研究部で共有・検討し、研究構想図等のブラッシュアップを行う。
- ③ 各学年、授業研究に取り組む。低中高で 1 本ずつ研究授業をし、研究協議による検討を行う。
- ④ 各学年、ESD カレンダー、単元学習計画の作成・見直しに取り組む。
- ⑤ アンケート、ループリックについて共通認識をし、内容の検討を行い、変容を見取る。

6 研究経過

		内容
①	4 月 7 日 (金)	今年度の校内研究について共通理解 本校元教諭 〇〇〇 による講義
②	4 月 26 日 (水)	分科会テーマ決定
③	6 月 21 日 (水)	①高学年部会 研究授業 第 6 学年 「未来に優しいエネルギー」 授業者 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇
④	7 月 5 日 (水)	全体会「研究構想図等の見直し」 分科会
⑤	夏休み	分科会（必要に応じて）
⑥	9 月 6 日 (水)	全体会「全国学校飼育動物研究会夏季全国大会 発表報告」等 分科会
⑦	10 月 27 日 (金)	②低学年部会 研究授業 第 1 学年「あきとなかよし」 授業者 〇〇〇 〇
⑧	11 月 1 日 (木)	全体会「各分科会からの研究経過報告」 分科会
⑨	12 月 8 日 (金)	③中学年部会 研究授業 第 4 学年「川は自然の宝箱」 授業者 〇〇〇 〇
⑩	冬休み	分科会（必要に応じて）
⑪	1 月 10 日 (水)	分科会「紀要のまとめ作業」
⑫	1 月 31 日 (水)	全体会「研究授業外の授業報告会（2 年生・5 年生）」 分科会 ※3 年生は 12 月 21 日 (木) に公開授業を行ったため、報告は無し。
⑬	2 月 28 日 (水)	1 年間のふりかえり 次年度の研究の方向性について 学校長より

研究授業では、本年度も各分科会テーマに迫るための授業、また自らの学びと SDGs との関連を意識させた授業を行った。

低学年分科会

I 分科会テーマ

自分の身の回りの思いや気づきをすすんで伝えようとする学習活動の工夫

II テーマ設定の理由

連光寺小学校の学区内には、都立公園をはじめとしていくつもの公演が点在し、田畑も多くみられる。歴史もあり、緑豊かな自然に囲まれた地域である。

この地域の特色は、今日の低学年児童に欠落しがちな自発性・積極性を育てるのに十分な学習素材となる。児童には身の回りの自然物や環境を使ってめいっぱい体験をさせていく。その貴重な原体験こそが、児童が自分の思いや気づきを「表出したい」と感じるエネルギーとなり、児童同士の積極的な交流につながっていく。

そこで、今年度の低学年分科会では、「自分の思いや気づきをすすんで伝えようとする学習活動の工夫」をテーマにし、この恵まれた環境を生かした学習計画により、児童の伝えたい思いを醸成していく。また、児童の思考の可視化につながるICTの活用や主体的な学習活動を生み出すための環境づくりを深めていくことで、児童の意欲的な学習の向上に努めていこうと考えた。

III テーマに迫るための具体的な手立て

テーマに迫るための具体的な手立てとして

- ①主体的な学びを高める学習活動の工夫
- ②タブレットの活用の工夫
- ③SDGsとの関連付け

以上、3点を柱として、具体的な手立てを考えていくことにした。

「自分の思いや気づきをすすんで伝えたい」と児童が思うためには、児童が毎時間の活動に意欲的に取り組めるような活動を構成することが核になることは間違いない。低学年の児童は、体験に没頭することにより、座学では決して味わうことのできない自分事の学びを成立させる。自然体験により諸感覚を存分に発揮させることで感性を研ぎ澄まし、感じ考えながら思考を深めていくことができ、それは豊かな表現力につながっていく。地域環境を適切に活用しつつ、児童の思いや願いを学習活動にできる限り反映させていくことで「主体的」な学びにつながっていくと考えられる。

また、タブレットを有効に活用することで、潜在化された学習価値の高い学びを顕在化させ、目に見える形にしていくことで自分の学びを自覚することができる。思考を可視化し、鮮明な記憶を思い出させたり、工夫点や成長した点に自分自身で気づけたりという効果が期待できる。

SDGsに関しては、低学年の児童の日常の中で、できる限り触れる機会を多く作ることが大切であると考えた。教師が意図的に、児童がSDGsに触れる環境を整えることで、中学年以降の総合的な学習の時間における「My SDGs」に向かう姿勢が身に付くと考えた。

上記の手立てを具体的に施していくことで、児童の「伝えたい」という思いを高めていくことができると考え、ひいては、研究主題に迫っていく素地が醸成できると考えた。

第1学年 生活科 学習指導案

日時 令和5年10月27日（金）第5校時

多摩市立連光寺小学校1年1組 31名

指導者

1 単元名

「あきとなかよし」

2 単元の目標

秋の校庭や遊び場などで散歩したり遊んだりする活動を通して、季節が秋に変化したことに気付くとともに、木の葉や木の実などの自然物を使ってみんなで工夫して生活に役立つものを作ったり、遊びに使うものを作ったりして、楽しむことができるようにする。

3 単元について

（1）単元の捉え方

身近な自然への興味のもち方によって学習の深みが変わってくる単元といえる。そのため、日常的にどっぷりと自然に浸ることが重要になる。

秋という季節を感じ取るためには、春から夏、夏から秋の自然の変化に目を向けられるようにしなければならない。また、秋の自然物を利用するためには、自然物そのものへの興味をもてるようにしていく必要がある。自然の変化やその特徴、草花などの自然物、生き物の不思議について目を向けられる力が育つことで、理科的な学習、社会的な学習、環境問題についてなど、この先の学びにつながる活動にすることができると考えた。

子供たちには、年間を通して、石、虫、草花、実、動物など身近な自然について、持ち込める自然物を教室に持ち込み、自分の言葉で気が付いたことを発表し、質問し合う「しぜんのたより」の活動に取り組んでもらい、常に自然への興味をもてるように働きかけた。この活動を基本とすることで、自然物について話すと周囲の友達が話を聞いてくれ、認めてくれることが実感でき、より自然物に目を向けようという意欲につながると考えた。また、秋の自然物を利用し、創作活動に取り組むためには、秋に見つけたものをコレクションし、種類分けすることで、さらに秋の自然物への興味をもつことにつながると考えた。見つけた秋のものをもとに、秋遊びや作品制作を行い、秋という季節の特色に気づき、自然の良さを味わえるようにしていきたい。

(2) カリキュラムマネジメント

この単元だけではなく学習活動全体を通して、要となる力が、「互いの意見を認め合うことで、より良い考え方や活動の仕方につなげていく力」である。

上記の力を子供たちに身に付けさせるために以下の活動を行ってきた。

朝の会や帰りの会で「発表する時間」を設ける。「人を傷つける言動でなければどのようなことを行ってもよい。」という時間である。自分が何をしたいか考え、実際に声に出してみたり、表現したりしてみるにより、自信をもって発言する力を身に付けることを目標としている。同時に、発表した友達に質問をすることで、友達の意見を受け止める力も身につくと考えている。

国語では説明文や物語文を、全文を通して読んでいくのではなく、少しずつ区切ってクラス全員で読み進める活動を行っている。言葉一つ一つに興味をもち、子供たち同士が自分の言葉で説明し合うことで、互いの考えに触発されながら読みを深めることにつながっている。また、この活動を通して、自分の思いをその思いに合った言葉にすること、未知の言葉を自分の言葉として獲得していくことなど豊かな表現力につながる力を身に付け始めている。

算数では、問題文の読み取りや立式理由について、意見交換することを基本として学習活動を進めている。最初は問題文の意図が理解できなかったり、立式の仕方が理解できなかったりしても、繰り返し友達の意見や教師の価値づけに触れることで、徐々に自力解決できる力を身に付け始めている。

こうした意見を認め合い、他の意見を取り入れながらより良い考えに至ろうとする活動が、自然物に関する、自分とは異なった視点を認めることにつながり、より多様な発見をしたり、興味を深めていったりすることにつながると考えられる。

これらの活動に加え、道徳の時間だけでなく、日常活動全体を通し互いを認め合い、心地よく意見交換ができる素地を養うための働きかけを行うことが必要である。

また、秋のものを利用した創作活動では、これまで図工や生活科の創作活動で身に付け、道具を使う力、素材をもとに作りたいものを具体的に想像する力などを生かしつつ互いが教え合い、友達の工夫を取り入れることで充実した活動につなげることができるのではないかと考えた。

【カリキュラム・マネジメント図】

道徳科

日常生活全体を通し、互いを尊重し合い、心地よく意見交換ができる素地を養う。

「あしたはえんそく」

誰にでも同じように接することの大切さについて考え、偏見や差別をせず、周りの人に公正、公平に接しようとする実践意欲と態度を育てる。

「ジャングルジム」

誰とでも仲よくすることのよさについて考えさせ、自分の好き嫌いにとらわれず、周りの人に接しようとする実践意欲と態度を育てる。

学級活動 内容（１）

「みんなでできめて、みんなであそぼう」

学級会で話し合い、クラスみんなが楽しめる活動を考え、合意形成をしていく。遊びを実行する中で、うまくいかなかったことをどのようにしていったらより良く遊べるようになるのか、試行錯誤する。また、遊びの中で、友達の思いを知り、考えの相違を認め合うことができる。

「かかりのしごとをしよう」

友達と協力しながら、より良い活動をするために工夫することができる。

オ季節の変化に関心をもち、それらを取り入れて自分の生活を楽しくしようとする。

オ秋を取り入れた遊びを創り出すために、何度も試行錯誤し、思いの実現に向けて取り組もうとする。

カみんなと楽しみながら遊びを創り出そうとする。

学びに向かう力、人間性等

連光寺ESD

知識及び技能

ア春や夏の自然との様子の違いや、秋の特徴に気付く。

イ季節によって生活の様子が変わることやその面白さ、自然の不思議さに気付いている。

思考力・判断力・表現力

ウ身近な自然や自分の生活、地域の行事から秋の特徴を見つける。

エ見つけた秋の特徴を表現したり、身近な秋の自然を利用して工夫して遊びや遊びに使うものを作ったりしている。

国語科

「はなのみち」「おおきなかぶ」「おむすびころりん」

「くちばし」「うみのかくれんぼ」

文章や絵から読み取れる事柄や疑問に思った事柄を自分自身の言葉で表現したり、友達の発言を聞いて自分なりの考えを発表したりすることを通して、内容について積極的に興味をもったり、内容を理解する楽しさを味わったりする。

「としょかんとなかよし」

知りたい物事について、図書の時間や休み時間を通して、本で調べて理解することの面白さを知る。

「おおきくなった」

観察の視点を持ちながら、植物の変化について自分の言葉で描き表す。

図画工作科

素材の特徴を生かして、創り出す喜びを味わう。

用具の扱い方に注意して、安全に工作をする。

4 評価規準

知識及び技能	思考・判断・表現	学びに向かう力・人間性
ア春や夏の自然との様子の違いや、秋の特徴に気付く。 イ季節によって生活の様子が変わることやその面白さ、自然の不思議さに気付いている。	ウ身近な自然や自分の生活などから秋の特徴を見つける。 エ見つけた秋の特徴を表現したり、身近な秋の自然を利用し、工夫して遊びや遊びに使うものを作ったりしている。	オ季節の変化に関心をもち、それらを取り入れて自分の生活を楽しもうとする。 カ季節を取り入れた遊びを創り出すために、何度も試行錯誤し、思いの実現に向けて取り組もうとする。 キみんなと楽しみながら遊びを創り出そうとする。

5 児童の実態

本学年の児童の中には、虫や植物などに関心を示す児童が多くいる。見付けてきた虫を飼育ケースに入れて観察や飼育をしたり、植物を朝の発表タイムで紹介したりする姿がたくさん見られる。また、季節によって自然が変化していくことにも気付いている児童もあり、「春には、桜やタンポポの花が咲いている。」や「夏になったから、セミが鳴くようになった。」などの発言も見られた。しかし、中には、友達が自然のことについて話しているときには、興味をもって聞くのだが、自分からは自然に関わろうとしない児童もいる。そのような児童は、自然の面白さや美しさに触れた経験が少ないことが考えられる。今回の学習では、どの児童も自然の面白さや美しさを感じられるようにし、自然に対する興味関心を高めていきたい。また、季節による秋の自然への変化を、学習を通して十分に味わわせ、自然をより身近に感じられる児童にしていきたい。

友達と伝え合うことについては、個人差が大きい。自分から伝えたいことや思いをもって、明確に伝えることができる児童もいれば、何を伝えたらよいか分からなかったり、自分の考えをもてなかったりして困惑する児童もいる。どの児童も自分の考えや思いを伝えられるようにするためには、まずは児童一人一人が思いをもてるようにしていく必要がある。その思いを引き出すことができるように、今回の学習では、秋探しの場面では、教師が、児童が見つけた秋のものを他の児童も意識して探そうできるように、その場で価値付けして紹介したり、複数回秋探しを行ったりするようにする。また、見つけた秋のものを活用して遊びを考えることができるように、どんぐりこまを作ったり、落ち葉遊びをしたりするなどの共通体験を行うようにする。これらの学習を生かして、秋のものを自分で見付けたり、見つけた秋でどんなおもちゃや作品を作るかを自分で選んだりするなど、自分で考えたり、選んだりする場面を作るようにする。そして、その思いを伝えることができるように、伝え方を指導する場面も作っていく。学習の終わりには、自分ができたことややってみたいことを全体で振り返って共有して価値づけを行い、学習をより深められるようにしていく。

SDGsに関しては、テレビや学校などで目にする機会が増え、「聞いたことがある」という児童は多い。しかしながら、自分たちの生活や学習との関わりがあることに、1年生の児童が気付くことは難しい。SDGsと自分たちの生活や学習が関わっていることに児童が気付いていくことができるように、教師が働きかけていく必要がある。そこで、SDGs関連の内容に触れる機会を増やしたり、日頃から活動とSDGsを結びつけたりすることで、SDGsをより身近なものとして感じられるようにしていく。

6 研究主題に迫るための手立て

(1) 主体的な学びを高める学習活動の工夫

- ・季節の変化や自然物について日常的に興味を持てるようにする発表タイム

登校途中や校庭、家庭で見つけた草花や石、昆虫や種などを日常的に教室の中に持ち込み、発表し合う「しぜんのたより」の活動を朝の会や帰りの会に行う。子供たちは発表に対して「どこにあった(いた)か。」「なにをしていたか。」「どんな様子だったか。」などの質問をしあい、交流することで身近な自然への興味を高めることができる。

- ・秋の自然物のコレクションと種類分け

低学年の子供たちは、とにかく何かを集めることが好きである。秋の公園や登校途中、校庭や校庭で見つけた秋のものを集め、コレクションをすることは、彼らの好奇心を刺激し、楽しみながら秋に触れることにつながる。また、その収集物をそれぞれの特徴に従い種類分けをすることでより自然物に興味をもって接することにつなげることができる。結果、秋の自然物を使って創作活動をする際に、その特徴を生かした作品を生み出すことができるのではと考えた。

- ・児童の発言に対する価値づけ

児童が発言した内容について、どのような発言もいったん教師が受け止める姿を見せると同時に、生き物の生態や季節の移り変わり、植物の特徴や変化など深い学びにつながる事柄に対しては、教師が盛大に価値づける。このことにより、児童は自己肯定感を高めることができると同時に、学ぶための視点を得ることができる。

- ・児童の発言を中心に学習展開

生活だけでなく様々な学習において、教師が牽引するのではなく児童の発言を中心に学習活動を進める。共通の課題を互いの発言や質問を通して学んでいくことにより、積極的に課題にかかわろうとする姿勢が生まれるのではないかと考えた。

- ・活動に変化を持たせた授業の構成

低学年児童の発達段階では、45分すべてを座学で受けることは難しい。自分の考えを発言するだけでなく、体を動かして表現してみたり、互いの発見したものを見合ったり、互いの意見を相談し合ったりする時間を設けることで、学習に対する集中を保てるようにする。

- ・児童が主体的に活動に取り組めるような環境づくり

児童が見付けてきた植物や昆虫を調べたり、秋の自然を生かした遊びを考えたりできるように、教室に秋の自然に関わる本を用意し、児童が読めるようにした。また、作品づくりでは、児童が計画したものをつくるために必要な材料コーナーを作るようにした。児童が主体的に活動に取り組めるように環境を整えるようにした。

- ・選んだ遊びや作品ごとでのグループ活動

見つけた自然のものを使った遊びや作品づくりでは、同じ活動をする児童でグループをつくり、学習を行うようにした。そうすることで作り方を伝え合ったり、工夫をし合ったりすることが生まれると考えた。

(2) タブレットの活用の工夫

- ・発見した事柄や作品の記録

公園で見つけた秋の物を写真に撮ることによって、鮮明に記録される。公園や校庭での秋探しの様子を教師がタブレットで記録し、教室で画像を見せながら振り返りを行うことで、それぞれの

児童がどこでどんなものを見つけたのかを共有しやすくした。また、採集した秋の自然を児童自身のタブレットでも撮影させることで、写真で記録しておく、児童自身がどのように学びを積み上げてきたかを客観的にみることができるようにした。

・作品の工夫を共有するための活用

作品や遊びを共有する場面では、タブレットを使ってそれぞれの活動の成果をプロジェクターに映すようにした。工夫を実際に見せながら共有することで、以降の活動に生かすことができると考えた。

(3) SDGs との関連付け

・今回の学習は、SDGs の「15. 陸の豊かさも守ろう」と関連が深い学習である。陸の植物や生物によって、色々な作品を制作したり、昆虫を観察できたりしていることに気付かせ、自然の素晴らしさに触れられるようにしていく。また、今年度は特に猛暑日が多かったため、秋による自然の変化が遅くなっていた。1年生には難しいかもしれないが、自然環境の変化と四季の変化についても、教師が話すことで自然環境について考えるきっかけとしていきたい。

7 指導計画・評価計画（全20時間）

時	問題解決の流れ	「小単元名」・○ねらい・評価規準	◇学習活動	他教科等との連携
1	つかむ	「あきは どんな きせつかな？」 ○普段の生活で気付いた秋について友達と伝え合う活動を通して、身近な秋に関心を持ち、日常的に秋探しに意欲をもてるようにする。オ	◇身の回りで感じられる季節の変化について気付いたことを発表し合う。 ◇秋探しに出かける計画を立てる。	★国語
2	つかむ 追究する 発信する	「あきの 校ていに 出みよう」 ○春や夏の様子と比べながら、季節の変化を秋探しや遊びの中から、諸感覚を使って感じ取ったり発見したりすることができるようにする。ア・ウ・オ	◇諸感覚を十分に使って春や夏の校庭の様子を比較しながら、観察する。 ◇諸感覚を十分に使って秋の自然物を探し、遊んだり、採集したりする。 ◇見つけた秋の様子や自然物について紹介し合う。 ◇公園で秋探しをする時にどんな持ち物があつたらよいか話し合う。 ◇活動を振り返る。	★国語
6	つかむ 追究する まとめる	「もっと あきを さがしにいこう」 ○春や夏と比べながら、公園や野原などの遊び場の変化を、諸感覚を使って感じ取るとともに、見つけた秋の自然物や生き物に興味・関心をもつことができるようにする。ア・イ・ウ・オ	◇諸感覚を十分に使って春や夏の公園の様子を比較しながら、観察する。 ◇諸感覚を十分に使って秋の自然物を探し、遊んだり、採集したりする。	★国語
2	追究する	「見つけた あきを じっくり 見よう」	◇秋探しをして見付けた	★国語

	まとめる 発信する	○校庭や公園など身近な自然で見つけた秋をじっくり観察したり比べたりする活動を通して、見つけたことを友達と伝え合い、その特徴や季節の変化に気付くことができるようにする。 <u>ア・イ・オ</u>	ものを観察し、種類分けする。 ◇秋探しをして見つけた葉っぱや木の実、生き物を交流する。 ◇秋探しをして見つけたものについてクラス全体で出し合う。 ◇夏で見られた植物や生き物を想起し、秋との違いについて考える。 ◇活動を振り返り、カードに記録する。	
4 本時	つかむ 追究する まとめる 発信する	「見つけた あきで あそんでみよう①」 ○木の実や落ち葉などの秋の自然物を使って遊ぶものや飾るもの、生活に役立つものなどを工夫して作ったり、自然物の形状から様々な発見をしたりして秋を楽しむことができるようにする。 <u>イ・エ・カ・キ</u>	◇秋探しで見付けたものを使って、どんな遊びができそうかを話し合う。 ◇共通体験として、どんぐりこま作りに全員で取り組み、遊ぶ。 ◇自分が取り組みたいどんぐり遊びを決める。 ◇どんぐりを使った作品作りや遊びに取り組む。 ◇完成したどんぐりを使った遊び道具で遊ぶ。 ◇活動を振り返り、カードに記録する。	★国語 ★図画工作
4	追究する まとめる 発信する	「見つけた あきで あそんでみよう②」 ○木の実や落ち葉などの秋の自然物を使って遊ぶものや飾るもの、生活に役立つものなどを工夫して作ったり、自然物の形状から様々な発見をしたりして秋を楽しむことができるようにする。 <u>イ・エ・カ・キ</u>	◇諸感覚を十分に使って秋の自然物をさらに探し、遊んだり、採集したりする。 ◇自然物を利用して作りたい作品を作る。 ◇楽しく遊びながら、作品を改良する。 ◇作ったものや発見したものを紹介し合う。 ◇活動を振り返り、カードに記録する。	★国語 ★図画工作
4	つかむ 追究する 発信する まとめる	「みんなであそぼう」 ○作ったもので遊んだり、発見したことを紹介したり、生活に役立つものの作り方を紹介したりして、みんなで秋を楽しむことができるようにする。 <u>イ・エ・カ・キ</u>	◇みんなで協力して「秋祭り」の準備をする。 ◇これまでに作った作品を使って秋祭りをする。 ◇活動を振り返り、カードに記録する。	★国語 ★図画工作

8 本時案（15／23時間目）

（1）本時の目標

- ・秋の自然や身近にあるものを利用して、遊びに使うものを工夫して作ったり、作ったものを使って遊んだりする。

（2）本時の展開

学習活動	◆評価規準 () 評価の方法 ・指導上の留意点
1 前時の学習を振り返る。	・前時で決めた自分が取り組む活動を確認する。
2 本時のめあてをつかむ。 どんぐりをつかってもっとあそぼう。	・前時の振り返りで見られた本時でやりたいことを掲示し、活動の見通しをもたせるようにする。
3 選んだ作品作りや遊びに取り組む。	・前時で作りたいものや遊びが同じものを選んだ児童でグループを作り、座席を決め、本時でも同じように座らせる。協力しながら活動に取り組めるようにする。 ・遊びや作るものを変えるときには、黒板の名札を貼り替えさせ、児童が何をしているかが分かるようにする。 ・児童が作品作りや遊びに必要と思われるような道具や材料をもっていくことができる場所を用意する。 ・きりは決められたところでのみ使用させるなど、安全面の配慮をする。 ・必要であれば、教室においてある秋に関する書籍を参考にさせる。 ・活動の途中に「おさんぽタイム」という名前で、希望する児童は友達の作品を見に行ってもよい時間を設定し、自分の作品作りや遊びに生かせるようにする。
4 作ったものや遊びを全体で紹介する。	・遊びや作品ごとに活動に取り組んだ成果を全体で紹介する。成果が伝わりやすくなるように、実物だけでなく、必要に応じてタブレットやプロジェクターを使うようにする。 ・成果紹介を通して、もっと作りたいや友達の作品を知りたいという思いを高められるようにしていく。
5 活動を振り返り、見付けたことや次時に取り組みたいことをカードに記録する。	◆秋の自然や身近にあるものを利用して、遊びに使うものを工夫して作ったり、作ったものを使って遊んだりする。☒（発言分析・行動分析）
6 振り返りを共有し、次時に取り組みたいことを考える。	・本時を振り返り、自然遊びの楽しさに気付かせ、SDGsの「15.陸の豊かさも守ろう」につなげる下地をつくる。次時への見通しをもたせる。

9 成果と課題

(1) 成果

- ・繰り返し様々な場所で秋探しを行ったことで、子供たちに秋の原体験をさせることができた。その結果、児童は夢中になって見つけた秋を生かしたものづくりや遊びに取り組む姿が見られた。
- ・子供たちの思いや願いに沿って学習を進めたことで、子供たちが見通しをもって活動に取り組むことができた。

(2) 課題

- ・色紙や紙コップなどの材料を用意したことで、子供たちの表現の幅は広がったが、自然物を活用しきれていない児童もいた。使える材料を絞ったり、材料の中に自然物を入れたりするとより良かった。
- ・教師による児童への積極的な声掛けが良かった。気付きの質を高めるような声掛けの工夫が見られると、さらに児童の学習が深まると考えられた。

10 ルーブリックによる児童の意識の変容について

せいかつか～わくわくせいかつ～ ^{じこ} ^{ひょうか} 自己評価シート

1ねん()くみ なまえ()

もくひょう できるようになったこと	4月				3月			
	4 すごく できる	3 できる	2 あまりで きない	1 できな い	4 すごく できた	3 できた	2 あまりで き な か つ た	1 できな か つ た
ア まわりのことを する								
(1) ともだちや かぞくの よいところ を した。					40%	35%	23%	2%
(2) れんこうじや しぜんの よいところ を した。					45%	35%	16%	3%
イ べんきょうのしかたを する								
(3) ほんや ずかんを つかって しら べることが できた。					39%	27%	26%	8%
(4) ひとにきいて しらべることが でき た。					31%	40%	24%	5%
ウ じぶんでかんがえて できる								
(5) かつどうしたいことを じぶんで きめることが できた。					53%	27%	15%	5%
(6) じぶんでかんがえて かつどうする ことが できた。					55%	31%	13%	2%
エ じぶんのおもいや かんがえを つたえる								
(7) わかったことを せいりして まと めることが できた。					39%	35%	21%	5%
(8) わかったことを ほかのひとに つ たえることが できた。					61%	24%	10%	5%
オ じぶんから こうどうする								
(9) たのしく かつどうに とりくむこ とが できた。					87%	5%	6%	2%
(10) ともだちといっしょに かつどうす ることが できた。					77%	18%	5%	0%
カ これからの せいかつにつかう								
(11) これからのせいかつを よくしよ うと おもった。					73%	19%	6%	2%
(12) かつどうしたことを ふだんのせい かつで いかした。					35%	45%	16%	3%

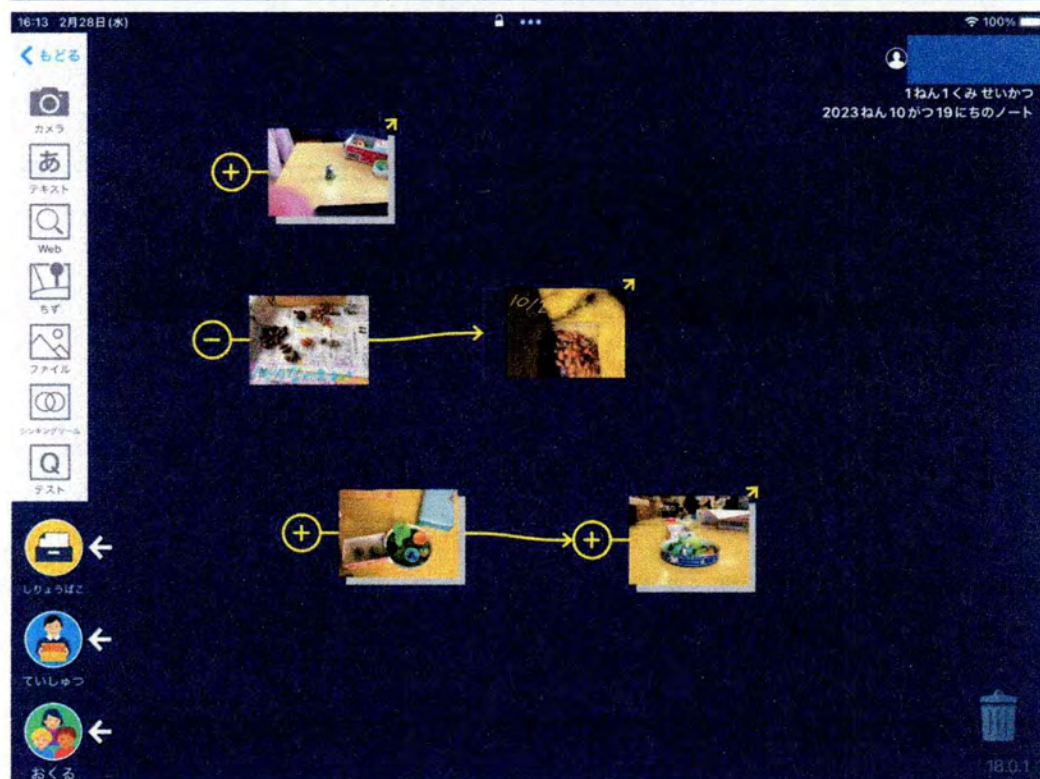
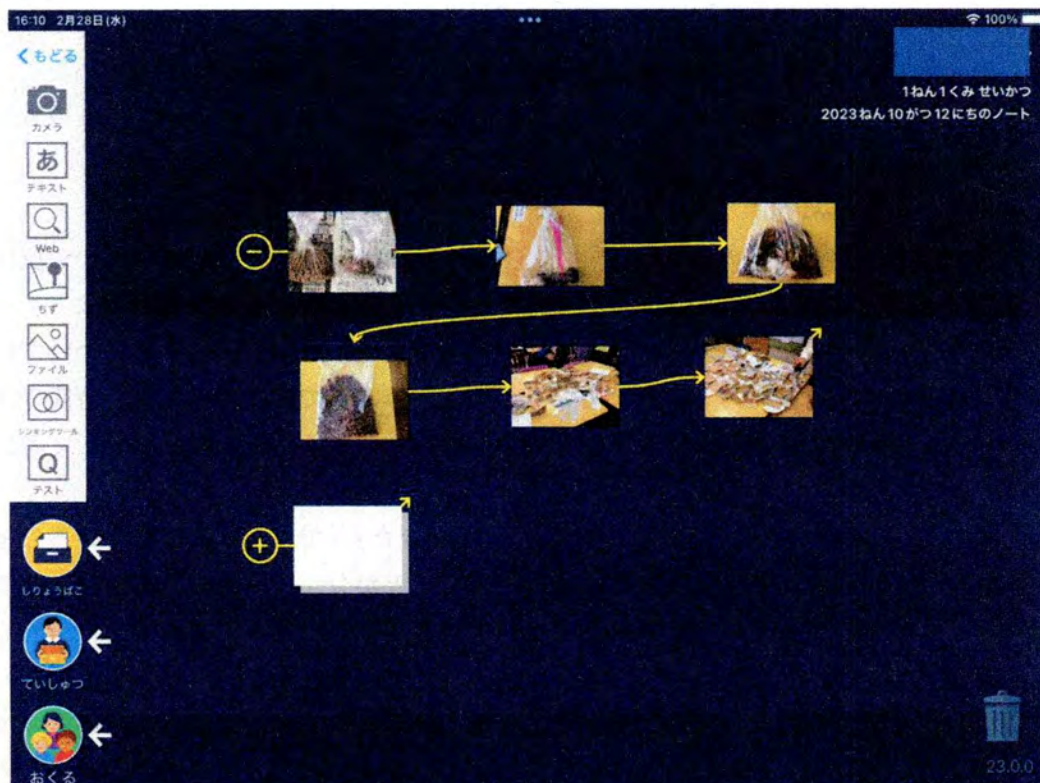
【考察】

4 月当初はループリックをとれていないため、1 年間の変容は見取することはできないが、3 月時点での児童の意識から、以下の項目について考察した。

- アの項目については、(1) では75%、(2) では、80%の児童が、「すごくよくできた」「できた」と感じていた。多くの児童が生活科の学習を通して、友達や家族など人と関わることや連光寺の地区や自然と関わることのよさを感じることができたといえる。「あまりできなかった」、「できなかった」という児童については、そのよさを十分に感じることができるよう、振り返りを充実させていくことが考えられる。
- イの項目については、約70%の児童が、「すごくよくできた」「できた」と感じている反面、約30%の児童は、「あまりできなかった」「できなかった」と感じている。「あきとなかよし」の学習では、本や図鑑を使って見付けた秋のものを調べる児童の姿があったが、調べ学習についてはそれぞれの自主性に任せていた。調べ方を学ばせていくために、みんなで図鑑や本を読む時間やゲストティーチャーにきてもらい、話を聞く時間を学習の中に設定していくことが手立てとして考えられる。
- ウの項目については、約80%の児童が、「すごくよくできた」「できた」と感じていることから、多くの児童が思いや願いをもって、主体的に活動できたことが分かる。思いや願いをもって活動することができるように、共通体験を取り入れて授業を組み立てたことに効果があったと考える。約20%の児童は、「あまりできなかった」「できなかった」と感じているが、回答した児童の様子を見ると、自分で決めたり、考えて活動したりすることができていた児童も多かった。できている場面を見付けたときには、価値付けを行い、自信をもたせていくことが手立てとして考えられる。
- エの(7)の項目では、約70%の児童が、「すごくよくできた」「できた」と感じている反面、約30%の児童は、「あまりできなかった」「できなかった」と感じている。活動を通じて、言葉や絵、動作化などの多様な表現方法を学ばせてきた。どの児童も表現をすることはできるが、個人差が大きくみられる現状がある。今後も学習したことを表現する活動を繰り返していくことや、その際に適切な表現方法を考え、選ばせていくことで改善していくと考える。
(8)の項目では、約85%の児童が、「すごくよくできた」「できた」と感じていた。生活・総合発表会での経験が児童に伝える楽しさを教え、このような結果になったと考える。
- オの項目については、ほとんどの児童が、「すごくよくできた」「できた」と感じていた。児童が活動の中で、自然や人と関わることの楽しさや面白さを十分に感じていたことが分かる。自然と関わる時間を十分に確保したことで、多くの気づきが生まれた。そして、それを伝え合う中でさらに新しい気づきや活動が生まれて学習が深まっていくという良い循環ができていた。それによって、このような結果になったと考える。
- カの項目においては、8割以上の児童が、「すごくよくできた」「できた」と感じていたが、「すごくよくできた」だけで比べると、(11)は73%に対し、(12)は35%となっている。ここから児童は、これからの生活をよくしようと考えている反面、活動したことを生活に生かすところまで

にはできていない、もしくは自信をもてていないという姿が見て取れる。日常生活の中でも活動を生かす姿が見られていたので、価値づけたり、学習の中で生活に生かす場面を設定したりすることが手立てとして考えられる。

11 ポートフォリオ写真



第2学年 生活科 学習指導案

日時 令和5年10月2日（火）第3校時
多摩市立連光寺小学校 2年1組 26名
指導者

1 単元名

「めざせ！うさぎはかせ」

2 単元の目標

うさぎと触れ合ったり世話をしたりする活動を通してうさぎの変化や成長の様子について興味・関心をもって働きかけ、それらの成長や命の尊さに気付くとともに、うさぎに対して愛着をもって大切に関わろうとすることができるようになる。

3 単元について

（1）単元の捉え方

生き物が懸命に生きようとしている姿は、見る者すべてに感動を与える。それは自分たち人間の生きようとする力、生命の躍動と重ねて考えるからである。

子供たちは、生命に対する理解はまだ浅く、生命の意味を明確に理解していないことが多い。そのために、生き物に対しても関心のあるものを関心のある時だけ大切に作る姿が見られ、自己中心的な関わり方をすることが多い。「生き物には生命がある」ということに気付かせ、生き物を大切にしようとする気持ちを育てることは、容易ではない。自然の中で生き物を探したり、捕まえた生き物と一緒に生活をしたり、世話を通して繰り返し関わったりすることで、様々な生き物の不思議さや知恵に感動し、生き物への親しみをもつことが期待できる。さらに、生き物を育てる活動の中で、病気や死にも直面することがある。問題が起きた時に子供同士で相談したり、教師や家族に助けを求めたり、獣医師との関わりができるなど、多くの人との関わりが予想され、伝える力を伸ばす機会ともなる。連光寺小学校では、ヤギやウサギを継続的に飼育してきている風土があるため、前述した同じ対象に「繰り返し関わる」ことが容易であり、本単元を終えても関わりをもち続けることができる。その中で、対象の成長、病気や死などに直面することで、一層「生命」の尊さや慈しみの心を育むことができると考えられる。単元を終えても生き物への慈しみの心は子供たちの心を育て、友達や家族に対しても思いやりをもつことができると考え、本単元を設定した。

（2）カリキュラムマネジメント

道徳科では、生命尊重のテーマを扱うことで、かけがえのない命を大切にすることに気付いた。また、よりよい学校生活のテーマを扱うことで、連光寺で飼育している生き物への愛着が深まった。そのような思いをもって身近な生き物と関わることを生活科で実践できるとよいと考える。

また、国語科では書くことの視点を決めたり、自分の気付きを書いたりする書き方を学習する。また、自分の気づきを相手に伝えるよう工夫したり、互いに伝え合ったりする技術を学んだことで、振り返りを書く際の手助けとなり、伝えたいことを表現できるようになると考える。

【カリキュラム・マネジメント図】

道徳

「がんばれアヌーラ」

命を大切に思う心について考え、かけがえのない命を大切にしようとする心情を育てる。

「しょうかいします」

自分たちの学校のよいところはどんなところかについて考え、学校や学級での生活を楽しくしようとする心情を育てる。

- オ**身近な生き物の変化や成長の様子、育つ場所などに関心を持ち、進んで関わろうとしている。
- オ**身近な生き物について、わかったことや気付いたことをわかりやすく伝えようとしている。
- カ**身近な生き物に親しみをもち、大切にしようとする。

学びに向かう力、人間性等

連光寺ESD

知識及び技能

思考力・判断力・表現力

ア身近な生き物の体や動きの特徴、育ち方がわかるとともに、生き物は変化し成長していることや命があることに気付いている。

ア身近な生き物への親しみが増し、関わったり、調べたりすることができた自分の成長に気付いている。

イ獣医の話を聞いたり、図書やインターネット資料を活用して必要な情報を集めたり、活用することができる。

ウ身近な生き物について予想したり、本で調べたり、人に聞いたりして、身近な生き物の育て方や関わり方について考えることができる。

ウ身近な生き物について振り返り、次に調べたいことを自分なりに計画することができる。

エ発見したことや気づいたこと、考えたことなどを、多様な方法でまとめたり、伝え合ったりすることができる。

国語

「きょうのできごと」「こんなもの、見つけたよ」
友達に知らせるために、経験したことから書くことを決め、経験したことや自分の気持ちを書く。

「かんさつ名人になろう」

丁寧に観察し、気付いたことや分かったことを集めて書く。観察対象の様子や自分の気づきなどが相手に伝わるように工夫して書き、友達と伝え合う。

学級活動

みんなで話し合っ決めて、役割分担をしたりする。自分の意見に理由を付けて話す、条件付きで賛成する、折り合いをつける力は、自分の考えをうまく伝えたり、グループ活動を円滑にすすめたりすることができる。

4 単元の評価規準

知識及び技能	思考力、判断力、表現力	学びに向かう力、人間性等
ア身近な生き物の体や動きの特徴、育ち方がわかるとともに、生き物は変化し成長していることや命があることに気付いている。 ア身近な生き物への親しみが増し、関わったり、調べたりすることができた自分の成長に気付いている。 イ獣医の話を聞いたり、図書資料を活用して必要な情報を集めたり、活用することができる。	ウ身近な生き物について予想したり、本で調べたり、人に聞いたりして、身近な生き物の育て方や関わり方について考えることができる。 ウ身近な生き物について振り返り、次に調べたいことを自分なりに計画することができる。 エ発見したことや気づいたこと、考えたことなどを、多様な方法でまとめたり、伝え合ったりすることができる。	オ身近な生き物の変化や成長の様子、育つ場所などに関心をもち、進んで関わろうとしている。 オ身近な生き物について、わかったことや気付いたことをわかりやすく伝えようとしている。 カ身近な生き物に親しみをもち、大切にしようとする。

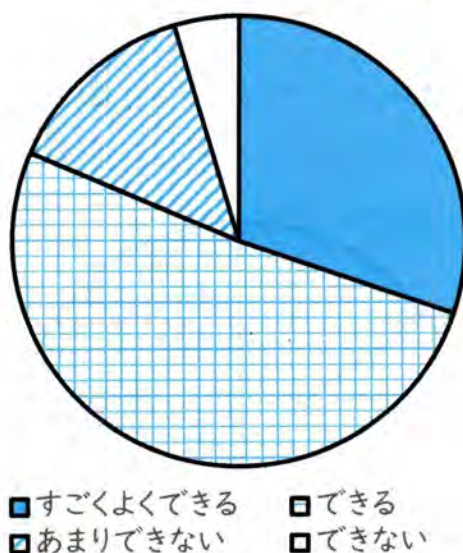
5 児童の実態

本学年の児童は、季節や地域、生き物や植物などへの興味は高い。昨年度一年生の際に、季節に関わっているいろいろな体験活動をし、自分の思いを十分に実現する経験をしている。生活総合発表会を行い、その時に学習をまとめたり、発信したりすることについても挑戦してきた。自分の考えたことを誰かに伝えようとすることに意欲的である。

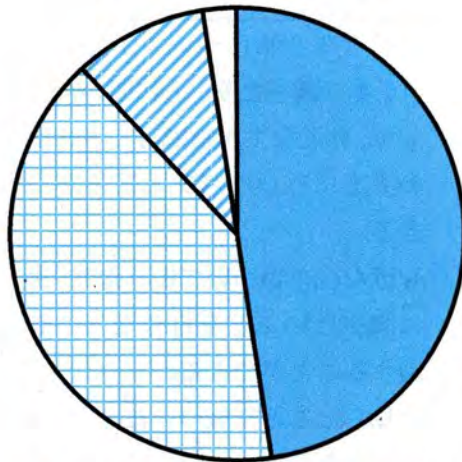
以下は、2年生が始まった4月に集計した児童のアンケート結果である。

生活科のアンケート（令和5年4月実施 48名回答）

【ア】地域のことを知る

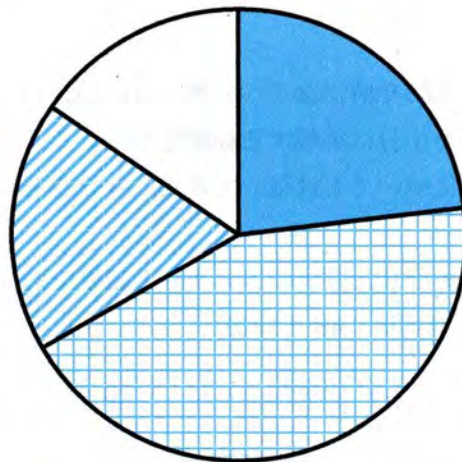


【イ】勉強の仕方を知る



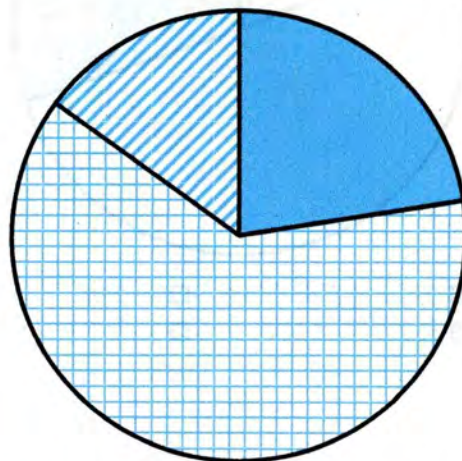
■ すごくよくできる □ できる
 ▨ あまりできない □ できない

【ウ】自分で考えたり、決めたりする



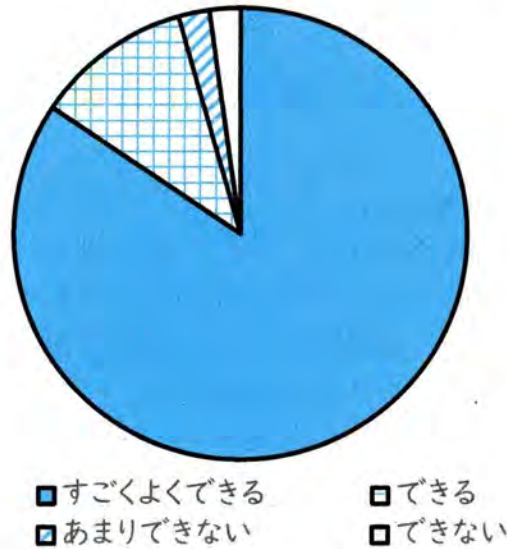
■ すごくよくできる □ できる
 ▨ あまりできない □ できない

【エ】気づいたこと、考えたこと、楽しかったことを伝える

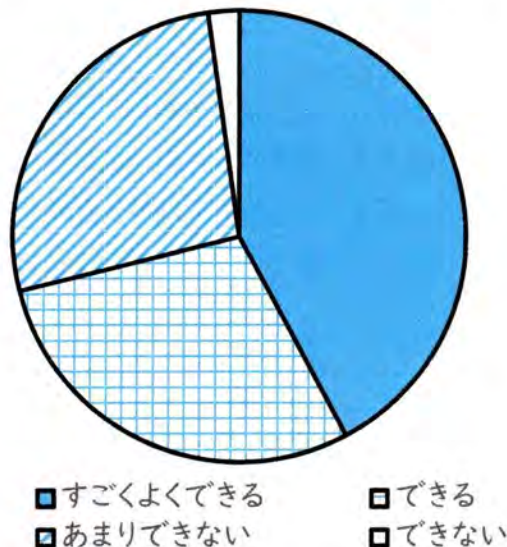


■ すごくよくできる □ できる
 ▨ あまりできない □ できない

【オ】すすんで自分から行動する



【カ】これからの生活に生かすことができる



アンケートの結果を見ると、【ア】地域のことを知る、【イ】勉強の仕方を知る、【エ】気づいたこと、考えたこと、楽しかったことを伝える の項目が高く、特に【オ】すすんで自分から行動する の項目は非常に肯定的な結果が出ている。【オ】は「楽しく活動に取り組んだか」「友達と協力して活動できたか」という設問のため、児童にとって友達と協力しながら活動に取り組むことは楽しいことだということが分かる。実際に授業を進めていても、どの単元でも生活科における児童の関心は非常に高い。学習素材を自分事として捉え、自分の興味のあることについて没頭する時間であることをよく分かっている。

一方で、【ウ】自分で考えたり、決めたりする 【カ】これからの生活に生かすことができる の項目については、3割の児童が否定的に捉えている。【ウ】に関しては、自分の調べていることと友達の調べていることを比較したり共通点を探したりする活動の難しさを感じているためと考えられる。児童にとって、一緒に活動をする時には相談し合いながらになるものの、「自分は自分」「友達は友達」と考えているようなところがあるように感じる。また、【カ】これからの生活に生かすことができる の項目は、SDGs と自分の学習の関わりについての設問が結果を下げている。2年生になったばかりの児童にとって、SDG は1年生の時に知ったものの、自分の学習との関わりまで考えるのは難しかったと考える。

本単元では、友達のと自分の考えを比較しながら聞くことを積み重ねていくことで、主体的に友達の考えを聞こうとする児童を育てたい。また、年間を通してSDGsに触れる機会を作ること、自分が調べていることは、いつか地球の未来に繋がるのかもしれないという思いをもち、より学習への関心を高めていくことを期待したい。

6 研究主題に迫るための手立て

(1) 主体的な学びを高める学習活動の工夫

- ・発表内容に応じた表現方法を選択させる。

今までの単元で行った発表経験を生かし、ここでは、伝えようとする内容に合った表現方法を更に工夫するようにしていく。表現方法は学級活動で行っている方法も含め、教師からも紹介する。

- ・児童一人一人の思いや願いの実現に向けた活動を展開する。

児童の興味・関心に合わせて意欲や主体性を引き出す活動に配慮する。「やってみたい」「知りたい」という児童の思いや願いがさらに膨らむよう、単元を通して定型化した「振り返りカード」を活用し、次時での活動への意欲や見通しを、担任が把握できるようにする。それを基に、次時以降の学習内容を練り直したり、児童一人一人に必要な学習教材を準備したりして、一人一人が主体的に学習に取り組める環境を形成していく。

- ・気付きの質を高め、思考を促す効果的な声かけをしていく。

生活科の学習において、気付きの質を高めるためには「見付ける、比べる、たとえば、試す、見通す、工夫する」などの多様な学習活動を行うことが重要である。気付きを比較したり分類したり特徴的なものを精選したりする場面では、思考を促す効果的な声かけがあることにより、考えたことを外化し、児童の気付きを深めることができる。振り返りカードでは単元の終末に単元を通して自分を見つめ、自分の成長に気付くことができるようにする。

(2) タブレットの活用の工夫

①学習活動における工夫

- ・発見を可視化する。

写真によって一人一人の発見を可視化し共有することで、友達の発表を比較したり共通点を見つけたりすることができる。対象物のイメージを広げていくことは、新たな意欲の高まりにつながる。

- ・ロイロノートではある程度の型を示す。

発達段階的に情報機器の操作に戸惑う児童もいる。2年生なりのICT活用と考えると、ある程度型を示し、華美になりすぎないように、そして内容から逸れないようにすることも必要である。

②eポートフォリオの作成と活用の工夫

- ・一次ポートフォリオからまとめポートフォリオに向かう活動

再度過去のポートフォリオを比較したり、心に残る特徴的なものを精選したりすることで、授業後の更なる気づきが生まれる。一次ポートフォリオ（興味関心によってとりあえず集めた資料やたくさんの写真など）の中から興味のあるものを精選する。どの単元においても、一次ポートフォリオを有効に活用できるよう指導計画をたてることで、児童が自信をもって資料の精選や情報の活用に取り組めるようになると考える。

(3) 「持続可能な学び」SDGsとの関連

- ・朝学習で低学年児童の発達段階に即したSDGs関連の話題等に触れる

低学年の児童には、SDG s の目標に触れる機会を増やしていくことが大切である。普段から話に出したり、教室に掲示したりする。また、自分の当番活動の仕事がSDG s のどの項目に繋がっているのか考えさせ、教師の言葉で価値づけていく。

- ・生活科の学習において、SDG s との関連を児童に示す

生活科で学習していることが、SDG s とどのような関連があるのかを、教師が児童に示していく。日常的にSDG s に触れる機会を増やしつつ、学習の中ではどのような関連があるのかを示すことで、児童は自然な形でSDG s を認知していけると考えた。

7 指導計画・評価計画（全9時間）

時	問題解決の流れ	「小単元名」・○ねらい・ 評価規準	学習活動	他教科等との連携
1	つかむ	「うさぎをかんさつしよう」 ○連光寺で飼育しているうさぎに関心を持ち、育てたいという願いをもって、生き物に関わろうとしている。 オ	◇連光寺で飼育しているうさぎについて、知っていることを話し合う。 ◇うさぎを観察して、今後の関わり方についての思いをまとめる。	★道徳「がんばれアヌーラ」
1	つかむ	「うさぎについて学習するためのけいかくを立てよう」 ○うさぎについて学習するための計画を立てることができる。 ウ・オ・カ	◇友達とうさぎについて学習したいことを話し合ったり、関わり方を考えたりして、学習計画を立てる。	
2	追究する	「うさぎの育て方や関わり方を調べよう」 ○自分たちで立てた計画に基づいて、うさぎの育て方や関わり方を本やインターネットで調べたり、獣医に聞いたり、直接触れ合ったりして、よりよい関わり方について考えている。 イ・ウ・オ・カ ○諸感覚を使って観察し新しい発見をする。 ア・エ ○うさぎとの触れ合いを振り返り、気付いたことを表現する。 ア・ウ・エ	◇うさぎについて調べたい事柄をもとに、図書資料やインターネットを用いて調べる。 ◇獣医から話を聞いたり、うさぎと触れ合ったりして、どのようにして関わればよいのか考えたことをポートフォリオカードにかき表す。	★国語「かんさつ名人になろう」
1	つかむ	「これまでの活動を振り返り、もっと知りたいことをまとめよう」 ○これまでの活動を振り返って、もっと知りたいことや調べたいことを整理して、次時に向けた計画を立てる。 ウ・オ・カ	◇これまでに学習したことを話し合ったり、関わり方を考えたりして、解決したいことを明らかにする。	
1	追究	「獣医さんに、知りたいことを聞いてみよう。」	◇獣医から話を聞いたり、質問したりして、わかったことや考えたことを	

	する	○これまでに調べたり、関わったりしたこと から生まれた疑問や不思議を、獣医さんに 質問して、よりよい関わり方について考 えている。 イ・ウ・オ・カ	カードにかき表す。	
2	まとめる	「つたえるじゅんぴをしよう」 ○ウサギの学習を振り返り、各自伝える内容 を厳選し、まとめる。 ウ・エ	◇振り返りカードに、これまでの学習 記録を参考にして、まとめる。	★国語「こんなもの、見つけたよ」
1	発信する	「はっけんしたことをつたえよう」 ○うさぎのことを振り返り、各自伝える内容 を確認する。 ○うさぎについてのまとめをグループごとに 1年生に発表し、身近な生き物に対する気 づきや興味関心を深める ア・ウ・カ	◇ロイロノートまとめた内容とその 理由をグループで確認し、1年生に 発表をする。	
	ふりかえる	「うさぎの学習をふりかえろう」 ○調べたこと、関わったこと、まとめたこと、 1年生へ発表したことの一連の流れを通し て学んだことについて振り返る。 ○学習をする前と学習をした後の自分の変容 に気付く。 ア	◇本時を振り返り、うさぎとの関わり 方について、自分の思いを友達に伝 える。 ◇振り返りカードに記入する。	

8 本時案（9/9時間目）

（1）本時の目標

- ・連光寺で飼育しているうさぎについて、これまでに調べたりまとめたりしてきたことを、一年生に向けて発表する。
- ・一連の活動を通じた自分の成長に気付く。

（2）本時の展開

学習活動	◆評価規準（）評価の方法 ・指導上の留意点
1 今までの学習を振り返り、本時のめあてを確認する。	
うさぎについて、一年生にわかりやすく紹介しよう。	
2 グループごとに、自分たちの調べてきたことについて1年生に紹介する。	・普段から交流のある、縦割り班ごとに紹介する。 ・まとめたカードを、1年生に見やすいように発表させる。 ・時間が余った際には、2年生から1年生の興味を聞き出したり、発表に使った資料をもう一度見せたり、写真を見せたりと、臨機応変に動き、1年生を楽しませるようにする。 ◆ウサギの学習のまとめを、分かりやすく1年生に伝えようとしている。思・判・表 (ロイロノート・観察)
3 単元の活動の振り返りをする。	・全体の発表終了後、1年生は教室に戻り、振り返りを2年生だけで行う。 ・単元を通して気付いたこと、できるようになったことに目を向けさせ、振り返りをする。 ◆単元を通して、ウサギとの関わりや資料の調べ方、まとめ方、発表の仕方のそれぞれの段階で自分が成長していることに気付いている。知・技（振り返りカード）
4 獣医さんからの話を聞く。	・自分ができるようになったことに気付くよう獣医さんの話を児童に価値づける。

9 成果と課題

《成果》

- ・発表する対象を1年生とすることで、児童は意欲的に学習に取り組むことができた。
- ・獣医さんにきていただいたことで、児童は獣医の視点からうさぎについて理解を深めることができた。
- ・獣医さんが児童の質問や疑問を、自分で調べて分かることと獣医が答えないと分からないことを分けてくださったおかげで、やぎの学習をすすめた時に、自分たちで調べることと、獣医さんに聞くことを分けて考えることができるようになった。

《課題》

- ・ゲストティーチャーとしてきていただいた獣医さんが、年5回来ることになっており、カリキュラムマネジメントが難しかった。5回中4回をうさぎについての学習にしたため、他の単元とのバランスが取りづらかった。

せいかつか せいかつ じこ ひょうか
 生活科～いきいき生活～ 自己評価シート

2年（ ）くみ 名前（ ）

もくひょう できるようになったこと		4月				3月			
		4 すごくよ くできる	3 できる	2 あまりで きない	1 できな い	4 すごくよ くできた	3 できた	2 あまりで き な か つ た	1 できな か つ た
ア ちいきのことを知る。									
(1)	学校のまわりのことを知ることができた。	27%	55%	9%	9%	50%	40%	10%	0%
(2)	学校のまわりのよいところに気づくことができた。	33%	48%	19%	0%	75%	25%	0%	0%
イ ベんきょうのしかたを知る。									
(3)	本を読んだり、インタビューをしたりして、しらべることができた。	58%	26%	11%	5%	73%	27%	0%	0%
(4)	しらべたことをもとに、まとめることができた。	39%	52%	9%	0%	67%	27%	6%	0%
ウ 自分で考えたり、きめたりする。									
(5)	自分がしてみたいことや、しらべたいことをきめることができた。	24%	43%	19%	14%	75%	20%	5%	0%
(6)	友だちと自分のしらべたことをくらべて、考えることができた。	22%	44%	17%	17%	30%	60%	10%	0%
エ 気づいたこと、考えたこと、楽しかったことをつたえる。									
(7)	学しゅうをしてわかったことを、せいいりしてまとめることができた。	27%	56%	17%	0%	70%	20%	10%	0%
(8)	学しゅうをしてわかったことを、ほかのひとにつたえたり、くふうしてはっぴょうしたりすることができた。	17%	72%	11%	0%	40%	60%	0%	0%
オ すすんで自分から行動する。									
(9)	楽しく活動にとり組むことができた。	90%	5%	0%	5%	55%	35%	10%	0%
(10)	友だちときょう力して活動することができた。	82%	18%	0%	0%	45%	45%	10%	0%
カ これからの生活に生かすことができる。									
(11)	学習したことを、ふだんの生活に生かすことができた。	68%	27%	5%	0%	42%	35%	23%	0%
(12)	学しゅうしたことが、SDGsとかかわりがあることを知り、よりよい生活にしていこうと思うことができた。	17%	30%	48%	5%	55%	45%	0%	0%

【考察】

年度当初にとったアンケートを比べると、全体的に「よくできた」「できた」が増えている傾向があることが分かった。1年生の時に比べ、発表資料作成の際にタブレットをうまく活用しながら学習を進めたことが、より分かりやすい発表資料に繋がり、自分の自信につながったと考えられる。ただし、特定の項目に関してはやや下がっている傾向が見られる。学習の進め方の見直しも含め、教師側が児童の学習に対する価値付けとなる声掛けを今後も意識していく必要がある。

○アについての2項目では、肯定的な回答が大きく増えている。「まちたんけん」の単元では、自分の興味関心に基づく場所へ探検に出かけ、インタビューをし、まとめる活動を行った。この単元で初めて、グループごとの調査、まとめをしていくことになり、当初は苦勞していたものの、児童の中で「頑張った」「やり切った」達成感に繋がったと考えられる。

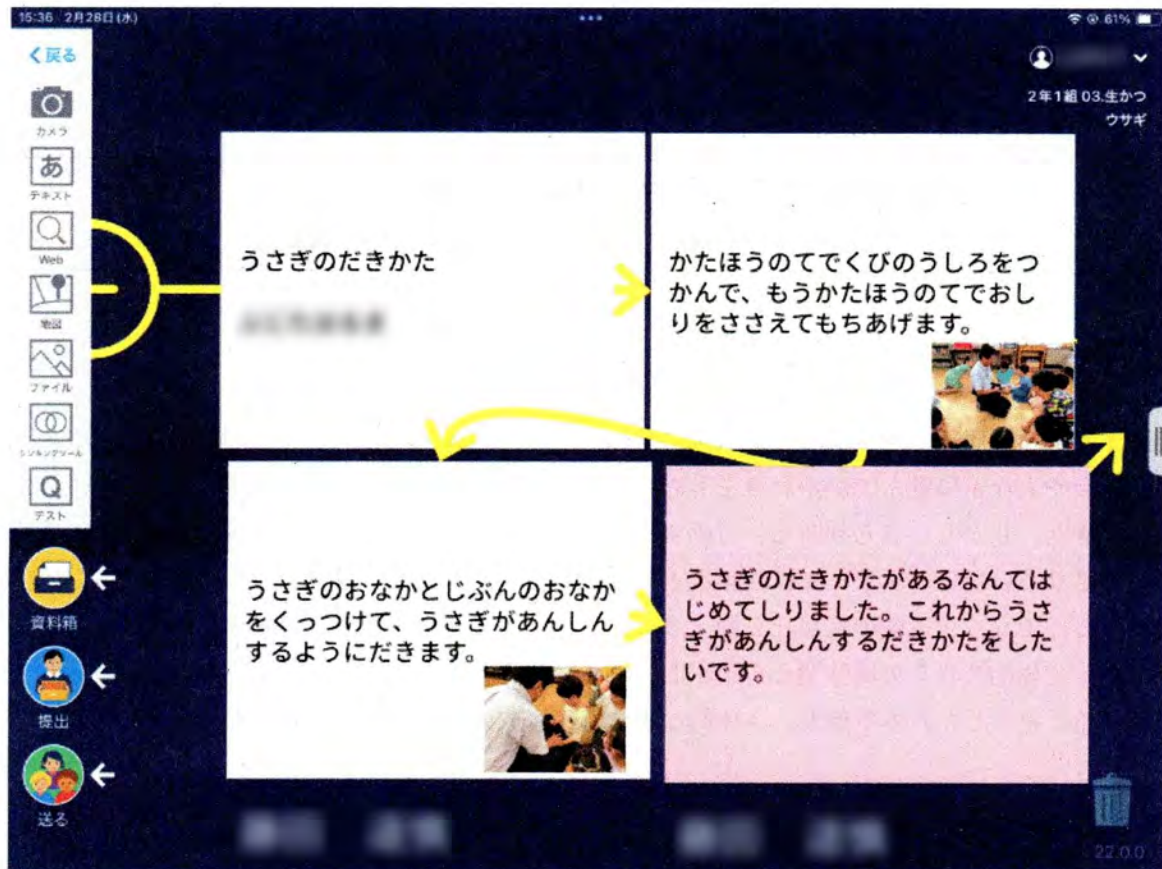
○イについての2項目でも、年度初めに比べて年度末に肯定的な回答が大きく増えている。特に、「ヤギはかせ」「ウサギはかせ」の単元では、インタビューや図書資料、実際のお世話の活動を通して児童が主体的に調べていた。分かったことについて「知らせたい」という思いを強くもち、まとめることができていたため、児童の自信につながったと考える。

○ウの(5)の項目については、単元の中で自分の興味関心に基づいて調べ、まとめ、伝えるサイクルを繰り返すことで、自分で調べることを決めることができるようになった自覚をもつことができたと考える。(6)に関しては、微増が見られるものの、全体的な回答に比べると低く出ている。友達の考えを自分と比べたり、共通点を見つけたり、まとめたりすることについては、生活科の学習のみならず、どの学習においても経験が必要である。各教科で身につけたスキル等をうまく活用できるよう、教師側の声掛けをしていきたい。

○エの2項目についても、概ね肯定的な回答となっている。2年生からタブレットを活用してまとめる活動を行うようになったことで、視覚資料を効果的に活用することができるようになり、児童の中でもうまくまとめることができた自覚があるようだ。一方で、2年生だとある程度の型を決めておくことが内容に集中するには必要なことだと実感した。

○オの2項目については、年度初めに比べると下がる傾向が見られた。1年生の時には学習内容について全身を使って思い切り楽しんできたところに、2年生になって調査をしたりまとめたりという活動が入ってきたことで、難しさを感じるようになったことも考えられる。しかし、「ヤギはかせ」「ウサギはかせ」の単元では、生活科の授業時間を超えて、日々の中で関わり、お世話等の活動することができていた。特にウサギは教室で室内飼いをすることで、朝や業間休みのたびに撫でに行く、抱きに行く様子があり、存分に関わってきているものの、そのことも含めて生活科の学習であることへの認識は児童の中にはないようだったので、こちらの声掛けを意識する必要がある。

○カの(1)については、23%の児童が「あまりできなかった」と回答している。こちらの声掛けで更に価値づけをしていく必要を感じる。(2)については、生活総合発表会の際に自分の活動がSDG sにどう関わるか考える時間をとったことで、2年生なりに関わりを考えることができるようになり、自分でも「できるようになった」と自信をつけることができた。来年度も計画にSDG sを組み込みと考えるきっかけが作れる。



中学年分科会

I 分科会テーマ

地域の環境の中で、主体的な思考過程を積み重ねながら、
自らの課題を見い出して解決していく学習過程の工夫

II テーマ設定の理由

連光寺小学校周辺の地域環境を最大限に活用して、生活科・総合的な学習の時間を中心に、自然や社会や人などに進んでかかわりを持ち、意欲的に活動に取り組む力を現中学年の児童も身につけてきた。しかし、自ら判断し、行動するという問題解決的な学習に対してはまだまだ、積み重ねが足りていない。本テーマは昨年度と同様であるが、低学年で身につけた力をもとに、地域を知るだけでなく、近隣の桜が丘公園・多摩川に今年度も焦点を絞り、地域の一員としての自覚を持ち、主体的に自らの興味関心を追求していく力をもっと高めていきたいと考え、本テーマを継続することにした。本年度も、主体的な思考過程育成のために以下の3点を重視する。

(1) 総合的な学習の時間を核としたカリキュラムマネジメント

総合的な学習の時間を核としたカリキュラムマネジメントの深化。各教科とのつながりを見極め、学んだ知識をつなげて学習を広げたり深めたりできる効果的な学習課程を作成していく。

(2) 探究学習のプロセス

自らの興味関心を極めていく中で地域に深い愛着をもてるとともに、主体的な思考過程を積み重ねながら、自らの課題「My SDGs」へたどり着く素地を育むことを目的とする。主体的な思考過程とは、(①課題の設定②情報の収集③整理・分析④まとめ・表現)の探究のプロセスである。このプロセスを繰り返し行うことで問題解決の学習方法を身につけながら総合的な学習の時間の本質である探究的な学習を進めていく。また、探究学習のプロセスの終末に、自分たちの学習していることはSDGsとどのような関わりがあるのかについて考える学習を位置づけることで、児童の活動の価値づけ、引いては自己有用感をもてるような教育活動につながると考えた。

(3) eポートフォリオの有効活用

デジタル化されたeポートフォリオで、積み上げてきた学習成果や記録を生かしながら、児童自身が自己の考えや情報を整理したり、意見の共有や交換をしたりすることで思考や表現に深まりが見られることが期待される。

以上の3点を踏まえたESDを通し、主体的な思考過程を積み重ねる学習を進めていく中でSDGsへと着眼させることによって、新しい時代に必要となる資質や能力を育成していくことができるようになると思った。

1 単元名

「わたしたちの桜ヶ丘公園」

2 単元について

（1）本単元では、学校に隣接している桜ヶ丘公園を中心に、その豊かな自然や施設などの環境に触れながら、一層、地域を大切にしていこうとする心情や態度を育てたい。学習の前半では、桜ヶ丘公園内を散策し、自分のテーマを見つけるために自然等を調査していく活動を行う。後半では、各自が専門的に調査するテーマを設定し、グループごとに学習した内容をガイド資料等にまとめたり、児童が自ら桜ヶ丘公園のガイドとなって仲間や地域に発信したりして、調査の成果を実感させていく。またSDGsについても同時に学びながら、この単元で学習した内容との関連を考えさせる。今後の自らの生き方の課題とSDGsの目標がつながるようにしていきたい。

＜ESDの育成を目指す6つの能力・態度＞

ア 環境や社会の仕組みを理解する。

イ 学び方を身に付ける。

ウ 課題をつかみ、考え、判断し解決する。

エ 価値を見いだし、思いや考えを伝える。

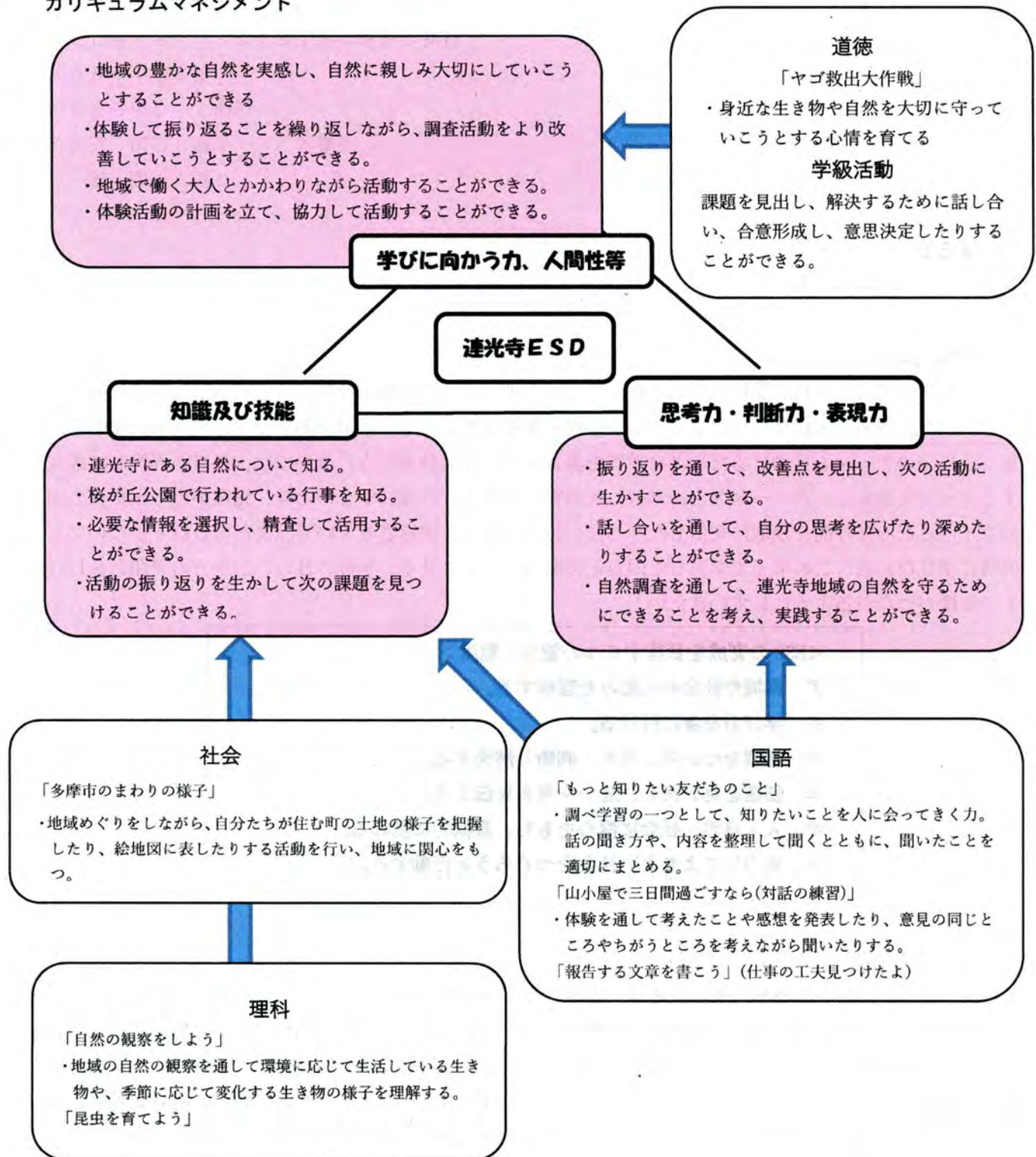
オ 人・自然・社会に関心をもち、意欲的に関わる。

カ 協力してよりよい社会をつくろうと行動する。

（2）主なカリキュラム・マネジメント

本単元は前期に学習する理科、社会、道徳、国語と多くの教科と関連させることができる。理科の「自然を観察しよう」「昆虫の育ち方」と関連させ、虫眼鏡を使った観察を行ったり、成長の様子を調べたりした。また、自然探検の際には、タブレット端末を活用し、見つけた物を動画や写真などで記録して、ICT機器を活用したポートフォリオとしてまとめることを他教科でも行った。プレゼン（報告文）の詩に動画を用いたプレゼン（報告文）に生かすことができる。また、本時の活動は国語科の「報告する文章を書こう」では、タブレット端末を用いて今まで調べてきたことをまとめ、発表し、相手から意見やアドバイス、質問を聞くことによってICT機器を活用しながら相互交流を行えている。「山小屋で三日間すごすなら」では、ロイロノートの共有ノート機能やシンキングツールを用いるなど、総合的な学習の時間で意見交換を行う活動に生かすことができる。

カリキュラムマネジメント



3 児童の実態

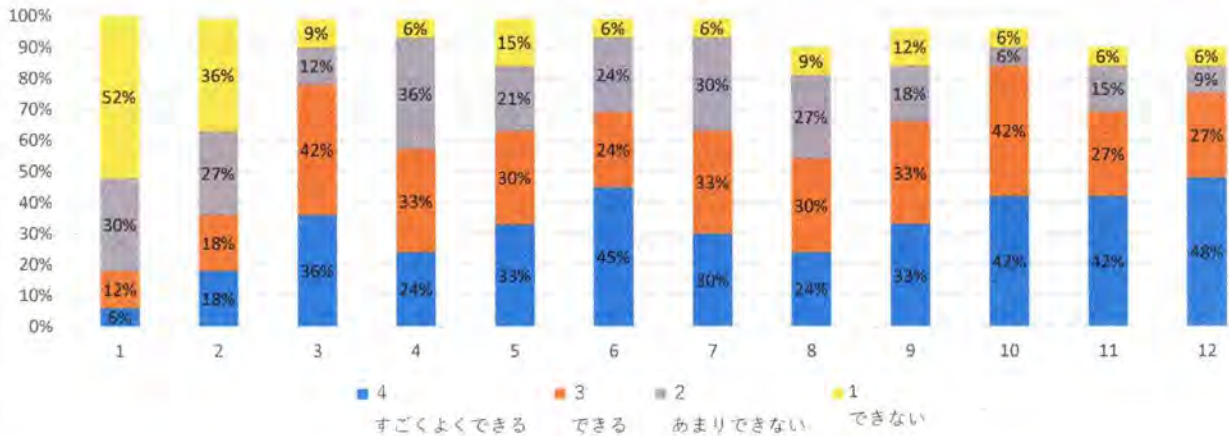
授業実践の前に児童の実態調査を行った。目的は授業実践の前に、総合的な学習の時間の授業に対する児童の実態を把握するためである。児童にアンケートに回答してもらい、それを分析と考察をすることにより、児童の実態を把握する。アンケートで用いた設問は以下の通りである。

令和5年度 総合的な学習の時間 アンケート項目

- 1 桜の丘学園の友達が、どのような生活をしているか知っている。
- 2 桜ヶ丘公園の自然や昔からあるものなど、地域の良さについて知っている。
- 3 本やインターネットを使って調べることができる。
- 4 調査や観察の方法がわかり、人に聞いたり、どこを調べるのかなど、自分で決めて活動することができる。
- 5 探検して分かったことを仲間と伝えあい、自分の考えを深めることができる。
- 6 自分が取り組みたいテーマを決めて、調べることができる。
- 7 自然の大切さを考えて、人に伝えることができる。
- 8 自分の考えたこと（テーマ）を工夫してまとめ、人に伝えることができる。
- 9 桜ヶ丘公園の自然にかんしんを持ち、活動することができた。
- 10 自然を守り、持続可能な社会を作ることが大切であると思うことができる。
- 11 自然を守るために、自分ができていることを考えることができる。
- 12 自然を守るために、自分ができていることを協力して行うことができる。

設問1では、桜の丘学園の児童の生活について肯定的な回答をした児童は少なくなっている。そのため、障がいへの理解を進めながら、徐々に交流を進めていく。設問10、12の回答では、肯定的な回答の割合が高くなっている。低学年時の生活科の授業において、身近な自然に関わりをもちながら学んできたことで、学校の周りの身近な自然に愛着をもっている児童が多いことが分かる。また、連光寺の自然について知りたい、調べたい、そして友達に伝えたいと感じている児童が多い。これまでの経験を大切にしながら、さらに、フィールドワークの範囲を広げることによって学びを深めさせたい。そして、連光寺の自然などを守っていきたいという児童の気持ちを行動に移せるように学習内容を検討していく。設問3での本屋インターネットで調べることと比べ、設問4では、聞いたり、調べたりすることに対して、「少し苦手」と回答する児童の割合がやや高くなっている。国語の時間に学ぶ、目次や索引の見方についてカリキュラム・マネジメントを行うことで、調べる技能の成長を促したい。設問6については肯定的な回答となっている。しかし、めあてや目的を立て、個人やグループの活動を進めていく経験はまだ乏しく、積み重ねが必要であると考え。そうしたことから、本研究において、児童の実態、アンケート結果を踏まえ、単元目標を設定し、単元計画を検討した。本活動を通して、児童がどのように変化していくのかが非常に楽しみである。

自己評価シート実態



4 単元の目標

桜ヶ丘公園の自然に興味・関心をもち、体験を通して課題を見つけ、探究活動や探究学習を行い、問題解決学習の学び方を身に付ける。

5 単元の評価規準

《知識及び技能》

ア 地域の自然の特色を理解している。

イ 活動して見つけたことについて、図書資料やインターネットなどを活用して、さらに調べたりすることができる。

《思考・判断・表現》

ウ 活動の振り返りを生かして、次の課題を見つけ、解決方法を考えることができる。

エ 仲間と協力して話し合いを重ね、自分の思いをくふうして伝えたり、振り返ったりすることができる。

《学びに向かう力・人間性》

オ 地域の自然について、様々な立場の人々や仲間と関わりながら、意欲的に探究活動を行い、地域への愛着を持つことができる。

カ 身近な自然に親しみをもち、自然を大切にしようとしている。

6 指導の工夫

(1) 児童が主体的に活動するために教師の姿勢を以下の4つとする。

- ①児童がやりたいことを引き出す。
- ②児童の願いや思いが実現し、学習課題が解決できるように指導や助言を行う。
- ③児童の学習活動が主体的に展開するように、児童を観察し、評価しながら見守る。
- ④日常的にSDGsに触れさせることで、学びや活動がSDGsとどのような関わりがあるかを考えさせる。

(2) 探究学習のプロセスを重視する

- ①「課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現」の学習課程を定着させる。
- ②小グループ編成で一人一人が話し合いに主体的に参加できるようにする。
- ③本時の振り返りだけでなく、次時の活動計画を立てることで、より主体的な活動となるようにする。

④国語科の学習を生かして役割分担し、話し合い活動を行わせる。

(3) eポートフォリオの活用

①ロイロノートを活用し、タブレットでeポートフォリオを作成させる。

②ポートフォリオに写真や動画、音声、WEB資料などを組み込ませる。

③個人のポートフォリオを共有、整理し、シンキングツール等も活用しながらグループのポートフォリオを作成させていく。

④作成されたポートフォリオを提出箱に提出させて学習状況を把握する。

⑤ロイロノートの「共有ノート機能」を用いて、お互いの意見を見ながら、グループのまとめを全体で整理することができる。

7 単元の指導計画（全45時間）

ねらい	問題解決の流れ □時間	○主な学習活動	[教科との連携]
・学習活動を計画し、見通しをもつ	つかむ 1	○オリエンテーション 生活科の学習をふりかえり、隣接する桜ヶ丘公園でやりたい学習について話し合い、ねらいを決める。	
・桜ヶ丘公園の自然を知る	体験する 3	○自然観察 1 ・桜ヶ丘公園を散策し、豊かな自然を実感する。(鳥の鳴き声、桜の花と新緑 等) ・観察してきたことをふりかえる	・社会「わたしたちのすむ町」
	3	○自然観察 2 ・調べたいものを決め、桜ヶ丘公園で自然観察をする。 ・観察してきたことをふりかえる	・理科「しぜんの観察をしよう」
・桜ヶ丘公園の自然を調べる	3	○自然観察 3 ・調べたいものを決め、桜ヶ丘公園で自然観察をする。 ・観察してきたことをふりかえる	
	3	○自然調査 4 ・調べたいものを決め、桜ヶ丘公園で自然観察をする。 ・観察してきたことをふりかえる	・理科「昆虫を育てよう」
	2	○タブレット端末や書籍での調査 ・体験活動を基に、タブレットや書籍で調べ学習を行う。	・国語「百科事典の使い方」
	2	○SDGsについて知る ・17の目標を知り、自分が興味関心ある事柄について調べる。	
	1	○調査グループ作り ・eポートフォリオを用いて、自分が調べたいことを共有し、調査グループを作る。	
	3	○グループ調査・個人のまとめ 1 ・桜が丘公園内を調査。 ・調査してきたことをふりかえる。	「もっと知りたい友だちのこと」

		・疑問について調べ学習を進めたり、専門家に聞いたりして課題解決を図る。 ・観察して分かったことを各自、eポートフォリオにまとめる。	
	2	○グループごとにふりかえり・話し合い 1 ・調査内容の共有、知識理解を深める ・グループ内で対話や意見交流を行い、見識を深める。 ・次回の調査内容について精選する	「山小屋で三日間過ごすなら(対話の練習)」
	3	○グループ調査・個人のまとめ 2 ※調査1と同様	
	2	○グループごとにふりかえり・話し合い 2 ※ふりかえり・話し合い1と同様	
	3	○グループ調査・個人のまとめ 3 ※調査1と同様	
	2	○グループごとにふりかえり・話し合い 3 ※ふりかえり・話し合い1と同様	
	2	○自分のeポートフォリオの整理 ・調べた情報を整理する。	
・桜ヶ丘公園の自然をまとめる。	まとめる 8 (本時)	○発表用の資料作り ・発表したい内容の台本や資料を個々に考え、下書きの資料をロイロノートでプレゼンとしてまとめる。 ・グループで発表する内容を検討し決定する。 ・グループごとにロイロノートでまとめたプレゼンの資料を作成する。 ・プレゼン資料に合わせて発表のグループの下書きを作成する。 ・下書きガイド台本、ポートフォリオをもとに、調査したことの発表台本を考える。 ・他グループと報告会をしてアドバイスをもらう。	・「山小屋で三日間過ごすなら(対話の練習)」 ・国語「報告する文章を書こう」
・桜ヶ丘公園の自然を伝える。	表現する 2	○生活総合発表会で発表する ・ガイド資料と共に、調査して感じたことをグループで分担しながら個々に発表する。	
・自分の学びをSDGsにつなげる。	広げる 1	○自分の学びとSDGsとの関連を考える。 ・1年間の公園での学習は、SDGsとどのように関係しているのかを捉え、目指すべき世の中について考える。	

8 本時 12/21(木) 5 時間目

(1) 本時の目標

グループ内で調査してきたことの各自のeポートフォリオの意見交流をし、発表会に向けて伝えたい内容を決定する。

(2) 本時の展開(33/45 時間)

児童の活動	◆評価規準 () 評価の方法 ○留意点
1. 本時のめあてを確認する。	
これまで調べて分かった事をグループ内で伝え合い、発表する内容を決めよう	
2. 繰り返し作成してきた各自のeポートフォリオを伝え合い、意見を共有する。	○情報共有・発表への準備等目当ての確認を行う。 ○「課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現」の学習課程を確認する。 ○共有ノートのシンキングツールにまとめた各自の発見について分類させる。※シンキングツールは各グループで選ばせる。 ○個々の発表ごとに質問や意見など、口頭でもやり取りを行う。※国語「山小屋で三日間過ごすなら(対話の練習)」の学習で、個人で考えたことを材料に話し合う。
3. 話し合い・意見交換を通してグループごとに発表する内容を精査して、表現する。	○分類した結果等から特に伝えたいことをシンキングツール内で格付けさせる。(伝えたいことの度合い)
4. グループごとに伝えたい内容について発表する。	○各グループの進行状況をお互いに把握し、次時への意欲づけを行う。
5. 学習の振り返りを行う。	≪思考・判断・表現≫ オ 活動の振り返りを生かして、次の課題を見つけ、自分の思いを工夫して伝えたり、振り返ったりすることができる。 (eポートフォリオ)

<授業を見る視点>

- ①ロイロノートの共有ノート(シンキングツール)を用いたことで、話し合いが円滑に進んだか。
- ②他グループの発表を聞き合い、振り返りを行ったことで、意欲や個々の視点の幅が広がったか。

9 成果と課題

<成果>

- eポートフォリオやロイロノートの共有ノート機能を使ってきたことで、個々の意見が反映されやすくなり、データを見ながら口頭での交流もスムーズだった。
- ロイロノートのシンキングツールの選択に自由性を持たせることによって、個性のある思考整理が見られ、児童同士の学びへつながったと思われる。
- 学びのサイクル「調査→まとめ→話し合い→めあて」が提示してあることが探究学習のプロセスの意識

へつながった。

<課題>

○調査結果に対する正確性を教員側が確認しておく必要がある。各グループの進捗状況を把握し、まとめの資料を正しい情報を発信できるように、指導者側が予期される質問や必要な情報を事前に用意して、各児童のグループの軌道修正をしていけるとよい。

○専門家による児童それぞれへの個別の対応ができる機会がさらに多くあると、質の高い資料の作成へとつながると思われる。

総合的な学習の時間～桜ヶ丘公園ガイドになろう～ 自己評価シート

3年

活動の目標とできるようになったこと		4月				3月			
		4 すごくよくで きる	3 できる	2 あまりできな い	1 できない	4 すごくよくで きた	3 できた	2 あまりできな かった	1 できな かった
ア 地域の自然の様子や自分たちのくらしとのつながりを知る									
(1)	桜の丘学園の友達が、どのような生活をしているか知ることができる	6.4%	12.7%	19.1%	63.5%	41.3%	36.5%	11.1%	7.9%
(2)	桜ヶ丘公園の自然や昔からあるものなど、地域の良さについて知ることができる	12.7%	23.8%	30.2%	28.6%	39.7%	34.9%	11.1%	7.9%
イ 調べる方法を身に付ける									
(3)	本やインターネットを使って調べることができる	36.5%	36.5%	15.9%	11.1%	55.6%	17.5%	14.3%	6.4%
(4)	調査や観察の方法がわかり、人に聞いたり、どこを調べるのかなど、自分で決めて活動することができる	20.6%	34.9%	34.9%	6.4%	30.2%	36.5%	19.1%	6.4%
ウ 自分のテーマを決めて、計画を立て、調べる									
(5)	探検して分かったことを仲間と伝えあい、自分の考えを深めることができる	22.2%	34.9%	27.0%	14.3%	30.2%	31.8%	11.1%	9.5%
(6)	自分が取り組みたいテーマを決めて、調べることができる	33.3%	23.8%	27.0%	14.3%	44.4%	28.6%	12.7%	4.8%
エ 自然の大切さについて自分の考えをもち、思いや考えを人に伝える									
(7)	自然の大切さを考えて、人に伝えることができる	25.4%	30.2%	30.2%	12.7%	44.4%	27.0%	7.9%	7.9%
(8)	自分の考えたこと（テーマ）を工夫してまとめ、人に伝えることができる	17.5%	27.0%	33.3%	17.5%	33.3%	25.4%	17.5%	9.5%
オ 地域の自然に関心をもち、意欲的に活動を行う									
(9)	桜ヶ丘公園の自然に関心をもち、活動することができた	17.5%	20.6%	17.5%	38.1%	47.6%	27.0%	11.1%	4.8%
(10)	自然を守り、持続可能な社会を作ることが大切であると思うことができる	46.0%	31.8%	11.1%	9.5%	44.4%	28.6%	7.9%	6.4%
カ 協力して自然を守るために行動する									
(11)	自然を守るために、自分ができることを考えることができる	30.2%	41.3%	15.9%	6.4%	41.3%	30.2%	11.1%	4.8%
(12)	自然を守るために、自分ができることを協力して行うことができる	28.6%	38.1%	14.3%	9.5%	33.3%	36.5%	11.1%	6.4%

【考察】

全体的にどの項目においても4月(学習開始時)と3月(終了時)時点での「すごくできた」や「できた」のポイントの増加が見られた。今年度も一人一台タブレット端末の活用がルーブリックにも大きく作用していると思われる。昨年度と同様に機能を発展・応用させながらタブレット端末を生かしてきた。そのことも大きく影響し、知識技能、意欲や態度、思考力、全ての観点において大部分の児童が目的を達成し、成果を実感している様子が伺える。

- アの(1)と(2)については両方とも大きなポイントアップが見られる。实地踏査や地域の人々との交流を通して桜ヶ丘公園の自然や施設、地域の桜の丘学園の活動についての知識が深まり、地域の特性やその良さを感じ取る意識が向上した。
- イの(3)と(4)に関しても肯定的な意識の向上が見られる。事前に課題を明確にし、専門家に聞いたり、書籍で調べたりと主体的に調査を行った。また、タブレット端末を生かして検索をしたことは昨年度の生活科の授業から進めており、下地はできている。今年度は更にタブレット端末での検索を自在に行うことができ、目的に応じた調査を進めることができた。
- ウの(5)と(6)に関してもポイントが向上した。タブレット端末、ロイロノートアプリでまとめとしてe-ポートフォリオの作成を蓄積していった。e-ポートフォリオを基に思考ツールや共有ノート機能を用いることで、自らの思考を論理的に整理し、問題解決的な学習のサイクルを踏みながら、他者との合意形成の態度や多様性の尊重の意識が高まったと思われる。
- エの(7)と(8) に関しても肯定的な意識がポイントから見られる。学習してきたことを自分事として捉え、地域に対する自分の考えや願いをもつことができた。また、各自がe-ポートフォリオにまとめてきた内容をグループ内で容易に共有することで、意見交流を行いながら表現力が高まっていったと推測される。
- オの(9)と(10)でも肯定的な意識が約 7.5 割と高水準である。地域の自然や人々と直接関わる活動を積み重ね、自分事として課題を捉えながら、学習活動を進めていった。より良い環境や社会づくりに向かうことが大切だという意識が向上したのであろう。
- カの(11)も肯定的なポイントが多数を占め、(12)でも肯定的なポイントが伸びている。桜ヶ丘公園探検の終末には今後の地域の環境に対するより良い具体的な姿を考えたり、桜の丘学園との交流の終末には誰もが暮らしやすい社会づくりのためにユニバーサルデザインを考えたりした。今後は実際に行動へと動くための社会参画力をさらに養っていけると良い。

今後も、学習活動に応じたルーブリックづくりのため、評価項目の見直しや改良を行っていく必要がある。そのルーブリックを生かしながら自己評価を実施し、内省的な振り返りを行うと共にメタ認知力の向上を図らせていく。そして主体的な思考過程の中で自らが課題を見つけ、解決していける能力を身に付け、持続可能な社会づくりやSDGsへの関わりの意識向上へとつなげていく。

＜探検後の個人の振り返りポートフォリオ＞

今回の発見

桜ヶ丘公園で

見たもの・気づいたこと・分かったこと
秋になると、夏に見えない秋の植物がある



今日の発見、分かったこと

やっぱり先生が言っていたように目をとじると鳥やし
せんらの音がきこえました。なんかの生き物がつちを
ほったあとがありました。歩いてたら木にきのこが
あってそこにありがたいすをつくってびっくりし
ました。それにへんなところにたんぽぽがあっ
てびっくりしました。



＜共有ノートによる意見の共有と交換＞

1位	2位	3位
 シンボルツ 樹の近く	 シンボルツ 樹の近く	桜ヶ丘公園の 木にいた。
		桜ヶ丘公園の 木にいた。
		桜ヶ丘公園の 木にいた。



＜共有ノートを活用した話し合いポートフォリオ＞

夕日の丘方面では…

里山くらぶ方面では…

桜ヶ丘公園の木は秋になると葉っぱが赤く染まる →

里山クラブ方面は木がたくさんA-A-A

里山クラブ方面にすごいもっこりした木がありました。

広場のベンチの横にヤマザクラの木が生えていました

宇宙桜 醍醐桜が夕日の丘方面にある

広場のベンチの横にヤマザクラの木が生えていました

記念館方面では…

記念館方面は秋になると真っ赤の紅葉（もみじ）がとってもキレイ

もみじは、大やど公園や記念館に生えている

記念館は秋にもみじがたくさんあるし、しかも日が当たるときれいなのでおススメです

夕日に桜ヶ丘公園に行ったらさくら木の花の葉っぱが落ちてた

とんぼの広場では…

第4学年 総合的な学習の時間 学習指導案

日時 令和5年12月4日(月) 第5校時

多摩市立連光寺小学校4年2組 34名

指導者

1 単元名

「川は自然の宝箱」

2 単元の目標

多摩川の自然に関心をもって体験活動や問題解決学習を行うことを通して、課題追究の力を身に付けるとともに、地域の自然への親しみや愛着を感じながら、自分達が自然とどのように関わり、行動することで持続可能な社会がつくられていくのかを考える。

3 単元について

(1) 単元の捉え方

本単元では、地域の自然を学ぶ場として、多摩川やその支流である大栗川を取り上げている。川には様々な生き物が存在し、それらが互いにつながり合って生態系を構成している。児童にとって発見や疑問の尽きない、自然という学習材の宝庫とも言える場所である。学習を行う前の児童は、地域を流れる川の存在は認識しているものの、直接川の自然に触れる経験は少ない。児童は、多摩川での体験活動を通して川のもつダイナミックな自然を体感することで、自然の魅力を実感するとともに、興味や関心に沿った問題解決学習を豊かに行っていくことができると考えている。

多摩川の教材としての魅力は、自然にあるだけではなく、多摩川を活動の場とする地域の方々や専門家の方々の存在によるところも大きい。川や生き物の魅力、調査の方法を伝授してもらったり、児童の安全な活動を見守っていただいたりしている。さらに、多摩川の抱える課題も示唆してもらえる。このことは、ESDの視点から環境を考える時に欠かすことができない。自分がどのように川と関わっていくのか考えるためには、地域の方々と直接関わり、声を聞くことは重要である。

また、様々な教科と関わることも多摩川学習の特徴である。特に社会科とのつながりは大きい。総合的な学習の時間がスタートしたころより、本校で4年生が多摩川を取り上げているのは、「くらしをささえる水」という単元との関わりによる。人間のくらしに欠かせない上水、下水の学習と多摩川の学びを重ねながら「水の循環」について深く考えていくことは、持続可能な社会を考える姿勢を育てることにつながる。それは、次の学年へとESDを発展させていくための基礎を育成していくことになる。こうしたカリキュラム・マネジメントは、どの教科の中でも考えることができ、多摩川は、まさに「学習教材の宝箱」と言える。

<ESDの育成を目指す6つの能力・態度>

ア 環境や社会の仕組みを理解する。

イ 学び方を身に付ける。

ウ 課題をつかみ、考え、判断し解決する。

エ 価値を見いだし、思いや考えを伝える。

オ 人・自然・社会に関心をもち、意欲的に関わる。

カ 協力してよりよい社会をつくろうと行動する。

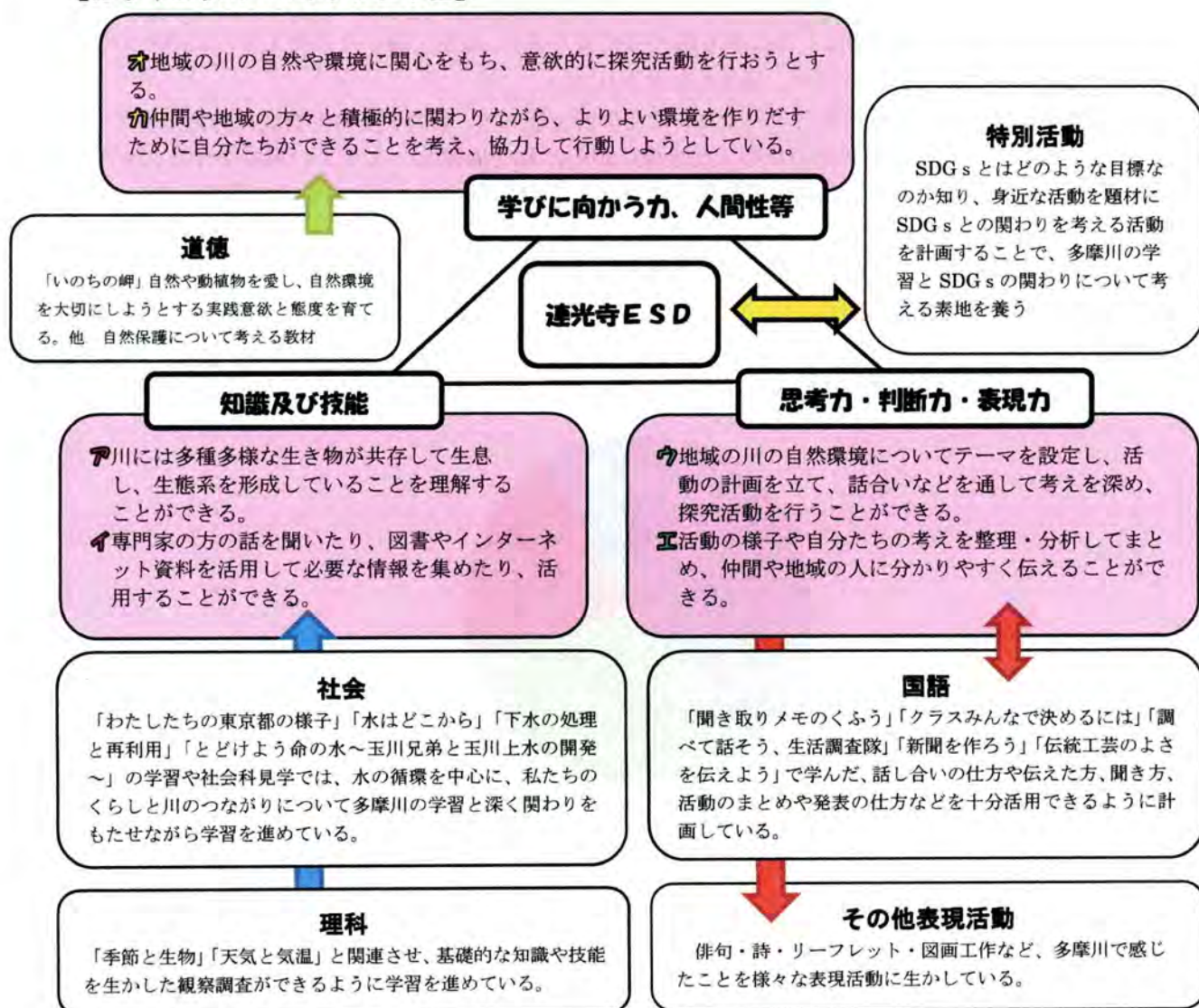
(2) カリキュラム・マネジメント

前述したように、社会科との関わりは大きい。上水や下水、ごみ処理を扱う「住みよいくらしをつくる」、玉川上水を扱う「東京都の伝統や文化、東京都の発展につくした人々」などで、多摩川とのカリキュラム・マネジメントをは図り、持続可能な社会を考えることにつなげている。東京都水道局の出前授業をお願いしたり、多摩川の上流や下流へ行く社会科見学を計画したりすることで、児童の関心を高め、多面的に考えることができるようにしている。理科では、「季節と生物」の単元とのつながりが大きい。季節によって変化する多摩川の様子をこの単元と関連付けて学ぶことで、実感をともなった知識を身に付けることができる。また、専門家から伝授される調査方法は、児童の観察の技能や思考力を高めることにつながっている。国語科の「聞き取りメモのくふう」「クラスみんなで決めるには」「調べて話そう、生活調査隊」「新聞を作ろう」「伝統工芸のよさを伝えよう」等の単元で身に付ける言語能力は、協働して活動するための話し合い活動や、多摩川の体験活動を振り返ったり、まとめたりする学習を支えている。また、多摩川の学習は、国語科で養われる言語能力を生かし、さらに伸ばす場ともなっていると見える。

道徳では、ウミガメの保護に関わる人々の思いを考える「いのちの岬」という教材がある。この学習を出発点として、自然保護へ目を向けたり、自分にはどんなことができるか考えたりする道徳の学習を行っている。自然保護の観点から持続可能な社会を考えることで、広い視野で多摩川との関わりを考えることができる。

特別活動の中には、SDG s とはどのような目標なのかを知ったり、関わりを考えたりする学習を計画した。SDG s のことに触れる機会を学習の中に計画することで、多摩川学習と SDG s の関わりについて考える素地を養うことが出来ると考えた。

【カリキュラム・マネジメント図】



4 単元の評価規準

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
ア川には多種多様な生き物が共存して生息し、生態系を形成していることを理解することができる。	ウ地域の川の自然環境についてテーマを設定し、活動の計画を立て、話し合いなどを通して考えを深め、探究活動を行うことができる。	オ地域の川の自然や環境に関心をもち、意欲的に探究活動を行おうとする。
イ専門家の方の話を聞いたり、図書やインターネット資料を活用して必要な情報を集めたり、活用することができる。	エ活動の様子や自分たちの考えを整理・分析してまとめ、仲間や地域の人に分かりやすく伝えることができる。	カ仲間や地域の方々と積極的に関わりながら、よりよい環境を作りだすために自分たちができることを考え、協力して行動しようとしている。

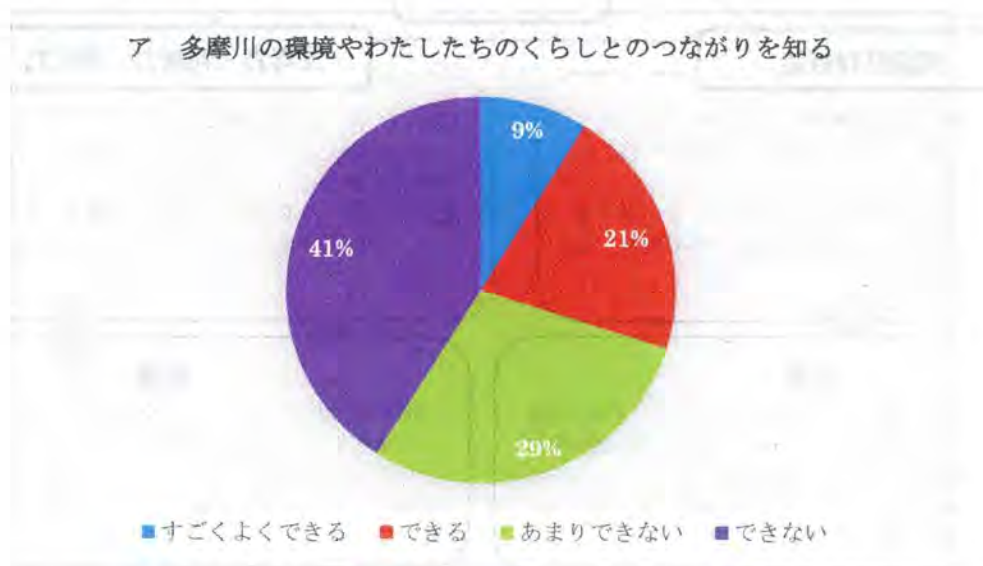
5 児童の実態

本学年の児童は、身近な生き物や植物に関心をもっている児童が多い。昨年までの町探検や公園探検の経験がその要因として考えられる。また、直接見たり、触れたりする体験に対して、意欲的に学習活動に取り組む姿が見られる。一つの事象を複数の視点で見られる児童も増えてきた。深めたいテーマが決まると、図書資料やインターネットを用いて調べたり、関係のある人物に話を伺いながら疑問に思っていることを解決したり、自らの課題に真摯に取り組める児童も多い。反面、調べ方や考え方に広がりがないかったり、発信力が著しく乏しかったり、弱点も散見される。

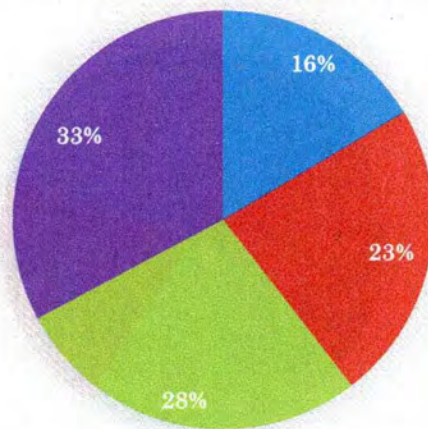
本年度も地域素材である多摩川を大テーマに、探究学習を通して、資質・能力の育成に努めてきた。上記した実態を鑑みたくえて、中学年の目指す児童像に迫る活動を展開し、よりよい環境を作りだすために自分たちができることを考え、協力して行動しようとしていく姿に迫っていくことを期待したい。

以下は、本単元が始まった4月に集計した、児童アンケートの結果である。

(令和5年4月実施 67名回答)

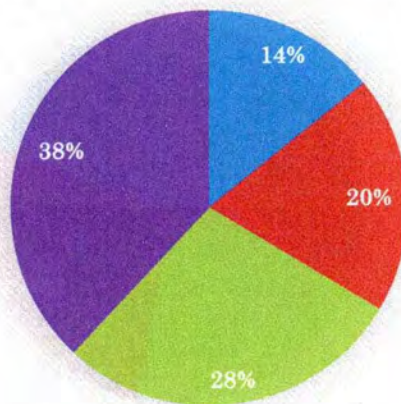


イ 調べる方法を身に付ける



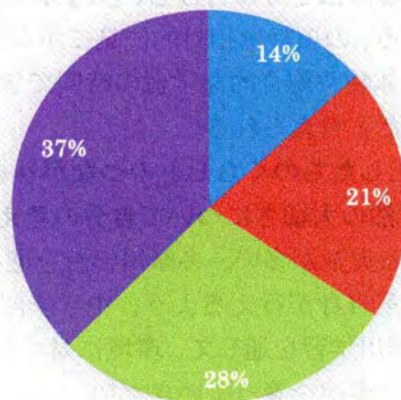
■ すごくよくできる ■ できる ■ あまりできない ■ できない

ウ 自分のテーマを決めて、計画を立て、調べる



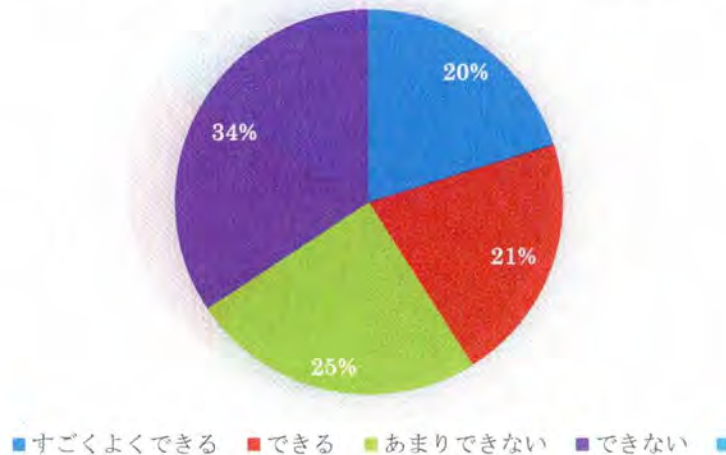
■ すごくよくできる ■ できる ■ あまりできない ■ できない

エ 自然の大切さについて自分の考えをもち、思いや考えを人に伝える

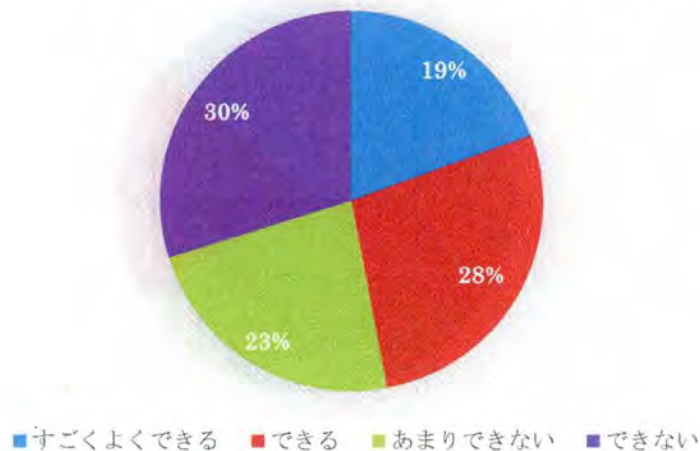


■ すごくよくできる ■ できる ■ あまりできない ■ できない

オ 水の流れや多摩川に関心をもち、意欲的に活動を行う



カ 協力して自然を守るために行動する



4月の学習始めのルーブリックのため、全体的にネガティブな結果が出ているが、項目で見ると多少の差異が見られる。**【イ】調べる方法を身に付ける、【オ】水の流れや多摩川に関心をもち、【カ】協力して自然を守るために行動する、**の項目は相対的に見てポジティブにとらえている児童が多い。昨年度までの生活科における学習体験や総合的な学習の時間で学習してきた桜ヶ丘公園での探究学習などの積み重ねがあつての結果だと考えられる。

反面、**【ア】多摩川的环境やわたしたちの暮らしとのつながりを知る、【ウ】自分のテーマを決めて、計画を立て、調べる、【エ】自然の大切さについて自分の考えをもち、思いや考えを人に伝える**の項目はネガティブにとらえている児童が多い。多摩川学習を進める中で、**【ア】【ウ】【エ】**の項目にポジティブな評価を年度末に児童自身が行えるよう、中学年部会の掲げる手立てを講じ、児童の変容を追っていきたい。また、多摩川学習を通して、環境に対する関心を一層高めることで、自分達の未来について考えることができる素地を養っていききたい。

6 研究主題に迫るための手立て

(1) 総合的な学習の時間を核としたカリキュラムマネジメント

総合的な学習の時間を核としたカリキュラムマネジメントの深化を図り、各教科とのつながりを見極め、学んだ知識をつなげ学習を広げたり深めたりできる効果的な学習課程を作成していく。

○国語を中心とした、話し合い活動の充実。話す・聞くの領域だけでなく、物語文・説明文の学習における、グループ学習を通しての他者との合意形成の積み重ね。また、話し合いの基本的な素地形成、他者意識のプレゼンテーション、発表で意識することの明確化など

○社会、理科の学習と総合的な学習の時間との関連を具体化し、総合的な学習との関連を深化

○特別活動における、SDG s に触れる学習の設定。SDG s のことに触れる機会を特別活動の学習の中に計画することで、多摩川学習と SDG s の関わりについて考える素地を養う

(2) 探究学習のプロセス

自らの興味関心を極めていく中で地域に深い愛着を持てるとともに、主体的な思考過程を積み重ねながら、自らの課題「My SDG s」へたどり着く素地を育むことを目的とする。

○「課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現」の学習課程を定着させる。

○総合的な学習の時間と SDG s との関連性を児童が明確に出来るよう、自己のまとめ（1回目）→テーマグループのまとめ（2回目）→生活・総合発表会グループでのまとめ（3回目）の段階で、SDG s との関連を考える学習を位置づける。

○小グループ編成で一人一人が話し合いに主体的に参加できるようにする。

○本時の振り返りだけでなく、次時の活動計画を立てることで、より主体的な活動となるようにする。

(3) ICT機器等の有効活用

デジタル化された e ポートフォリオで、積み上げてきた学習成果や記録を生かしながら、児童自身が自己の考えや情報を整理したり、意見の共有や交換をしたりすることで思考や表現に深まりが見られることが期待される。

○ロイロノートを活用し、タブレットで e ポートフォリオを作成させる。

○ポートフォリオに写真や動画、音声、WEB 資料などを組み込ませる。

○シンキングツールの効果的な活用スキルが身に付くよう指導する。その授業や内容によって望ましいツールを提示はするが、取捨選択をするのは児童になるよう配慮する。

○個人のポートフォリオを作成するだけでなく、グループで共有し活用する。

○作成されたポートフォリオはロイロノートに保存し、いつでも振り返りができるようにする。

7 単元の指導計画（全70時間）

ねらい	問題解決の 流れ □時間	○主な学習活動	[地域・教科との連携]
・ 学習活動を計画し、見通しをもつ	つかむ 2	○オリエンテーション 3年生で学習した桜ヶ丘公園の湧き水の行方を想像し、これからの学習のねらいをつかむ。 ○ウェビングマップ（多摩川のイメージ）	
・ 地域の水の流れと多摩川のつながりをさぐり、これからの活動へ意欲をもつ。	体験する 3	○自然観察 1 〈地域の水の流れ〉 ・ 桜ヶ丘公園～南門前（暗渠へ） 4月下旬 ・ 観察してきたことを振り返る。	・ 理科「雨水のゆくえ」
	体験する 3	○自然観察 2 〈水の流れをたどる〉 ・ 西門～水車公園～乞田川、大栗川 5月下旬 ・ 観察してきたことを振り返る。	
	つかむ 体験する まとめる 4	○多摩川事前学習 調べたいことを考えたり、持ち物の準備をしたりする。 ○自然観察 3 〈水の流れの行方・多摩川中流の自然〉 ・ 大栗川～多摩川 6月上旬 ・ 多摩川原の植物や石、生き物について知る。 ・ 観察してきたことを振り返る。	
・ 自分の課題をもち、これからの学習への見通しをもつ。	つかむ 体験する まとめる 6	○多摩川学習（中流ガサガサ体験） ・ 自然観察の活動をポートフォリオに整理し、今後の自分の活動の目標や準備するものを考えガサガサ体験の計画を立てる。 ・ 「河原の観察」「ガサガサ」を行い、発見や疑問を見付ける。 6月上旬 ・ 調査してきたことを振り返る。	
	調べる 2	○タブレット端末や書籍での調べ活動 体験活動を基に、タブレットや書籍で調べ学習を行う。	
	つかむ 体験する まとめる 4	○多摩川学習（下流） ・ ポートフォリオを整理し、今後の自分の活動の目標や準備するものを考え多摩川下流での活動計画を立てる。 ・ 下流の大師河原での調査活動を行い、発見や疑問を見付ける。 7月上旬 ・ 多摩川の下流と中流を比較し、多摩川を調査するための視点をひろげる。	
・ 多摩川に対		7月～8月 夏季休業中	

して視野をひろげる。		○夏休みの課題「多摩川」研究	
・自分のテーマをはっきりさせ、計画をたて調査を行う。	つかむ 2	○テーマを決める 1 学期の学習や夏休みの課題等を振り返り、2 学期の学習の見通しをもって、自分のテーマを決める。	社会「水はどこから」「下水の処理と再利用」
	調べる 体験する まとめる 1 2	○調査活動 ① ・課題を同じくする仲間と協力して、調査したいことやその方法を考え、活動の計画を立てる。 ・課題別調査 ① 10月上旬 「魚」「鳥」「植物」「石」「水質」などの課題に分かれ調査活動を行う。 ・調査してきたことをふりかえる。	
	調べる 体験する まとめる 7	○調査活動 ② ・課題を同じくする仲間と協力して、1 回目の調査内容を基に、さらに調べたいことや、個人研究の活動の計画を立てる。 ・課題別調査 ② 10月中旬 「魚」「鳥」「植物」「石」「水質」などの課題に分かれ調査活動を行う。 ・調査してきたことを振り返り、ポートフォリオにまとめる。	
	調べる 体験する まとめる 8	○調査活動（上流） ③ ・中流や下流での調査内容、学習内容を基に、上流で調べたいことや、個人研究の活動の計画を立てる。 ・課題別調査 ② 11月下旬 御岳山ロックガーデンにて個人のテーマに沿った調査活動を行う。 ・調査してきたことを振り返り、ポートフォリオにまとめる。 ・個人研究と SDGs との関わりについて考える。	社会「わたしたちの東京都の様子」「とどけよう命の水～玉川兄弟と玉川上水の開発～」 特別活動「SDGs について知ろう。」
	追究する 1 本時	○自分達の学びと SDGs との関連を改めて考える。 ・自分達が研究してきた多摩川の学習は、SDGs とどのように関係しているのかを考えさせる。	特別活動「SDGs について知ろう。」
・多摩川の活動で分かったことを整理	まとめる つかむ 2	○学習計画 ・これまでの多摩川の学習をふりかえり、発表に向けて、何を伝えたいかを決め、自分の考えを	国語 「クラスみんなで決めるには」「調べて話そう、生活

し、まとめの作品をつくるための計画をたてる。		はつきりさせる。 ・ポートフォリオを整理し、まとめの作品をつくるための計画をたて、そのために必要な調べる内容をはつきりさせる。	調査隊「新聞を作ろう」 「伝統工芸のよさを伝えよう」
・発表のための作品作りを行い、発表の準備をする。	まとめる 調べる 6	○発表に向けての作品づくり ・計画にそってまとめの作品をつくる。また、図書資料等を活用したり、専門家の先生に聞いたりして、発表や作品作りに必要な調べ学習を行う。	
・一年間の学習の様子やメッセージを他学年の児童や保護者、地域の人々に伝える。	発信する 6 まとめる 1	○生活科・総合的な学習の時間発表会 ・他学年の児童や保護者、地域の人々に向けて発表会を行う。 ・発表会を振り返り、考えをまとめ、ポートフォリオを完成させる。	
・自分の学びをSDGsにつなげる。	追究する 1	○自分達の学びとSDGsとの関連を改めて考える。 ・12月に考えたポートフォリオを見直す。 ・1年間の多摩川の学習は、SDGsとどのように関係しているのかを考えさせる。	特別活動「SDGsについて知ろう。」

8 本時案（53／70時間目）

（1）本時の目標

これまでの活動を振り返り、自分達が学んできた多摩川の学習がSDG sにどのようにつながっているのかを考える。

（2）本時の展開

学習活動	◆評価規準 () 評価の方法 ・指導上の留意点
1 SDG sについて振り返る。 ・SDG sの17の目標について簡単に振り返る。	・特別活動で取り組んできたSDG sに関する学習を思い出し、17の目標はどんなものなのかを簡単に振り返る。
2 本時のめあてを確認する。 自分達がこれまでに学んできたことと、SDG sとの関係について考えよう。	・SDG sが「世界中のだれもが安定して地球で暮らし続けられるように考えられた目標」であることに改めてふれ、環境問題とも深くかかわっていることから、SDG sと多摩川の学習を関連させるようにする。
3 これまでどんな学習をしてきたのかグループごとに振り返り、SDG sの17の目標との関連を考える。	・国語「リーフレットを作ろう」の学習で、個人で考えたことを材料に話し合う。 ・自分たちが学習したこと（グループごと）を整理するために、グループワークシートを活用する。
4 自分達の考えたことを発表する。	・どうしてその目標が関連しているのか、考えたことや理由も発表する。 ・多摩川の学習でも、グループごとに違いがある場合は取り立てて、深める。 ◆多摩川の学習とSDG sとの関係を考え、関連がある目標を選び、分類することができる。 (グループワーク・ワークシート) ・総合的な学習の時間以外の学習でも、SDG sと関連しているものがあることを伝える。
5 学習のまとめをする。	・本時の学習を受けて、SDG sとの関連について考えたことをロイロノートに振り返りとして書く。 ◆普段の学びがSDG sと関連していることに気付く。(振り返りカード)

9 成果と課題

<成果>

- ・ガサガサ体験や多摩川への調査活動、社会科・総合見学など、実際に見たり体験したりする活動が多く、年間を通して意欲的に取り組むことができた。
- ・SDG sという言葉は知っていたが、詳しい内容は知らない児童が多かったので、動画や簡単な言葉による補足説明を行い、理解につなげることができた。
- ・SDG sと多摩川学習の関連性について、理解を深めることができた。PDCA サイクルを意識し、SDG sとの関連を複数回行ったことも、理解を深めるうえで有効であった。
- ・思考ツールを使用することで、分かりやすく可視化され、自分の考えを分類、整理することができた。
- ・あらかじめSDG sのロゴデータをタブレット端末に用意していたことで、児童がそれらを動かしたり、複製したりしながら、効率よく思考ツールに当てはめることができた。
- ・総合的な学習の時間だけでなく、SDG sが社会科や理科、道徳などの他の教科とも関連していることに気づき、SDG sを身近に感じることができた。

<課題>

- ・調べたことを分かりやすくまとめることはできるが、そこからどんなことが考えられるか、これからどうしていきたいかなど、自分の考えもつことに課題があった。
- ・SDG sと多摩川学習の関連性については理解することができたが、17の目標との整合性など、より高尚な理解につなげるためには、より有効な手立てを今後講じる必要がある。
- ・「こんな多摩川にしたい」「そのために、こんなことがしたい」という思いを一人一人もつことができたが、指導計画上、児童の思いを実現するための活動を実施することが困難な部分もあったので、来年度は、時間や時期を確保しておく必要がある。

総合的な学習の時間～川は自然の宝箱～

自己評価シート

4年（ ）組 氏名（ ）

活動の目標とできるようになったこと		4月				3月			
		4 すごくよく できる	3 できる	2 あまりでき ない	1 できない	4 すごくよく できた	3 できた	2 あまりでき なかった	1 できな かった
ア 多摩川の環境やわたしたちのくらしとのつながりを知る									
(1)	多摩川の生き物について知っている。	11%	22%	27%	40%	63%	34%	2%	2%
(2)	地域や多摩川で調べた内容と、わたしたちのくらしとの関わりに気づくことができる。	8%	21%	29%	42%	30%	56%	11%	3%
イ 調べる方法を身に付ける									
(3)	地いきの人に知りたいことを聞いたり、本やインターネットで調べたりすることができる。	25%	37%	19%	19%	50%	34%	11%	5%
(4)	調査や観察の方法を知り、工夫して調べることができる。	8%	10%	35%	47%	30%	47%	14%	9%
ウ 自分のテーマを決めて、計画を立て、調べる									
(5)	活動を通して分かったことを仲間と伝え合い、自分の考えを深めることができる。	19%	19%	29%	33%	42%	39%	16%	3%
(6)	これから調べようとするテーマを見つけ、計画をたてて調べることができる。	10%	16%	30%	44%	38%	46%	10%	7%
エ 自然の大切さについて自分の考えをもち、思いや考えを人に伝える									
(7)	自然の大切さやわたしたちとのくらしのつながりを考え、仲間につたえることができる。	10%	18%	33%	38%	49%	40%	6%	5%
(8)	ワークシートに、自分の気付いたことや考えたことを工夫してまとめることができた	13%	25%	23%	39%	44%	39%	13%	5%
オ 水の流れや多摩川に関心をもち、意欲的に活動を行う									
(9)	多摩川の自然について関心をもち、調べることができる。	18%	16%	29%	37%	44%	41%	9%	6%
(10)	川の自然を守り、持続可能な社会をつくるのが大切であることに気づく。	26%	21%	18%	34%	64%	27%	9%	0%
カ 協力して自然を守るために行動する									
(11)	調べた結果をもとに、自分にできることを考えることができる。	18%	30%	21%	31%	60%	27%	10%	3%
(12)	自分にできることをやってみることができる。	22%	23%	22%	33%	38%	41%	17%	5%

【考察】

年度当初にとったアンケートと比べると、全体的に「よくできた」「できた」が増えている傾向があることが分かった。ただし、特定の項目に関しては肯定的な意見が微増に終わっている項目もあった。学習計画の見直し、新たな手立て等を、今後も進めていく必要がある。

○アの(1)(2)の項目では、年度初めは「よくできる」「できる」と答えた児童が30%前後だったが、学年末では90%前後と大きく増えたことが分かる。調べ学習では、「魚」や「植物」などの中から一つのテーマを選んでまとめたが、その後、グループで紹介し合う活動を行った。また、生活・総合発表会に向けての活動で、様々なテーマのグループを混ぜ合わせて、グループを再構成したことが、個人では得られなかった知識を増やしていくことにつながったと考えられる。

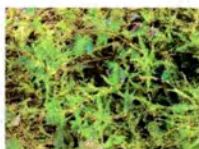
○イの(3)の項目では、年度当初から「よくできる」「できる」と答えた児童が62%となったが、前年の3年生の時にも、このような学習活動を行い、しっかり定着していることが分かる。また、4年生でも引き続き同様な学習をしたことで、年度末では84%の児童が「よくできる」「できる」と答えている。イの(4)の項目では、年度末では77%の児童が「よくできる」「できる」と答え、肯定的な意見が大幅に増えた。学習計画がブラッシュアップされ、児童の思いが実現できた結果と言える。反面、23%の児童は「あまりできなかった」「できなかった」と答えていて、児童が選択した研究のテーマを突き詰めることができる手立てを、同時に検討していくことが必要だと感じた。

○エの(7)と(8)では、年度当初のアンケート結果と比較すると、概ね良い結果が見てとれる。ただし、学年末の結果は自分の考えや思いをまとめたり、伝えたりすることが「あまりできなかった」「できなかった」と答える児童が15%程いることが分かった。分かったことをまとめることができるが、そこから自分はどうか考えるのか、またそれをどのように伝えるかが課題である。

○オ(9)(10)の項目では、年度末の段階で85%前後が肯定的な評価をしており、多摩川学習への興味が高いことが分かる。また、年間を通して、この関心度が下がることがなく、多くの児童が興味をもって学習を続けていたことが分かる。実際に体験したり、観察したりする活動が多いのも、興味や関心が継続している要因ではないかと考えられる。

○カの(12)では、年度当初のアンケート結果と比較すると、概ね良い結果が見てとれるが、23%の児童は「あまりできなかった」「できなかった」と答えている。多摩川に対する思いを具現化するための取り組みは、今年度は行うことができなかったため、来年度は学習計画に組み込めるとよい。

- ・プラスチック
- ・ビニール
- ・吸い殻〈タバコ〉
- ・スチロール〈白〉
- ・ペットボトル
- ・缶
- ・鉄

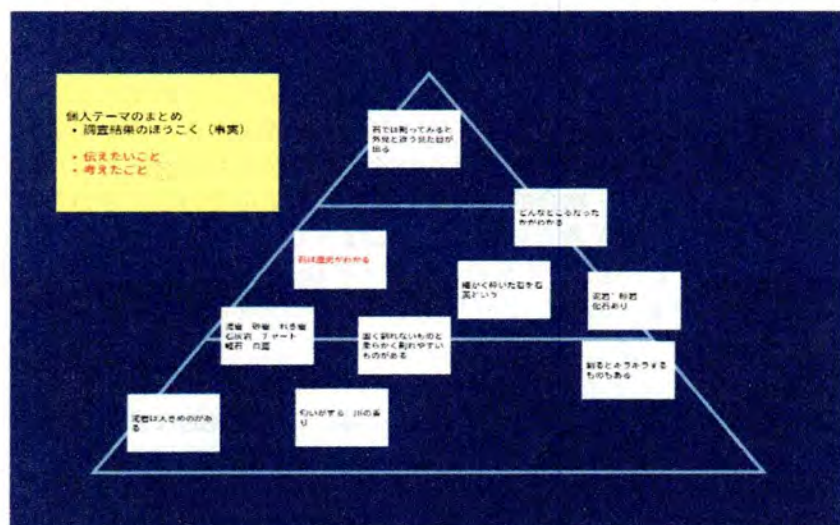


原油の袋↑

多摩川は水がきれいで魚が住みやすい場所です。ですが多摩川の周りはゴミなどが落ちています。多摩川の周りにも色々な虫、植物、動物などがいるので多摩川の周りもきれいにしてほしいです。



＜調べたことを、シンキングツールでまとめた資料＞



＜SDG s と多摩川学習との関連＞

植物は食べれるものや栄養があるものもあるから。



食べてはいけない植物や色々被害を及ぼす植物もあるから。



食べられる植物もあるし、木も含め、植物で色々なものを作られたりしているから少し関係していると思った。



天気による植物の被害もあると思うから。



陸の植物を大切にすることは、豊かさを守るのにも関係すると思うから。

高学年分科会

I 分科会テーマ

社会全体の問題に目を向け、自分の問題として捉えて意欲的に課題解決し、社会の一員として実践や発信をする学習過程の工夫

II テーマ設定の理由

本校の総合的な学習における環境学習及びE S Dへの取り組みは、長年の積み重ねがある。まだ世間では、今ほど環境保全や気候変動などに対する危機感が高まっていなかった頃から、先進的かつ熱心に研究してきた実績がある。各学年での学習では、児童を取り巻く時代や状況の変化に合わせ、柔軟に対応しながら有意義な活動を構築してきた。

そのような中、昨今SDG sが声高に叫ばれ、日々の生活で目にする場面が増えてきている。本校でももちろん、これまでのE S Dに沿う形で、SDG sへの取り組みを教育活動に組み込んでいる。「E S D＝持続可能な開発のための教育」により、「SDG s＝持続可能な開発目標」達成へ。これまで本校の教育が努めてきた未来を考える『人』の育成に、そういった『人々』によって達成すべき目標が提示された。17の目標があり、その一つ一つにあらゆる人々が、自分なりの考えや意図をもち、自分なりの方法でアプローチしなければならない。本校の生活科・総合的な学習を柱に取り組んでいるE S Dを通して、自分たちの未来のためにできることを一人一人が考えられるようになってほしい。誰かがやってくれるだろうではなく、自分自身で危機感を抱いて、何ができるのかを考えられるようになってほしい。

高学年では、積み重ねてきたことを生かせる学習を展開したいと考え、本テーマを設定した。

III テーマに迫るための具体的な工夫

今年度の高学年では、これまでも各自のめあてはあったが、さらに児童個人の「最終的な目標の明確化」を図った。SDG sという具体的な目標が本校のE S Dと結び付いたことで、単元を通して達成したい児童の目標も、より明確にする必要があると感じたからである。

また、その目標に向けて丁寧に学習を積み重ねることが重要と考え、「目標に向けてのスモールステップの学習展開」と、児童が一つ一つ納得したり実感したりするための「活動時間の確保」を行った。例年、展開する学習活動は多岐に渡っている。以前はその関連性を重視した学習が実践できていたが、昨今のコロナの影響もあり、実施できないものが増えてきたために、一見繋がりが分かりづらくなってしまった面もあった。そこで、それぞれの学習や活動がどのような点でどのような関わりをもっているか、また個々の問題や事象がどのように関連し合っているのか、を改め見直し、「学習活動・内容の系統化」を図った。このことにより、児童は自身の目標に向かって、着実に学習を積み重ねていける、と考えた。

第5学年 総合的な学習の時間 学習活動案

5年1組 34名

5年2組 34名

指導者

1 単元名

「連光寺 SATOYAMA プロジェクト」

2 単元の目標

仲間や専門家、地域の人々と関わりながら「SATOYAMA」での探究活動を行うことを通して、課題追究の力を身に付けるとともに、自然と共生する「SATOYAMA」の価値や地域の良さに気づき、自分たちがどのように関わり行動するか考え、行動する。

3 単元について

(1) 単元の捉え方

我が国の国土面積に占める森林面積は約66%で、先進国の中では有数の森林国である。

近年、里山が環境保全の舞台として注目されるようになってきた。里山の樹林は「緑のダム」と呼ばれるように雨水をダムのように貯めて、ゆっくりと川に流す働きや雨水が土壌に浸透する過程で水質が浄化される働き、樹木等の根が表土を安定させることで、洪水や水の枯渇、土砂の流出を防ぐ働きなどいくつかの機能をもっていること、また、里山には樹林だけでなく、草地や水辺といった様々な環境があることから、様々な生物が棲む場としての機能ももっていること、これらのことが注目される所以である。

長い間人々は、里山から作物をはじめとして燃料、肥料、木工品の材料、薬草など、生活のために必要なものを得てきた。昔の暮らしや作業には、自然の働きを損なわずに自然の恵みを楽しむ続けるための知恵や工夫がある。また、人の手を加え続ける事で守られてきた豊かな生態系が存在する。このような人間と自然との共存の姿に、持続可能な社会を考えるためのヒントがあると考え、「SATOYAMA」をクローズアップする単元計画を立てた。

本校で「SATOYAMA」と呼んでいる場所は、かつての「里山」が、森林研究所や都立桜ヶ丘公園として残っている場所である。桜ヶ丘公園では、敷地内の竹林や谷戸田で農作業を体験し、人間と「里山」の関わりについて考えてきた。こうした学習活動を踏襲しながら、より環境保全を考えることに重きを置き、学習を進めたいと考えた。

その理由の1つに4年生の学習との関連がある。4年生で行ってきた多摩川の学習では、川と人間の生活の関わりや、水源林としての森の役割を見つめながら、川の環境を守るために自分たちにできることを考えてきた。ここで育った意識を「SATOYAMA」の学習でさらに高めていきたいと考えた。2つ目は、公園内にある谷戸田の活動に対して目的意識をもって行いたいと考えたからである。谷戸田は、かつて放置され、草に覆われた荒地であった。公園の呼びかけで集まった「雑木林ボランティア」の人々が手を入れ、10年近い年月を経て、もとの景観を取り戻し、最近では、絶滅危惧種の動植物も田や林に姿をみせるようになった。こうした地域の人々と活動をとにする事は、自分達が自然とどのように関わるかを考え、行動する時の足がかりとなってくれと考え、これまで以上に積極的に環境を守る意識を持ち、谷戸田での活動を進めていくこととした。また、2月に行う農作業に「炭焼き体験」があるが、この活動については、6年生で行うエネルギーの学習とのつながりをもたせたいと考えている。

(2) カリキュラム・マネジメント

森林の環境を考えるという視点では、社会科の「国土の地形と特色」「わたしたちの生活と森林」と深い関わりをもつ。国土の地形の場所による違いや特色、森林資源の働きや育成や保護の取り組みの様子、国土に広がる森林が国土の保全や水資源の涵養などに重要な役割を果たしていること、森林の育成や保護に取り組む人々の工夫や努力について学ぶ。

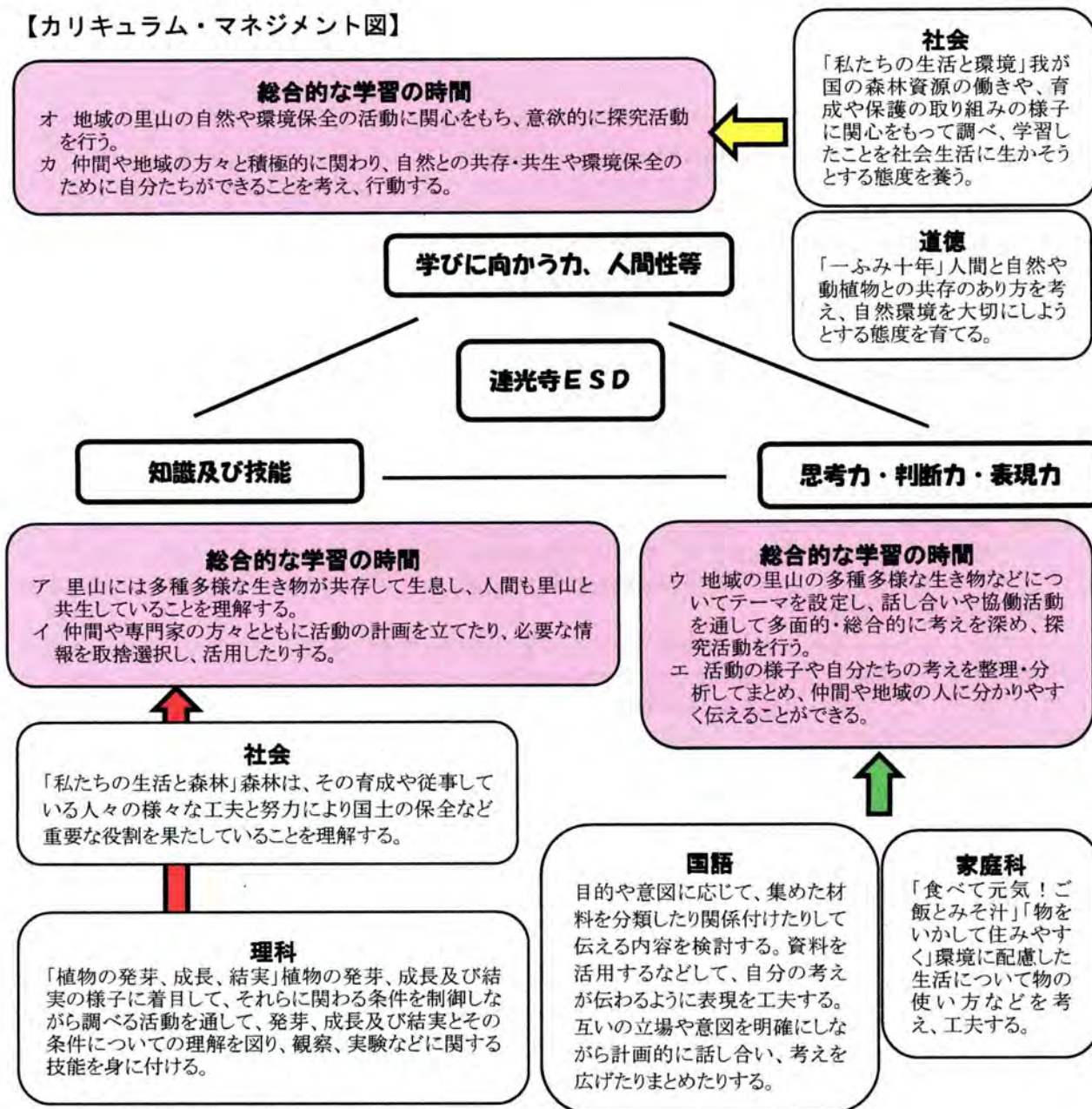
また、自然との繋がりや生命の連続性を学ぶという視点では、理科の「植物の発芽・成長・結実」では、植物の発芽や成長の条件や結実の仕方などを学ぶ。こうした総合的な学習の時間での学習活動が教科で身に付ける力を高めたり、教科での学びが総合的な学習の時間の学習活動を広げたりするなど、相乗効果があると考え。

そして、国語科の「活動報告書」「グラフや表を用いて書こう」「天気を予想する」「想像力のスイッチ

を入れよう」では、活動のまとめや発表の仕方、話し合いや討論などを学び、総合的な学習の時間全体の活動を支えていくことにつながる。その他にも、地域の自然で感じ取ったことなどを俳句や詩を味わう学習に生かしていきたい。国語科では、筋道立てて考える力や豊かに感じたり想像したりする力を養い、日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げることを目標として学習を進め、総合的な学習の時間を通して学んだことや考えたことを仲間や地域の人に伝えたり、自分の考えを深めたりすることにつながっていく。

家庭科の「食べて元気！ご飯とみそ汁」は、谷戸田での体験活動と直接関わりの深い学習となる。また、「物をいかして住みやすく」では、環境に配慮した生活について物の使い方などを考えたり、工夫したりすることで、第6学年に向けた地球温暖化の学習に繋げていきたい。こうした教科の学習と連携を図りながら、本単元の学習を進めていくことで、E S Dの実践力をより高めていきたい。

【カリキュラム・マネジメント図】



(3) 地域とのつながり

学習の舞台となる「SATOYAMA」(森林総合研究所・桜ヶ丘公園)は学校から歩いて5分という立地であり、児童にとっても教室の窓から毎日見ている景色で、身近なものではある。しかし、「SATOYAMA」の中に入って自然と直接触れ合う経験をもつ児童は、多くない。桜ヶ丘公園の中にある竹林や谷戸田は、普段は施錠されている場所である。竹林で筍掘りをする活動や、谷戸田で農作業・観察をする活動の時には、桜ヶ丘公園に協力をお願いしている。ここでの活動を支えてくださるのは「雑木林ボランティア」の方々である。

森林総合研究所は、高尾山にある森林科学園の多摩試験地で、かつては常駐する職員もいたが、現在は研究等を行う場合にのみ職員や研究されている方々が使用する施設である。本校の学習に協力いただいて20年以上経つ。この施設で児童が活動する時は、研究所や葛西臨海水族園などの専門家の方々に協力をいただいている。

【今年度関わりをもつ予定の地域人材・関係機関】

- ・都立桜ヶ丘公園管理事務所
- ・雑木林ボランティア
- ・高尾森林ふれあい推進センター
- ・森林総合研究所
- ・林野庁関東森林管理局

4 単元の評価規準

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
ア 里山には多種多様な生き物が生息していることを理解することができる。 イ 図書資料やインターネット資料等から必要な情報を選択し、活用することができる。	ウ 地域の里山の多種多様な生き物などについてテーマを設定し、多面的・総合的に探究活動を行うことができる。 エ 探究活動を通して分かったことや考えたことをまとめたり、仲間や地域の人に伝えたりすることができる。	オ 仲間や地域の方々と積極的に関わり、意欲的に探究活動を行うことができる。 カ 地域の里山の自然や環境保全の活動に関心をもち、自然との共存・共生や環境保全のために自分たちができることを考え、協力して行動することができる。

5 児童の実態

本校の児童は、日常的に里山の風景の中で過ごしてきている。気には留めていなくとも、自然と身近な里山の恩恵とともに暮らしている。また、本学年の児童は、4年生時の多摩川の学習を通し、自然やそれらを囲むまわりの環境、人々の営みに目を向ける姿勢も育んできている。

しかしながら、新型コロナウイルス感染症の影響で、できなかった体験活動をも少なくない。児童が自分たちにとって身近な里山を肌で感じることは、里山の動植物や環境に興味をもつことにもつながる。そのため、近隣の公園内での探究活動や森林科学園での学習、たけのこ掘りなどで自然に触れ、里山の見方や里山を存分に体験することから学習を始める計画であったが、昨今の状況により、活動には制限がかかってしまった。そういった中でも、児童は、一年生からの学習はもちろん、日頃から親しんできた里山を身近な自然として捉え、限られた中での調査活動や保全活動にも、意欲的に取り組んでいた。

学習への取り組み方としては、自分なりにテーマを設定したり、必要な情報を集めたりすることができる児童は多い。情報を扱うメディアを活用スキルも、これまでに習得してきている。一方で、自分たちの集めた情報を活用してまとめたり、発信したりすることには苦手意識のある児童が多いため、その点にも重点を置いた活動を展開していきたい。

6 単元の指導計画 70 時間

ねらい	問題解決の 流れ□時間	○主な学習活動	教科との関連
地域の森林の様子を探ったり、保全の活動をしている方と交流したりして、愛着をもちながら自分の課題をさぐる。 自分の課題にそって探究活動を行い、分かったことや考えたことをまとめる。	つかむ² 活動³ 調べる² まとめる³ 発表² 活動² 調べる・見学³ 発表² まとめる¹	<前期> 森 林 調 査 隊 20 時間 ○川と森とのつながりについて想起し、これから地域の森を探る意欲をもつ。オ ○竹林を保護するための方法を知り、たけのこ掘りを行う。保全活動①ウ ○桜ヶ丘公園（谷戸田）の様子を見に行く。① ○桜ヶ丘公園の様子を見て、気付いたことや分かったことを個人で整理する。 ○分かったことや新たな疑問を仲間と交流し、考えを深める。エ ○谷戸田での保全活動の様子を知り、田起こし・田植えを行う。保全活動②ウ ○桜ヶ丘公園の様子を見に行く。② ○公園内を散策して分かったことをまとめ、仲間と交流する。エ ○調べたことを基に仲間と交流しながら、自分のテーマを設定する。ウ SATOYAMA 博士になろう 30 時間	社会科 「国土の地形」 我が国の国土の4分の3は山地で、南北に背骨のように連なっている。 理科 「植物の成長」 植物の成長には日光や肥料が関係している。 国語科 「活動報告書」 目的や意図に応じて、軽重をつけたり、取捨選択したりしている。
	つかむ¹ 調べる² まとめる² つかむ¹ 調べる² まとめ² 活動² まとめる¹ つかむ¹ 調べる² つかむ¹	○調査活動の計画を立てる。イ ○探究活動を行う。ウ ○わかったこと、新たな疑問をまとめる ○次回の活動で、調べたいことを考え、活動計画を立てるイ ○探究活動を行う。ウ ○活動を振り返り、グループで交流する。エ ○谷戸田で稲刈り体験を行う。保全活動③ウ ○田起こし、田植え、稲刈りなどの保全活動を通して、学んだことや考えたことをまとめる。エ ○2回の調査活動や3回の保全活動を通して、考えたことをまとめ、さらに知りたいことを明確にする。ウ ○さらに調べたいことを本やインターネットで調べる。イ <後期> ○調査活動②を基に次の調査活動の計画を立てる。イ	社会科 「生活と食料生産」 米づくりは自然環境と深い関わりがある。

里山の定義を調べ、里山についての基本的な知識を得る。	調べる 2 まとめる 2 つかむ 1 調べる 2 まとめる 1 まとめる 1 まとめる 1 発表 1 活動 2	○探究活動を行う。調査活動③ウ ○桜ヶ丘公園の様子を見に行く。③ ○調査活動③でわかったことをまとめる。 ○里山の定義、里山と人とのつながりなどを学ぶ。ア ○里山の定義について、インターネット資料や図書資料を基に調べる。アイ ○調べたことをまとめる。エ ○調べたことを仲間と交流し、里山とはどのような場所なのか、まとめる。エ ○調べてわかったことを報告書にまとめ、里山や環境を守る活動についての自分の考えをもつ。カ ○友達と意見交換をする。エ ○竹林の整備の手伝い（伐採）を行う。ウ（未実施）保全活動④ウ	「生活と森林」 国土の保全や水資源の涵養のための森林資源の重要性を理解している。
環境を守るために自分たちができることを考え発信する。	つかむ 1 まとめる 2 つかむ 1 活動 4 まとめる 2 調べる 3 まとめる 2 まとめる 3 発信する 2	SATOYAMA の未来を考えよう 20 時間 ○今までの学習から分かったことや考えたことを下級生や保護者・地域の方に発信する計画を立てる。イ ○里山の未来について考えをまとめる。カ ○発表会を通じて感じたことを仲間と伝え合い、自分の考えを深める。エ ○多摩の人々が昔、エネルギーとして使っていた炭を得るために行っていた炭焼き体験を行い、人と自然との関わりを考える。保全活動⑤ウ ○専門家の方から、現代の地球環境の課題について話を聞き、自分たちにできることを話し合う。カ ○話し合ったことから、自分たちがすぐに取り組めることを確認する。 ○自分たちにできることを実行する。カ ○1年間の活動を振り返り、自分の考えをまとめる。エ ※6年生の「エネルギー」の学習につながる方向性ができるよう支援する。	環境保全のための国民一人ひとりの協力の必要性を理解している。 社会科 「生活と環境」 環境汚染から健康や生活環境を守るためのわたしたち一人ひとりの努力や協力の大切さを考えようとする。

7 本時の指導

(1) 本時の目標

多摩の人々が昔、エネルギーとして使っていた炭を得るために行っていた炭焼き体験を行い、人と自然との関わりを考える。

(2) 本時の展開 (55～60/70時間)

児童の活動	◆評価規準 () 評価の方法 ○留意点
午前 炭焼き体験 ◇窯づくり 穴掘り→焚口を作る(風向きに注意) →竹を敷く台を設置する→煙突を立てる ◇竹をすき間なく敷きつめる ◇全体を覆うように、落ち葉をかぶせる ◇トタン板をかぶせる ◇土をかけて覆う ◇火入れ 焚口から着火、団扇などで空気を送り込む 午後 森林教室 クラスごとに分かれて講義や実習を受ける。 ◇里山 講師：森林総合研究所 ◇森林・林業 講師：高尾森林ふれあい推進センター ※焚口をふさぐ、煙突を引き抜く(児童下校後)	◆仲間や外部指導員の方々と積極的に関わり、炭焼きの作業に意欲的に取り組むことができている。 (活動の様子、発言、ワークシート) ○服装の確認、道具の使い方、作業の進め方など、安全面での注意を促す。 ○(事前指導)自分の探究活動と関連した疑問点などを、整理しておくよう指導する。 ◆自分のテーマとの関連を見つけ、里山と人間の共存のしかたについて、考えを深めることができている。 (活動の様子、発言、ワークシート) ◆里山に暮らす多種多様な生き物が生態系を作っていること、また人間もそれらと共存していることを理解している。 (活動の様子、発言、ワークシート)

炭焼き・森林教室 スケジュール

8:50～9:20	開校式 ①挨拶 ②スタッフ紹介 ③日程説明・注意事項 ④炭焼き説明
9:20～12:10	炭焼き体験
12:10～12:50	昼食
12:50～13:35	森林教室
13:35～13:45	教室移動(入れ替え)
13:45～14:30	森林教室
14:30～14:50	1日目のまとめ

8 成果と課題

《成果》

- ・「里山」へのアプローチの視点を決めた。《食べる》《遊ぶ》《使う、つくる》《学ぶ》としたことで、単なる生き物や植物の調べ学習にならず、自然と人間の共生や関わりに目を向けた学習になった。→児童の思考の実態に合った視点を与えることができた。
- ・グループングにおいて、上記視点で編成したものと、各自が調べているものの生態上での関連で編成したものとの、二通りの分け方を取り入れた。
どちらにおいても、自身の調べているものに固執せず、自然の中でそれぞれが様々な関わりをもっているという、全体的な捉え方に繋げることができた。
- ・自分が選んだ生き物や植物について、上記視点を切り口として、調べるための活動時間を、昨年度までの取り組み以上に多く確保した。より多くの情報を集め、分類整理しながらまとめることで、情報を収集したり活用したりする力が高まった。また、そこから自分の考えや今後の課題についてまとめることができた。

《課題》

- ・天候その他の影響により、例年同様の実地での活動を行うことが難しかった。上記のように、調べたり話し合ったりする時間を十分に確保したが、実地体験を全て補えたわけではなかったもので、今後そこを埋める手立てを考えていきたい。
- ・各自が捉えた今後への課題について、理想的な手立てを考えるとところまでは到達できた面もあるが、まだ自分事として捉えているとはいえない部分も多く、ここから自分のできることを模索していく活動が必要だと感じる。
- ・6年間の学習の一段階として、本校の掲げるSDGsへの意識の高まりは、児童によってバラバラで止まっているので、来年度はその点を詰めていきたい。

9 ルーブリック

総合的な学習の時間～連光寺SATOYAMAプロジェクト～ 自己評価シート

活動の目標とできるようになったこと		4月				3月			
		4 よくで きる	3 できる	2 あまりで きない	1 できな い	4 よくで きる	3 できる	2 あまりで きない	1 できな い
ア 森や田んぼの環境やわたしたちのくらしとのつながりを知る									
(1)	里山での活動の中で、これまで知らなかった知識や情報を知ることができた	15%	34%	20%	31%	54%	43%	0%	3%
(2)	調べた内容と、地域や社会とのつながりに気付くことができた	16%	37%	30%	17%	40%	56%	3%	1%
イ 調査方法を身に付ける									
(3)	本やインターネットから情報を得たり、話し合って意見をまとめたりすることができた	38%	43%	10%	9%	54%	38%	7%	1%
(4)	実験や観察等の活動をくり返したり、工夫したりすることができた	32%	37%	22%	9%	27%	41%	28%	4%
ウ 課題をつかみ、考え、判断し解決する									
(5)	調べようとする課題を見つけることができた	32%	46%	16%	6%	58%	38%	4%	0%
(6)	課題を解決する計画を立てたり、調べる方法を決めたりして、結論を出すことができた	26%	38%	26%	10%	38%	55%	6%	1%
エ 自然の大切さについて自分の考えをもち、思いや考えを人に伝える									
(7)	里山での活動を通して、自然の大切さやわたしたちとのくらしのつながりを考え、仲間に伝えることができた	18%	46%	16%	20%	58%	38%	4%	0%
(8)	聞いている人が理解しやすいように、自分の想いを分かりやすくまとめることができた	21%	44%	25%	10%	38%	55%	6%	1%
オ 森や田んぼなどに関心をもち、意欲的に関わる									
(9)	自然環境と関わる人たちとの関係に関心をもち、意欲的に学習へ取り組んだ	26%	40%	23%	11%	50%	43%	7%	0%
(10)	今ある自然環境を守っていく大切さに気付いた	50%	34%	10%	6%	33%	55%	9%	3%
カ 協力して自然を守るために行動する									
(11)	調べた結果をもとに、社会にできることを考えた	21%	43%	26%	10%	39%	41%	16%	4%
(12)	社会でできることを計画して実行した	16%	37%	28%	19%	18%	43%	32%	7%

【考察】

全体的にどの項目においても4月（学習開始時）と3月（終了時）時点での「すごくできた」や「できた」のポイントの増加が見られた。様々な体験活動や調べ学習を通して、森林や自然の価値や人間との共生について考えてきた過程で、問題解決能力や自信が向上したことが考えられる。

○アの（１）と（２）の項目では、数値が大幅に向上している。3月時点では90%以上の児童が「よくできる」「できる」と答えていることから、4月時点ではほとんど里山に対する知識や情報がなかった児童も、知識・情報が増加したことが分かる。知識の顕著な向上や地域とのつながりへの気付きは、体験学習の中で専門家から話を聞くことで実感を伴って学んだことや、その上で自らのテーマを追究する調べ学習を行ったことが効果的であったと考えられる。また、生活・総合発表会に向けての活動で、グループ編成を工夫したことで、個人では得られなかった知識を広げることにも繋がった。

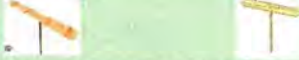
○イの（３）情報収集については、「よくできる」「できる」と回答した児童は80%から90%へと向上したが、その中でも「よくできる」の回答が15%向上している。4月時点でも自信をもって取り組むことができる児童が多かったが、一年間を通して、より自信をもってできるようになった児童が増えたことが分かる。本やインターネットから目的に合わせて必要な情報を選択し、そこから自分で解釈した上でまとめていく経験を重ねたことで、情報収集や活用能力が高まったと考えられる。一方で、イの（４）の項目では、数値の大きな変動が見られなかった。これは、継続して課外学習の時間（観察等の時間）を確保することができなかったからだと考えられる。児童が繰り返し探究しているような活動となるよう、単元計画や実施時期を検討していくことが必要だと感じた。

○ウの（５）（６）の項目では、数値が向上している。3月時点では90%以上の児童が「よくできる」「できる」と答えていることから、ほとんどの児童が自ら課題を見つけ、解決する計画や方法を決め、結論を出すことができたことが分かる。児童が課題を設定する際、単なる生き物への関心に留まらず、全ての児童が自然と人間の共生や関わりに目を向けた課題を設定することができたのは、「里山」へのアプローチの視点を決めたことが効果的であったと考える。

○エの（７）の項目では、数値が大幅に向上している。「あまりできない」「できない」と回答した児童はわずかだった。このことから、生活・総合発表会で自分がまとめた資料をもとに自分の思いを伝える経験から、自信をつけた児童が多くいたことが分かる。また、「たけのこ掘り」や「炭焼き体験」など実際に里山での活動を体験したことで、より伝えたいという思いが生まれたと考える。一方で、（８）の項目では、数値の大きな変動が見られなかった。相手に理解しやすい形で伝える方法を学ぶ手立てを検討していくことも必要だと感じた。

○オの（９）（１０）の項目では、数値が向上している。身近な連光寺地域の豊かな自然資源を生かすことや、実際に連光寺の里山を守る活動をしている専門家と一緒に活動することで、環境に対する見方や考え方が広がり、学習への意欲を向上させることができたと考える。そして、ほとんどの児童が、今ある自然環境を守っていききたいという思いをもつことができた。

○（カ）の（１２）では、数値の大きな変動が見られなかった。一年間を通して環境への意識は高まったが、自分事として捉えているとはいえない部分も多いため、ここから自分のできることを模索していく活動が必要だと感じる。様々な課題を自分事として捉え、未来を切り開いていく力を付けるために、SDGsを関連付けながら学習活動に取り組んでいくことが必要である。



その中で、僕が遊ぶで選んだのは「竹とんぼ」です。まず竹とんぼとは、古くから伝わる子供の遊び道具の一つで竹とんぼを作る創作と、それを飛ばし合って高さや滞空時間を競うという2つの遊び方があります。他にも竹は遊ぶ以外にも使えます。例えば、竹を燃やして「竹炭」という炭にも出来ます。

参考:コトバンク

第6学年 総合的な学習の時間 学習指導案

令和5年6月21日（水）第5校時

多摩市立連光寺小学校 6年1組 25名

6年2組 25名

指導者 長谷川 聡也

平木 知也

1 単元名

「未来に優しいエネルギー」

2 単元の目標

地球温暖化や世界の課題に関心をもち、協働しながら探究活動を行い、よりよい社会をつくるためにできることを考え、地域へ発信しながら行動する。

3 単元について

（1）単元の捉え方

現在あるいは遠くない将来に直面するであろう問題が山積している。この問題には、人類総出で取り組まなければ真の解決に至らないことも、判明している。世界中でこの問題に真摯に取り組む人々がいる一方で、まだ他人事のように考えている人もいる。仲間と協働して課題を解決しながら、よりよい社会を創っていくことは容易なことではないが、そのための力を児童に身に付けることは、教育に求められた大きな課題である。地球温暖化をはじめとした環境問題をきっかけに、世界の課題に目を向けて自分たちにできることを考えていくことは、これまで地域の自然や社会との関りを積み重ねてきた子どもたちだからこそ、これまで身に付けてきた能力・態度を生かしながら意欲的に取り組んでいくことができると考える。

本校は、これまで環境学習、ESDに力を入れてきた。本学年の児童も、低学年より地域の恵まれた自然環境の中、様々な活動を通して環境問題に取り組む素地を培ってきた。4年生では、多摩川を舞台に体験活動や調査活動を通して、自然の循環や生態系、自分とのつながりについて考えてきた。第5学年では、地域の里山をテーマにし、生物多様性や人間と自然の関わりについて考えてきた。さらに、森林の働きや炭焼き体験から、現在地球の抱えている温暖化の問題にもふれている。6年生では、それらを踏まえ、いよいよ自ら世界に目を向け、世界が抱える課題に働きかけていく学習に取り組む。上記のように、これからの課題に対面していける資質を育むことが、何よりも重要なテーマと考え、正確な情報や知識を入手できるよう配慮すること、できる限り児童たちの自主性を尊重することを優先事項とした学習計画を設定した。児童らが多くの情報から課題を把握し、その解決に向けて考え、実践的に活動できるよう効果的にカリキュラム・マネジメントを行い、総合的・横断的な学習展開を設定している。

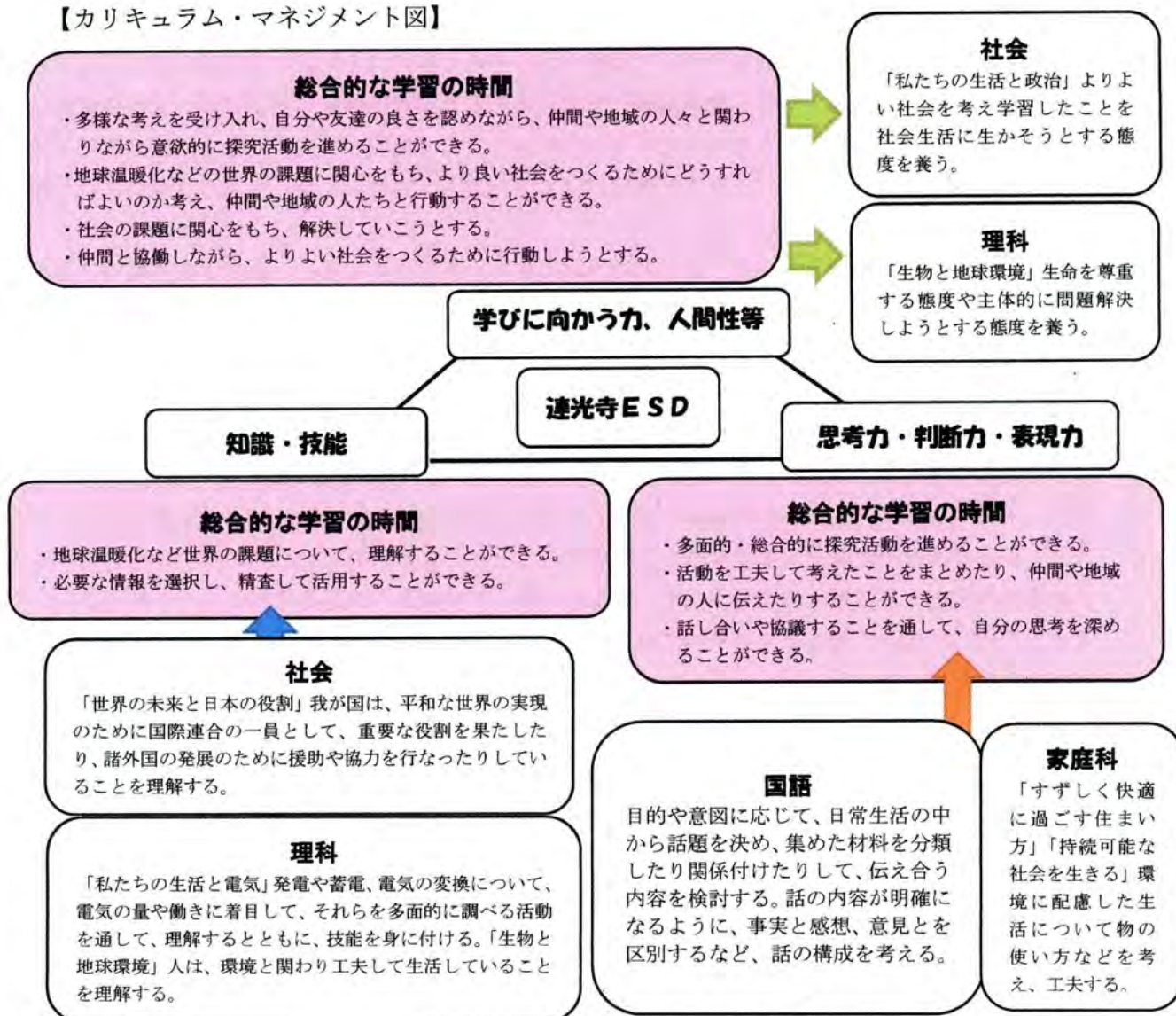
(2) カリキュラムマネジメント

6年生の1年間の学習は、総合的な学習を軸に、各教科各領域間の連携を図っている。環境に対する考察やSDGsへの理解を進める中で、各教科で学んだ知識や技能を応用したり、それぞれの教科で学んだことを、総合的な学習の中で実践していったりできるカリキュラムを構成した。このことにより、知識偏重ではなく、かつ裏付けをもち十分な説得力のある、全人的な成長を促す学習が展開できる、と考えた。

実際に学習を進めるに当たっては、5年生までに習得してきた知識や経験から、理科「私たちの生活と環境」の学習を初めとし、そこに地球温暖化や気候変動・気候危機に関わる校長講話を入れ、SDGsに対する基礎となる知識に触れさせた。その後、自分たちの手で実践できる方法の一つとして、再生可能エネルギーによる発電に取り組む過程を組んだ。発電に取り組む前には、理科「私たちの生活と電気」の学習で、発電の基本的な学習も済ませている。

学習活動の支えとなっているのは、国語科の言語の力だと考える。相手の意図を捉えながら自分の意見と比べるなどして聞いたり、根拠となる事例や体験を基に自分の考えを発表したり、互いの立場や意図をはっきりさせながら議論したりするなどの「話す・聞く」力や、構成を工夫して、学習したことをパンフレットなどにまとめたり、自分の意見を明確に伝える文章を書いたりする「書く」力は、国語科の学習で培われるものであるが、総合的な学習の時間の中で実践的に活用することで、思考力・判断力・表現力をより高めることができると考え、連携した学習を計画している。

【カリキュラム・マネジメント図】



4 単元の評価規準

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
ア 環境や社会の仕組みを理解する。 エネルギーや発電方法等、地球温暖化等、世界の課題を自分たちの生活と関連付けて理解することができる。	ウ 課題をつかみ、考え、判断する。 エネルギーなど世界の課題に目を向けてテーマを設定し、活動の計画を立て、協同活動を通して多面的・総合的に考えながら探究活動を行うことができる。	オ 人・自然・社会に関心をもち、意欲的に関わる。 エネルギーについての学びを通して、地球温暖化など世界の課題に関心をもち、意欲的に探究活動に取り組むことができる。
イ 学び方を身に付ける。 身に付けたことを生かして必要な情報を取捨選択して、精査して活用したり、地域へ発信したりする方法を活用することができる。	エ 価値を見出し、思いや考えを伝える。 よりよい社会をつくるために自分たちにできることを考え、仲間や地域の人々に工夫して発信することができる。	カ 協力してよりよい社会をつくらうと行動する。 持続可能な社会を目指して活動する人々と積極的に関わり、自分たちにできることを考え、協力して行動することができる。

5 児童の実態

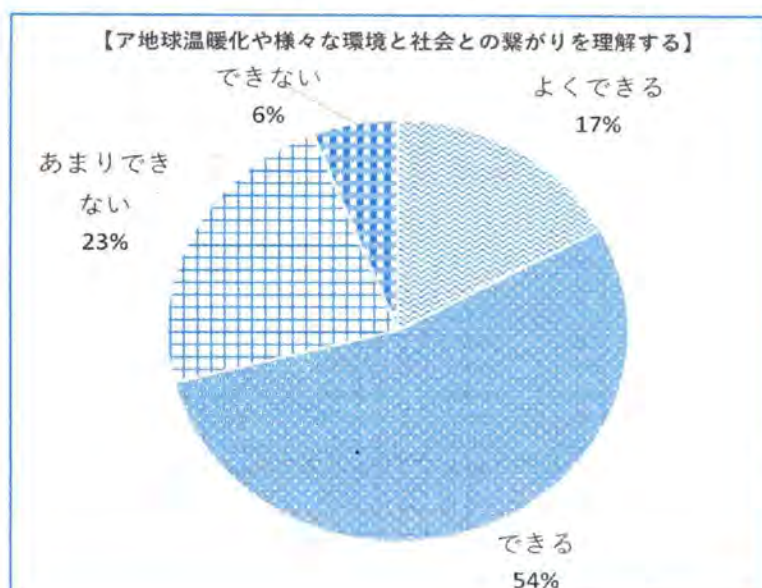
昨年度の5年生時は、田植えや稲の収穫、筍掘り、竹の伐採、炭焼きなど、体験して考える学習に取り組んできた。元々地上にある植物を使って炭を作り、エネルギーとして活用することが、酸素と二酸化炭素の循環により、環境にやさしいエネルギーになることを学んだ。地球温暖化への問題にも少しずつ目が向いてきている。

昨年度の素地から、今年度は日本から世界へ目を向け、世界には様々な課題があることに気が付いた。また、SDGsから2030年に向けて世界が取り組むべき課題として、17の目標が設定されていることを昨年度の6年生が制作したすごろくやポスターにより学ぶことができています。

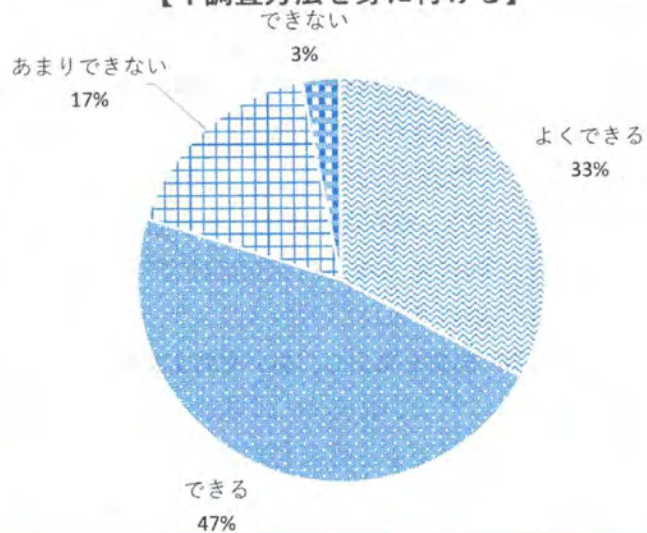
本年度も学校長による地球温暖化の講義を導入とし、再生可能エネルギーについても学んだ。この本単元を通して、世界の課題をより自分の問題として捉え、どうすれば全校、地域に伝えられるか、より良い社会が作れるのかを仲間と共に考え、行動して行く姿を期待したい。

以下は、本単元が始まった4月に集計した児童アンケートの結果である。

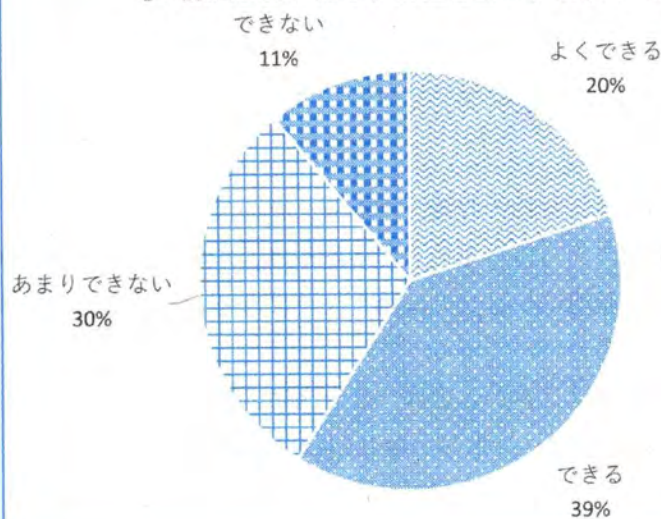
総合的な学習の時間のアンケート
(令和5年4月実施 50名回答)



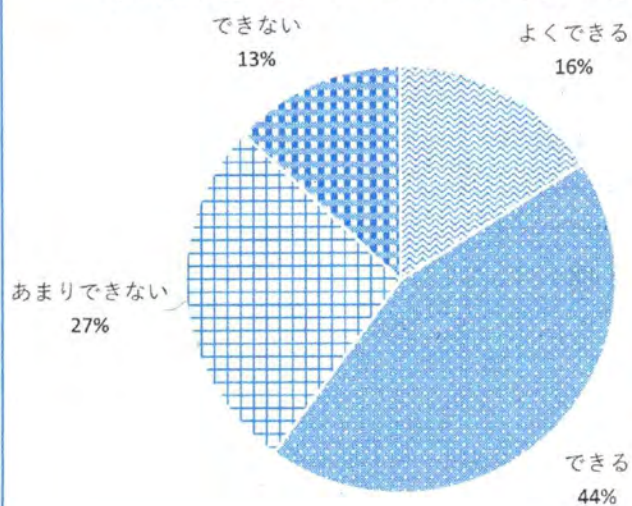
【イ調査方法を身に付ける】

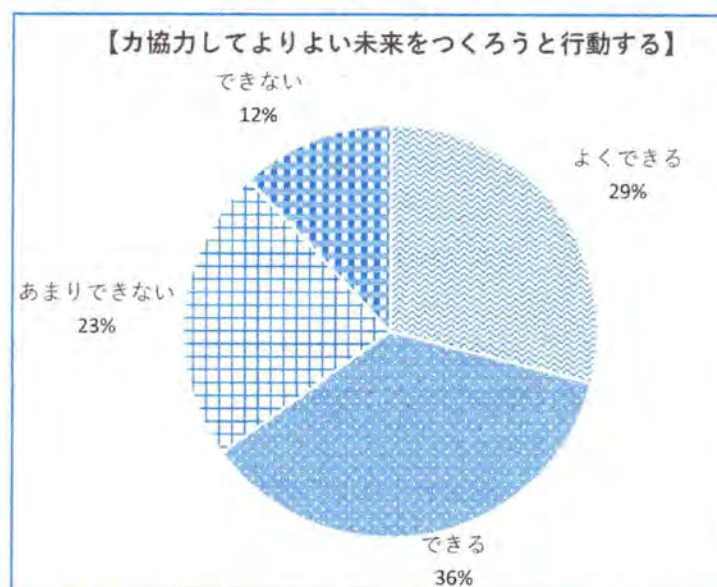
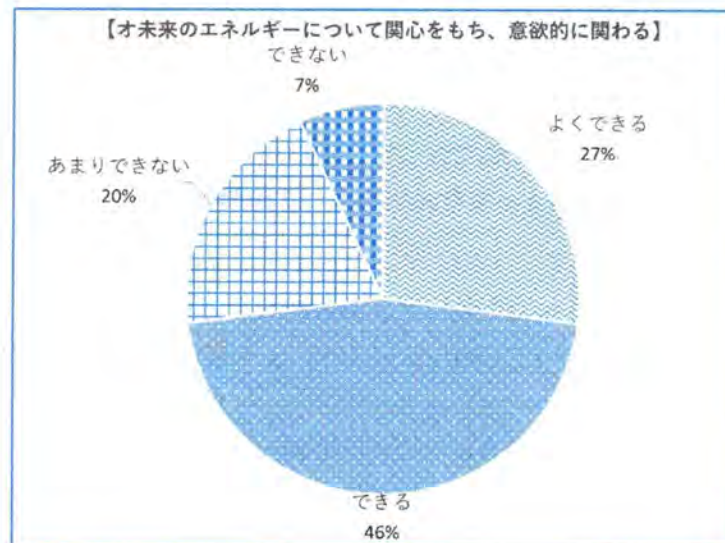


【ウ課題を見だし、計画を立て、解決する】



【エ未来のエネルギーについての自分の考えを伝える】





アンケート結果から、【ア】地球温暖化や様々な環境と社会とのつながりを理解する力、【イ】調査方法を身に付ける力の項目より、エネルギーや発電方法、地球温暖化など、世界の課題について聞いたことがある児童は多く、今起きていることに関心をもっている児童も少なくない。また、必要な情報を選んで集めたり、活用したりすることができる児童が多いことが分かる。これは、今までの学年で様々な経験を通して、身に付けてきた力だと考える。

その一方で、【ウ】課題を見いだし、計画を立て、解決する力の項目より、テーマ設定するのが苦手な児童が多いことが分かる。また、【エ】未来のエネルギーについての自分の考えを伝える力、【オ】未来のエネルギーについて関心を持ち、意欲的に関わる力、【カ】協力してよりよい未来をつくろうと行動する力の項目で、子供たちの自己評価が低い。この3つの項目は、未習事項のため学習を進めるうちに高まってくると考えている。

本単元では、友達と協力して調べまとめるSDGsのまとめ、試行錯誤を繰り返しながら取り組む発電、そして生活総合発表会へ向けての取り組み、最終的には全校へ伝える・広める活動と、他者と関り合う学習活動を多く取り入れながら、行っていく。「SDGs」「発電」について、深く考える経験から、自分たちの未来について真剣に考える意識が生まれると考えた。

6 単元の指導計画 70時間

ねらい	問題解決の流れ □時間 評価基準	○主な学習活動 ・児童の反応	教科との関連
SDGsってなんだろう 7時間			
SDGsについて 関心をもち、世界が 抱える問題につい ての考えをもつ。	つかむ③ アイ 調べる④ アイエ	○SDGsすごろくを体験し、SDGsについて の知りたいことを考える。 ○SDGsカードゲームを行う。(※GIFT協力) ○SDGsについて調べ、世界の課題となってい ることを理解し、調べたことを発表する。	社会 「わたしたち のくらしと日 本国憲法」 SDGsと関 連付けながら 権利について 考える。
ストップ地球温暖化 再生可能エネルギー大作戦 53時間			
世界の問題につい て考える。	つかむ① ウ	○5年生までの学習を振り返り、地域の自然の良 さや大切さを守っていくために必要なことを考 え、話し合う。 ・地球温暖化 ・核兵器 ・気候変動など	国語 「聞いて、考 えを深めよ う」意見と理 由を気を付け て伝え合う。
地球温暖化につい て関心をもち、防ぐ ためにどのような ことができるか考 えをもつ。	調べる⑤ アイ	○※校長から地球温暖化についての講義を聞き、 疑問に思ったことや詳しく知りたいと思ったこと を調べる。 ・地球温暖化による被害 ・地球温暖化の原因となるもの ・地球温暖化を防ぐための取り組み など	
交流により、地球温 暖化についての自 分の考えを深める。	まとめる① エ	○調べたことをもとに、地球温暖化を防ぐために どうしたらよいかを考え、交流する。	
再生可能エネルギ ーの可能性につい て知り、関心を高め る。	つかむ① ウ 調べる④ アイ	○※校長から再生可能エネルギーについての講義 を聞き、調べたい再生可能エネルギーについて考 える。 ・風力 ・バイオマス ・水力 ・潮力 ・人力 ・太陽光 ・地熱 ・波力 ・振動 ・音力など ○再生可能エネルギーについて調べる。 ・水力や風力、太陽光などの再生可能エネルギー を利用した発電の割合はとても少ない。 ・世界には、地形に適した発電所が作られている。	国語 「私たちにで きること」文 章の構成を考 えながら提案 する。

様々な発電方法があることを知り、それぞれのメリット・デメリットを基に未来のエネルギーについての考えをもつ。 再生可能エネルギーの可能性を考えるために課題を設定し、計画を立て、調べる。 これまでの活動をふりかえり、さらに追究したいことをまとめ、自分たちで発電をする。	まとめる 3 エ (カ) 課題設定 2 ウ 考える 2 ウオ 体験する 6 ウ 発信する 1 エ 体験する 18 イエオ ↓ まとめる 6 エ	○調べた発電方法を紹介し合い、それぞれの発電のメリット・デメリットから、多摩市に合った発電方法を考える。(本時) ○※<u>地熱発電・出張授業</u>により、地熱発電のメリット・デメリットを知り、未来に必要な発電になるかを考える。 ○関心をもった未来のエネルギーについて調べ、課題を設定する。 ○ドーナツチャート等を活用して、仲間と交流しながら、自分のテーマを設定する。 ○学習計画を立てる。 ・水力発電 ・風力発電 ・太陽光発電 ○テーマにそって、資料を集めたり実験を行ったりしながら、探究活動を進める。 ○新しく疑問に思ったことや、夏季休業中に調べてみたいことを整理する。 ○活動の中間報告を行い、計画の軌道修正を行う。 ○計画に沿って探究活動を進める。 ○※<u>えねこや</u>の人たちが作った太陽光発電の良さを知り、再生可能エネルギーの可能性について考える。 ○イルミネーションを作り上げることを目標に、グリーンな発電で作った電気をためる。 ※イルミネーション参加 ○探究活動を通して分かったことや伝えたいことをまとめ、下級生や保護者・地域の方々に発信する計画を立てる。	理科 「私たちの生活と電気」 電気はつくったり、蓄えたりすることができる。身の回りには、電気の性質や働きを利用した道具がある。 理科 「生物と地球環境」 家庭科 「持続可能な社会を生きる」
---	--	--	--

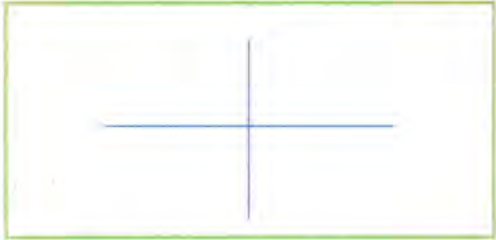
	発信する ³ オカ	○『生活・総合的な学習』発表会 保護者やお世話になった方や地域の方を招いて 発表会を行う。☆実施は2月	
SDGsから見つめる私たちの未来 10時間			
世界には様々な課題があることを知り、自分たちに何ができるか、どのような社会を作りたいかを考える。 発表をふりかえり、自分たちにできることを実行する。	つかむ ¹ アイ 体験する ² アウ 考える 作る ⁴	○地球温暖化の問題から世界が抱える課題に目を向け、SDGsを調べていく計画を立てる。 ※エコプロ に参加し、環境についての理解や関心を深める。(実施は上記※の時期に入る) ○資料を活用し、一番深く考えたい目標を決め、調べ学習を進める。→SDGsの目標において、連光寺小学校の児童ができる目標を考える。 【連光寺SDGsを作ろう】	
これまでの活動から分かったことや考えたことをまとめ、発表し合い、考えを深める。 地域の方々と協働した活動を行ったり、社会で活動する人々の様子を見学したりして、自分たちの取り組みを生かし、社会と関わる大切さを考える。	発信する ¹ まとめる ¹ 実践する ¹	☆ 生活総合発表会 ○全校に知らせる。 ○これまでの学習を振り返り、感じたこと考えたことを伝え合い、考えを深める。 ○学んできたことを生かして、卒業前に自分たちにできることを話し合い、行動する。 (※連光寺小SDGs)	国語 「大切にしたい言葉」書き表し方を工夫して経験と考えを伝えよう。 「今、私は、ぼくは」資料を使って効果的なスピーチをする。

7 本時の指導

(1) 本時の目標

仲間との交流を通して、自分の考えを深め、これからの学習への問題意識を高める

(2) 本時の展開 (20/70時間)

児童の活動	◆評価規準 () 評価の方法 ○留意点
1 本時のめあてや、これまでの学習の流れを確認する。 2 調べてきた発電について伝え合う。 ・調べてきた情報を根拠に。 ・メリット・デメリットを明確に。 ・根拠が曖昧な場合は、質問。 3 共有ノートで座標軸にまとめながら話し合う。 	○調べてきたことを振り返り、自分の考えに生かすよう伝える。 ○メリット・デメリットに重点を置いて交流するよう伝える。 ○縦軸・横軸を何にするかを決める際、例を示す。
多摩市に必要なのは、どの発電方法かを考えよう。	
4 グループごとに、出された意見をホワイトボードにまとめ、発表する。 ① ①風力 水力 バイオマス ② 二酸化炭素がでないから 環境にやさしいから 安全性があるから ① ○○発電 ② 多摩市に必要なだと考えた根拠 5 本時を振り返る。	○メリット・デメリットを根拠に活用するよう伝える。 ○「多摩市」に作ることを想定して考えるよう促す。 ○「根拠」が重要であることを確認する。 ◆根拠をもって自分の考えを伝えることができた。エ（観察） ○根拠については、キーワード化して明記するよう伝える。 ○時間に合わせて振り返りを行い、発表させる。 ◆仲間の意見を聞きながら、自分の考えを深めることができた。ウ（振り返り）

8 成果と課題

《成果》

- ・1年間のスタートに、SDG sに触れ合う活動を取り入れたことで、その後の地球環境を考える学習にスムーズに入ることができた。さらに、再生可能エネルギーで蓄電させる活動を振り返る際、SDG sに関連付けて考えられるようになった。
- ・自分たちにできる再生可能エネルギーの実践に繋げることができた。さらに再生可能エネルギーを知ることにも繋がった。
- ・単元の最後にSDG sについて自分たちなりにまとめる活動を設定した。My SDG sを考えることで、自分にできる身近なこととSDG sが繋がっていることに気付くことができた。

《課題》

- ・SDG sに興味をもったものを調べて追究したことで、一つの目標を深く知ることに繋がったが、帆kの目標と比較したり、関連付けたりすることは難しかったので、それを達成することが今後の課題である。
- ・それぞれの活動の時間配分は、その年度の児童の実態によって、細かな配慮が必要になる。
- ・学校としてSDG sに対する理解が深まっていった際には、改めて学習活動の展開についての検討していかなければならない。また新たなSDG sが提示された際も、それに対応していける学習展開を考えていかなければならない。

総合的な学習の時間～未来にやさしいエネルギー～ 自己評価シート

6年

活動の目標とできるようになったこと	4月				3月			
	4 すごく できる	3 できる	2 あまり できない	1 でき ない	4 すごく できた	3 できた	2 あまり できなかった	1 でき なかった
ア 地球温暖化や様々な環境と社会とのつながりを理解する								
(1) 地球温暖化について、これまで知らなかった知識や情報を知ることができた	18%	60%	16%	6%	78%	22%	0%	0%
(2) 調べた内容と、地域や社会、世界との関わりに気づくことができた	16%	50%	30%	4%	52%	44%	4%	0%
イ 調査方法を身に付ける								
(3) 本やインターネットから情報を得たり、話し合って意見をまとめたりすることができた	42%	40%	16%	2%	70%	28%	2%	0%
(4) 実験や観察等の活動を仲間と考えたり、工夫したりすることができた	28%	48%	20%	4%	58%	36%	6%	0%
ウ 課題を見だし、計画を立て、解決する								
(5) これから調べようとする課題を見つけることができた	26%	40%	20%	10%	36%	50%	10%	4%
(6) 調べたことを仲間と伝え合ったり、話し合ったりして未来のエネルギーについての考えを深めることができた	16%	38%	42%	4%	62%	32%	6%	0%
エ 未来のエネルギーについての自分の考えを伝える								
(7) 調べたことから分かったことや考えたことを基に未来のエネルギーについての考えを伝えることができた	8%	50%	34%	8%	50%	40%	10%	0%
(8) 聞いている人が分かりやすかったり、自分の想いが伝わりやすかったりするようなまとめ方をすることができた	26%	42%	22%	8%	46%	46%	8%	0%
オ 未来のエネルギーについて関心をもち、意欲的に関わる								
(9) 未来のエネルギーに関心をもち、意欲的に活動することができた	24%	40%	32%	4%	50%	34%	14%	2%
(10) 地球温暖化を自分事として捉え、持続可能な社会をつくることが大切であることに気づいた	34%	50%	14%	2%	70%	28%	2%	0%
カ 協力してよりよい未来をつくろうと行動する								
(11) 調べた結果をもとに、自分たちにできることを考えた	40%	30%	24%	6%	60%	32%	6%	2%
(12) 自分たちにできることを実践することができた	22%	40%	26%	12%	38%	48%	8%	6%

【考察】

子供たちは、地球温暖化や再生可能エネルギーに関する知識を習得し、それを他者に伝える能力を高めることができた。学習過程での実践的な体験、協働学習、そして自らの行動を通じた地球温暖化対策への積極的な関与が、子供たちの問題解決能力、そして自信の向上に大きく貢献しました。

○アの（１）と（２）項目は、どちらも肯定的な結果となっている。地球温暖化に関する知識の顕著な向上は、段階的な教育プログラム、実践的学習、意見交流提、これらの教育的効果が組み合わさった結果であると考えられる。子供たちは、学習する過程で地球温暖化と再生可能エネルギーについての理解を深め、学んだことを地域社会と共有することで、地球温暖化への意識を高めることに繋がった。

○イの（３）と（４）の数値が大幅に向上している。子供たちが協力して学習しやすいように環境を整えた。具体的には、実践的な活動とグループワークを通じて、情報収集の技術と意見の整理、実験への取り組み方を意見交流しながら深めいった。このプロセスによって、子供たちの自立性と協調性を育み、課題解決能力の向上に繋がったと考えられる。

○ウの（５）と（６）の数値向上は、子供たちが自分の学びに主体的に関わり、積極的にコミュニケーションを取るようになった結果です。課題発見から解決策の模索、そして、その知識の共有まで、子供たちは協力して学習する過程を経験しました。この変容は、教室内外での実践的な活動が、批判的思考、問題解決、コミュニケーション能力を養い、子供たちの自信と関心を高めたことによるものだと考える。

○エの（６）と（７）の変容は、子供たちがそれぞれテーマした再生可能エネルギーに関する理解を得て、その知識を基に自分たちの考えを構築したことが、数値の向上に寄与したと考える。また、地球温暖化と再生可能エネルギーの重要性について段階的に学び、それぞれのエネルギー源が未来にどのように貢献できるかを探求もしている。さらに、プレゼンテーションやディスカッションの機会が多くあったことで、子供たちは自分の意見を明確に、そして相手に理解しやすい形で伝える方法を学び、実践することができた結果である。

○オの（９）と（１０）の肯定的な結果は、子供たちが未来のエネルギーへの関心を深め、地球温暖化というグローバルな課題に対して自分たちが今できることや未来に向けてどんなことをすべきかを理解したためだと考える。また、学習を通じて、子供たちは再生可能エネルギーの重要性や地球温暖化への具体的な取り組みについて学び、これらの問題が自分たちの未来に直結していることを実感した。この実感は、子供たちの学習に対する関心と意欲を高め、持続可能な社会への貢献に向けた行動を促したことが、数値の向上につながったと考える。

○カの（１１）と（１２）、は、子供たちが学んだ知識を応用し、具体的な行動に移すことで、問題解決への自信と能力が高まった結果と考えられます。特に聖蹟桜ヶ丘駅のイルミネーション点灯式への参加や生活・総合発表会での発表はこの結果によい影響を与えていると考える。これらの機会は子供たちの実践意欲を高め、未来に対するポジティブな影響を与えることができるという自信を育んだと考えられます。このような実践的な経験は、子供たちにとって、学んだことを具体的なアクションに落とし込む力を養う貴重な機会となった。

成果と課題

【成果】

- 連光寺の周りの自然を生かした活動を多く取り入れ、どの学年も特色ある学習ができた。
- 単元計画の節目でSDGsを振り返らせたり、学びと目標を照合するといった具体的な授業展開例を提示してきたりしたことで、連光寺小学校でのESD教育がSDGsと結びついているという認識や実感を、児童にもたせることができた。
- Eポートフォリオの活用方法が明確になったことで、児童が思考を整理したり、まとめに利用したりする意識が高まった。
- 教育アプリ（ロイロノート）の活用、共有ノートを用いて活動することを継続的行ったことで、ICTの基本的・効果的な技能を身に付けさせることができた。
- 探究活動を繰り返し行い、学びのサイクルを提示することで、様々な視点から気づきや問題を捉えることができ、探究学習の意識が高まった。
- ゲストティーチャーや特別講師の先生方と関わったことで、新たな視点や環境について気づきや関心生まれやすくなった。
- 本研究テーマに関して、再評価・再検討を継続的に行ってきたことで、テーマのブラッシュアップを図ることができた。

【課題】

- ・主体的に判断し、思考・判断・表現をしていく力の育成に加えて、どのような手段で考えたことを進めていくのかという、「考えたことを具現化していく力」のアプローチ方法を今後は並行して研究していく必要がある。
- ・学習全体の計画、年間計画のさらなる充実を目指していく。児童の学習が充実するためには、学習計画を毎年検討し、効率的・重点的に行う活動を精査していく必要がある。
- ・SDGsについて、表面的にしか捉えられていない児童もまだ多いため、SDGsを学ぶ機会を生活科・総合的な学習の時間だけでなく、他教科とも意識的、また継続的に紐づける工夫が今後必要である。
- ・外部の方や施設との繋がりをより充実させること。たくさんの経験の中からたくさんの驚きを感じることが大切。そのうえで児童間のかかわりを増やし、フィールドワークの回数を増やしていかないと、自分の課題も明確にしにくく、知りたいことや調べたいこと、新たな発見につながっていきにくい。

連光寺小学校

もうすぐ2年生⑦

95

連光寺小学校

これまでのわたし これからのわたし②⑩

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
	問題解決学習の基礎を身に付ける。学習のねらいをつかむ→予想→自力解決→解決検討→まとめ→学習の振り返り											
算数												
国語	図書館たんけん きょうのできごと	メモをとるとき かんさつ名人になろう	ことばでみちあんない そうだんにのってください	馬のおもちやの作り方	まちのすてきつたえたい							
生活	とび出せ！町のたんけんたい				もっと知りたい たんけんたい				せかいで一つのわたしもおもちや			
	みんな生きている～めざせ、やぎ・うさぎはかせ～				大きくそだてわたしの野さい				これまでのわたしこれからのわたし			
特別道徳科	「より良い学校生活」すてきな学校	「生命の尊さ」アヌーラ	「規則の尊重」黄色いベンチ	「自然愛護」かえってきたホタル	「生命の尊さ」生まれるということ	「規則の尊重」どんなまじりがあるかな	「自然愛護」きらきら	「善悪の判断」どうしよう	「伝統文化の尊重」おせちのひみつ	「努力と強い意志」こうさとびができた	「個性の伸長」どうしてうまくいかぬのかな	「感謝」ありがとうの絵
特別活動	学校図書館の使い方	ユニセフ集会	学級会をしよう									
体育	表現											
音楽	音楽でみんなとつながろう											
図画工作							わくわくおはなしゲーム	パタパタストロリー	日本のうたでつながろう	たのしくうつつと もだち見つけた！		
行事	1年生と遠足				学習発表会				6年生を送る会			
たてわり班活動												

ふれあいと表現

※学びをつなぐ・活かす

単元名 「私たちの 連光寺」 全 70 時間 (体験 32 時間)	
小単元名 「めざせ！桜ヶ丘公園マイスター」 50 時間 (体験 20 時間)	
小単元名 「桜の丘学園の友達と仲良くなろう」 20 時間 (体験 12 時間)	
わたしたちの桜ヶ丘公園 【ねらい】 ○桜ヶ丘公園や谷戸田の自然、歴史への興味関心をもち、体験を通して課題を見つけ、調査探究活動や探究学習を行い、問題解決学習の学び方を身に付ける。 ○学習で知りえたことを基に、自分や地域の人々との関わりを考え、他学年や保護者地域の方にガイドを行い、紹介する。	
【つかむ】 ○身近な自然や季節の変化に触れ、体験活動、調査活動を行いながら、森の見方や触り方、関わり方、地域の移り変わり・桜が丘公園の特徴、仕事、課題を学ぶ。	【まとめる】 ○eポートフォリオを作成し、問題解決に生かしたり、ふりかえりに活用したりする。
【追究する】 ○自分の課題を設定し、専門家から学んだり、インターネットで調べたり、図書資料等を活用したりして調べ学習を行う。	【発信する・行動する】 ○今までの調査で分かったことをガイドマップにまとめ、発信する。 ○互いに調べまとめたことを交流し合ったり、グループで進めた研究内容を発表したりする。 ○活動を振り返り、これからの自分たちにできることを考え発表し、行動する。
桜の丘学園の友達と仲良くなろう 【ねらい】 ○地域の都立桜の丘学園との交流活動を行い、障がい者の理解・啓蒙を図るとともに自分達でできることは何かを考え、桜の丘学園の友だちや地域に対して活動する。 ○これまでの学習でつかったことを基に自分や地域の様々な立場の人の存在を理解し、福祉について考えるきっかけとする。	
【つかむ】 ○地域にある桜の丘学園について知り、学園の友達と仲良くなろうとする気持ちをもつ。 ○地域の施設や設備などに目を向け、ユニバーサルデザインの観点を知る。 ○桜の丘学園の学習プログラムと一緒に参加し、学園の友達を知る。 ○障がいのある人と関わろうとする気持ちをもつ。 ○パラリンピック競技「ボッチャ」を体験する。	【追究する】 ○学園の友達と仲良くなるための遊びを考えて一緒に交流する。
【まとめる】 ○体験したことを振り返り、自分の考えをまとめる。	【発信する・行動する】 ○活動を振り返り、これから自分たちにできることを考え、発表し、行動する。
知識及び技能 ・桜ヶ丘公園探検を通して、地域の自然や歴史、関わっている人々等の特色を理解する。 ・障がいがある人の生活や支援の大切さを理解することができる。 ・図書資料などを活用して調べたりすることができる。 ・ユニバーサルデザインについて理解することができる。	思考力・判断力・表現力等 ・活動を通して、自分や地域、自然との関わりについて考えることができる。 ・仲間と協力して話し合いを重ね、自分の思いを工夫して伝えたり、振り返ったりすることができる。
学びに向かう力・人間性等 ・地域や自然について、様々な立場の人々や仲間と関わりながら、意欲的に探究活動を行い、地域への愛着をもつことができる。 ・地域の中で自分たちにできることや関わり方をみつけ、協力して行動・実践しようとするすることができる。	

【地域人材・関係機関】

○学校図書館司書・地域の図書館 ○雑木林ボランティア ○都立桜ヶ丘公園・公園・園レンジャー ○東京都障がい者スポーツ協会 ○都立桜の丘学園

- 29 -

令和4年度 総合的な学習の時間 第4学年 指導計画

4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月 1月 2月 3月

単元名「川は自然の宝箱」(70時間) 体験活動 24時間

- 【ねらい】
- 多摩川の自然に関心をもって体験活動や問題解決学習を行うことを通して、課題追究の力を身に付ける。
 - 体験活動や問題解決学習を通して地域の自然への親しみや愛着をもち、自然環境を守るために自分達がどのように関わればよいのか考え、行動する。

多摩川で「発見」や「はてな」を見つけよう (27時間)

- 【つかむ】
- 谷戸田や地域の水の流れが多摩川につながることを調べ、自然の様子や多摩川とのつながりを考える。
 - 多摩川での「川の観察」「ガサガサ」「バードウォッチング」等の共通体験を通して、川の自然に慣れ親しみ、課題設定をする。

多摩川博士になろう (25時間)

- 【追究する】
- 自分のテーマを決めて、追究する計画をたて、現地調査や資料等を活用して調べる。
 - 【まとめる】
 - 調べて分かったことを、作品にまとめる。また、調べたことから多摩川の自然や自分たちの関わり方について考える。
 - 【発信する・行動する】
 - まとめた作品をもとに、調べたことや多摩川について考えたことを発表する

多摩川とわたしたち (18時間)

- 【発信する・行動する】
- これからの多摩川がどうあってほしいか、自分には何ができるか考え、仲間と話し合い、実践する。

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
・ 川には多種多様な生き物が共存して生息し、生態系を形成していることを理解することができる。 ・ 専門家の方の話を聞いたり、図書やインターネットを活用して、必要な情報を集めたり、活用したりすることができる。	・ 地域の川の自然環境についてテーマを設定し、活動の計画を立て、話し合いなどを通して考えを深め、探究活動を行うことができる。 ・ 活動の様子や自分たちの考えを整理・分析し、まとめ、仲間や地域の人に分かりやすく伝えることができる。	・ 地域の川の自然や環境に関心をもち、意欲的に探究活動を行うとする。 ・ 仲間や地域の方々と積極的に関わりながら、よりよい環境を作りだすために自分たちができることを考え、協力して行動することができる。

【地域人材・関係機関】

- 多摩市水辺の楽校
- 多摩市水辺の楽校
- 博物館の学芸員
- 大師河原干潟館
- 自然観察指導員
- 地域の野鳥愛好家
- 京浜河川事務所
- 建設技術研究所
- 地域の専門家の方々
- 河川財団
- 東京農工大学

[illegible]

○森林総合研究所 ○都立桜ヶ丘公園管理事務所 ○雄木林ボランティア ○高尾森林センター ○多摩市文化財 ○都立桜ヶ丘公園管理事務所

多摩市立連光寺小学校 R5年度 ESD カレンダー (5学年)

育成を目指す能力・能力 知識・技能 環境や社会の仕組みを理解する。思考・判断・表現等 課題をつかみ、考え、判断して解決する。 学びに向かう力 人・自然・社会に関心をもち、意欲的に関わる。

単元を移動したものの赤太枠

学習活動 能力・態度を育む 知識・技能を支える単元

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
外国語活動	積極的にコミュニケーションをとる態度を身に付ける。											
算数	問題解決学習の基礎を身に付ける。学習のねらいをつかむ→予想→自力解決→解決検討→まとめ→学習の振り返り											
国語	言語活動の基礎を身に付ける。											
社会	わたしたちの国土 (国土の地形)	生活と食糧生産 (米づくり)	生活と食糧生産 (米づくり)	みんなが すげえやすい町	よりよい学校 生活のために	グラフや表を 用いて書く	この本、おすす めします	生活と森林	生活と環境	人の誕生	物をいかして 住みやすく	
理科	植物の 発芽・成長	天気の変 化	メダカの 誕生	台風と 天気	流れる水 の働き	ごはん とみそ汁	里山 未来①	里山の未来を 考えよう② 竹炭づくり	生活 総合 発表会	地球 温暖化		
家庭												
総合	里山調査隊 自己の課題をつかむ・稲刈り田植え	里山調査隊 自己の課題をつかむ・稲刈り田植え	里山調査隊 自己の課題をつかむ・稲刈り田植え	里山調査隊 自己の課題をつかむ・稲刈り田植え	SATOYAMA 博士になろう 里山調査①②・稲刈り・精米等	SATOYAMA 博士になろう 里山調査①②・稲刈り・精米等	里山 未来①	里山の未来を 考えよう② 竹炭づくり	生活 総合 発表会	地球 温暖化		
特別の 道徳教科	自然愛護 「一ふみ十年」	自然愛護 「一ふみ十年」	自然愛護 「一ふみ十年」	自然愛護 「一ふみ十年」	生命尊重 「同じでちがう」	生命尊重 「同じでちがう」	生命尊重 「同じでちがう」	生命尊重 「同じでちがう」	生命尊重 「同じでちがう」	生命尊重 「同じでちがう」	生命尊重 「同じでちがう」	
特別活動	ユニセフ 集会	ユニセフ 集会	ユニセフ 集会	ユニセフ 集会	学級会(展覧会)	学級会(展覧会)	学級会(展覧会)	学級会(展覧会)	学級会(展覧会)	学級会(展覧会)	学級会(展覧会)	
体育	表現 活動	表現 活動	表現 活動	表現 活動	表現 活動	表現 活動	表現 活動	表現 活動	表現 活動	表現 活動	表現 活動	
音楽	身近なものを 見つめて	身近なものを 見つめて	身近なものを 見つめて	身近なものを 見つめて	身近なものを 見つめて	身近なものを 見つめて	身近なものを 見つめて	身近なものを 見つめて	身近なものを 見つめて	身近なものを 見つめて	身近なものを 見つめて	
図画工作	身近なものを 見つめて	身近なものを 見つめて	身近なものを 見つめて	身近なものを 見つめて	身近なものを 見つめて	身近なものを 見つめて	身近なものを 見つめて	身近なものを 見つめて	身近なものを 見つめて	身近なものを 見つめて	身近なものを 見つめて	
行事	集団宿泊	集団宿泊	集団宿泊	集団宿泊	集団宿泊	集団宿泊	集団宿泊	集団宿泊	集団宿泊	集団宿泊	集団宿泊	

ふれあいと表現
※学びを活かす・深める

連光寺小 We are the world (連光寺小 ESD 主題歌)

伝えたい 思い

集団宿泊

伝えたい 思い

集団宿泊

伝えたい 思い

集団宿泊

令和5年度 総合的な学習の時間 第6学年 指導計画

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
単元名「未来にやさしいエネルギー」(70時間 体験24時間)											
【ねらい】★オリ・パラ (環境)											
○地球温暖化の原因が人間のエネルギーの使い方にあることを理解し、その解決のために自然エネルギーの可能性を体験的に追究する。											
○地球環境や世界の課題を解決しようとしている人々と関わることを通して、これからの未来の社会の在り方について考える。											
○これまでの学習をふりかえり、自分たちが築く未来の社会について具体的に考え、総合的な学習の発表会などで提案する。											
SDGsってなんだろう (8時間)											
【つかむ】											
○地球温暖化の現状を知り、現在世界が抱える課題について考える。											
【考える】											
○SDGsの17の目標について、世界の課題と照らし合わせて捉える。											
※SDGsターゲットファインダーを活用する。											
【調べる】											
○SDGsの目標の基本的な内容について調べる。											
→マイSDGs (第一次)											
○調べた内容を伝え合う。											
ストップ地球温暖化 再生可能エネルギー大作戦 (40時間 体験活動18時間)											
【つかむ】											
○地球温暖化の要因の一つに発電が関係していることを知り、解決のためにどのようなことができるか考える。											
【追究する】											
○解決のためにできることを調べる。											
○課題別にグループで、実際に活動したり、調査したりする。											
○活動をふりかえって、疑問に思ったことや調べたいことを整理し、テーマを設定する。											
○テーマにそって、実験方法や調査方法を調べ追究する。											
【まとめる】											
○分かったことや考えたことを研究レポート等にまとめる。											
【発信する・行動する】											
○生活・総合発表会、地球温暖化を阻止するためにできることを話し合う。											
SDGsから見つめる私たちの未来 (22時間 体験活動6時間)											
【つかむ】											
○地球温暖化の問題から世界が抱える課題に目を向け、SDGsを調べていく計画を立てる。→マイSDGs (第二次)											
【追究する】											
○地球環境の悪化を防ぐために取り組む企業や団体の活動を調べるために、エコプロダクツに参加する計画を立てる。											
○エコプロダクツに参加し、企業や団体がエネルギーについてどのように考え、対応しているのかを取材する。											
○専門家の方に取材したり、図書資料やインターネット資料で調べたりする。											
【まとめる】											
○SDGsの目標とする2030年にどのようなまちなちになってほしいか、これまで学んできたことをもとに話し合い、イラストにまとめる。											
【発信する・行動する】											
○持続可能な社会について考えたことを伝える。											
学びに向かう力・人間性等											
・エネルギーについての学びを通して、地球温暖化など世界の課題に関心をもち、意欲的に探究活動に取り組むことができる。											
・持続可能な社会を目指して活動する人々と積極的に関わり、自分たちにできることを考え、協力して行動することができ。											
知識及び技能											
・エネルギーや発電方法等、地球温暖化など、世界の課題を自分たちの生活と関連付けて理解することができ。											
・身に付けたことを生かして必要な情報を取捨選択し、精査して活用したり、地域へ発信したりする方法を活用することができ。											
思考力・判断力・表現力等											
・エネルギーなど世界の課題に目を向けてテーマを設定し、活動の計画を立て、協働活動を通して多面的・総合的に考えながら探究活動を行うことができる。											
・よりよい社会をつくるために自分たちにできることを考え、仲間や地域の人々に工夫して発信することができる。											
【地域人材・関係機関】											
○ガス会社 ○電力会社 ○多摩循環型エネルギー協会 ○えねこや ○エコプロダクツ											

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
能力・態度を育む 学習活動	積極的にコミュニケーションをとる態度を身に付ける。												
	問題解決学習の基礎を身に付ける。 学習のねらいをつかむ→予想→自力解決→解決検討→まとめ→学習の振り返り												
知識・技能を支える 単元	外国語	言語活動の基礎を身に付ける。											
	算数	私たちにできること											
	国語	国際連合											
	社会	日本の歴史 高度成長											
	理科	世界の未来と 日本の役割											
ふれあいと表現 ※学びを生かす・深める	家庭	生き物と 地球環境											
	総合	持続可能な 社会を生きる											
	特別の教科 道徳	発信											
	特別活動	未来にやさしいエネルギー 1 SDGsってなんだろう 調べてみよう 2 ストップ地球温暖化 再生可能エネルギー大作戦 発電に挑戦 3 SDGsから見つめる私たちの未来 マイSDGsを											
	体育	卒業アルバムをつくらう											
音楽	奉仕活動 何かを残そう												
図画工作	6年生送る会の合奏												
行事	卒業関係メッセージ												

お わ り に

副校長 平 間 学

本校は、令和5年度の研究主題を昨年度に引き続き「主体的な思考過程を積み重ねる教育活動の工夫」、サブテーマを『「持続可能な学び」My SDGs』と設定し、全教育活動を見据えながら研究をすすめてまいりました。

総合的な学習の時間を中心に他教科との関連を図りながら、自分なりの課題を見つけ、その解決に向けて持続可能な学びを積み重ね、学び続けようとする児童を育成し、最終的にその結果を持続可能な開発目標（SDGs）に関連づけて確認するという学習活動に取り組んできました。そして、体験を通した問題解決学習を繰り返し行い、児童の意欲・思考力・コミュニケーション力等を培い、私たちが考える育てたい児童の育成を目指して研究に取り組みました。

今年度は、児童が持続可能な学びを積み重ねることによって、自身の学びを自分の課題である「My SDGs」として解決するために学び続けていこうとする児童が育成できるのではないか、という研究仮説のもと、新型コロナウイルスの影響で変えざるを得なかった児童の学びのフィールドである地域の環境や人的環境の見直しを図るとともに、特に第3学年と第5学年のESDカレンダーを見直し、体験活動を再検討して指導方法の改善を図ってきました。児童が問題意識をもって課題を設定し、1人1台端末となったタブレット端末を有効に活用しながら児童が自分の学びをMy SDGsとして位置づける学習を展開することで、持続可能な社会の構築に自分の学びが寄与していることを実感することができ、児童に学びへの肯定感・有用感をもたせることができました。

来年度は、持続可能な社会づくりに向けた人材育成を図るべく、アントレプレナーシップを身に付けるための展開を工夫した児童の育成を図っていきたいと考えています。

さて一年間の研究の成果を本紀要にて発表させていただきましたが、研究はまだまだ多くの課題が山積しております。今後も教職員一同、なお一層の研究の充実と発展に努めてまいります。

最後になりましたが、ご支援を賜りました多摩市教育委員会、河川財団の皆様、ご協力を賜りました諸施設や地域の授業協力者の皆様に、心より感謝を申し上げます。ありがとうございました。

令和5年度の研究に携わった教職員 (◎研究主任 ○研究推進委員)

校長：関口 寿也 副校長：平間 学

1年：1組○ 2組 2年：1組 2組

3年：1組 2組○ 4年：1組 2組◎

5年：1組 2組 6年：1組○ 2組

算数少人数：○ 音楽： 図工：

養護： かがやき学級：

特別支援教室専門員： 学校図書館司書：

教育連携コーディネーター： (講師兼務)

講師：

ピアティーチャー：

スクールサポートスタッフ： スクールカウンセラー：

事務： 用務：

助成番号		助成事業名	学校名
2023-7213-012		川は自然の宝箱 ～わたしたちと多摩川～	東京都多摩市立連光寺小学校
助成事業の主な実施箇所	主な実施箇所 ・多摩川流域、学校周辺の里山緑地 ・多摩川上流、河口干潟		
	※環境学習を数カ所で実施している場合は、代表的な箇所を2カ所程度記載してください。		
	※ダム等の施設を見学した場合は、当該施設の位置図を記入して下さい。		
	(縮尺は 1/50 万～1/100 万程度)		
	※活動場所が「子どもの水辺」、「水辺の楽校」に指定されている場合には、指定場所と名称を記載してください。		
